

ドラゴン

二次元

2D DREAM
MAGAZINE

18
未 満

02
Volume.104
DIGITAL
EDITION

今号の
Special Feature Series
特集

壁尻人間牧場

【えっちマンガ&4コママンガ】

- ぼふえ
- 白う〜風い
- 雨宮ミズキ
- 松波留美
- ふみひろ
- 嘉納あいら

【連載&読み切り小説】

- 上田ながの×弥弛
- でいふいーと×高浜太郎
- 斐芝嘉和×もり苔
- 新居佑×FCT
- 千夜詠×シロクマA
- 狩野景×こはち
- 酒井仁×ハルファミ
- 高岡智空×ねいさん
- 多摩木毅×ひきヒツ

新連載

大人気PCゲーム
Sin光臨天使エンジェルレナの新作が
黒井弘騎×三色網戸のタッグで登場!



試し読み版

カラー
ピンナップ
COLOR PUPPET

ねいさん / FCT
neropass / もり苔

表紙&ピンナップ
テレホンカード
応募者全員
サービス

降下猟兵 ハンナ

いしばよしかず
小説 NOVEL 斐芝嘉和
挿絵 ILLUSTRATION もり苔

迫る触手の群れ!
身動きできぬ女兵士に
逃れる術はない!!



ハンナがリロードを終えたとき、身を寄せていた岩や足下の地面が激しく揺れた。周囲は巨大な石筍が林立して見通しが悪く、どこでなにが起きたのかわからないが、おそらく味方の分隊が目標の爆破に成功したのだろう。

「軍曹！」

岩の上に片腕を出して牽制射撃をしていたカルラが、首だけ捻って呼びかけてきた。

「アイツら、なにか守ってますよ。三体いるのに三体ともあの場合から動かない。数で負けているのは分かっているだろうに……」

「なるほど、背後にある物を死守するよう命じられているかもしれない」

巨大な岩の尖塔が立ち並び、その足下に巨岩奇岩が無秩序に転がっているこの場所は、エイリアンの前線基地。そしてハンナたちは、地球連合空軍降下猟兵中隊、第三分隊。

主力の機甲師団が強襲をかける前に敵の対応能力を減じるため、衛星軌道からの超高高度降下作戦を実施して、その第一段階、すなわち敵陣潜入に成功した直後。

大気圏外からの降下作戦を可能にしたのは、ハンナたちの胸元にある慣性中和ユニット。兵士十人の質量を0にし、地面への衝突ダメージを無効化するという、魔法のような装置だ。

しかし中和できる質量には限りがあるため、降下猟兵はすべて女性。また、装備重量も切りつめなければならず、身体に密着するレオタードのようなコンバットスーツを着用している。

砲弾型のカプセルにひとりひとり詰め込まれて射出され、超音速で大気層を突き抜けて敵陣深くに着地して——いまは、五十メートルほど先の岩陰に陣取った三体のエイリアンと交戦中。

「アイツらがなにを守っているか、確かめたくはあ

りませんか？」

「ニイツと笑うカルラに、ハンナは肯く。

「イルマを連れて右側に回れ。私はジークリットとともに左側へ回り込む。ただし、あれは囮かもしれない。遊撃隊に気をつけろ」

「了解！ イルマ、来い！」

身を屈めて兎のように駆け出していくふたりを見送り、ハンナは副分隊長のアメリカを呼ぶ。

「私とジークリットで敵の左側へ回り込む。残りの者でこの場の維持と牽制を頼む」

「了解、お気をつけて」

短い言葉を受けて、ハンナはジークリットの肩を叩き、ゴロゴロと転がる大きな岩の影を伝って移動し始めた。

持ち込める火力に限りがある降下猟兵は、主力の機甲師団が到着するまでの間、動けるだけ動いて敵の注意を惹きつけ混乱させるのが役目。だからほかの分隊とは合流せず、それぞれが遊撃に徹する。敵に包囲されたらおしまいだから、可能な限り速やかに、かつ的確に行動しなければならない。

（そろそろか……）

敵の銃声の大きさが手がかりにしておおよその距離を把握したハンナは、蹲った熊ほどの岩の影から頭だけを出してサッと周囲を見回した。敵——三体の直立ナメクジ型エイリアンは、十メートルほど離れた岩陰でぬめぬめ身体を折り重ね、銃を持った触手だけを出してアメリカたちと撃ち合っている。気づかれる前に頭を引つ込めたとき、カルラから位置に着いたと連絡があった。

「三体とも照準内。気づかれています」

「よし、こちらからフラッシュパンを投げる。爆発したら銃撃しろ」

「了解」

返答を聞く前にピンを抜いていたハンナは、同じ

ようにフラッシュパンを握ったジークリットと頷き合い、岩越しに大きく投げる。

カッンカッンと硬い音がしてエイリアンの銃声が止み、直後に甲高い爆発音。それを合図に、すでに狙いをつけていたカルラたちがアサルトカービンを連射した。

「敵の無力化を確認。増援なし」

「よし。アメリカ、銃撃止め。ヤツらがなにを守っていたのか確かめてみよう」

岩の影から進み出たハンナは、紫色の体液を流しているエイリアンの屍体を避けてその先に進む。

——が、目を惹く物はない。

高さ十数メートルはあろうかという巨大な石筍と、その根元に転がる大小の岩、石塊があるばかりで、周囲とほとんど変わらない。

「おかしいですね。エイリアンの巣穴でも開いているのかと思ったのに……」

イルマとともに巨大な石筍の根元をぐるりと一周してきたカルラが、残念そうに呟く。ナメクジに似たエイリアンは乾燥に弱く、基地施設のほとんどは地下に作る。だから、火力の弱いハンナたちは巣穴を見つけて侵入しなければ大きなダメージを与えられないのだ。

「我々を引き留めておくための捨て駒だったんでしようかね？」

カルラの問いには答えず、ハンナは巨大な石筍の根元をしばらくジィッと見つめていた。

「……アメリカ！」

「はいっ！」

駆け寄ってきた副分隊長に場所を譲りつつ、目の前にそそり立つ岩壁を指差すハンナ。

「色が違っているだろうか？」

「言いながら指先を上げ、大きく四角く動かす。

「ここにこんな形の穴がある。開けてくれ」

指示したハンナが身を引くと、アメリアがポケットからチューブを取り出し、色が変わっている縁をなぞるようにして焼断火薬を塗り広げていく。

この辺りに転がっている岩はたいいてい、エイリアンが砂と体液で作ったものだ。コンクリートより堅く機関銃の弾でも砕けないが、熱には弱い。

準備を終えたアメリアが小走りで離れ、スイッチを押す。岩壁に眩い光が四角く走り——縁を焼き切られた岩の板が手前にゆっくり傾き、次第に勢いを増して倒れ、地響きを立てた。

石筈の根元にポツカリと開いた、四角い穴。その奥、真つ暗な内部を覗き込むと——。

「……ッ!? 人だ! 少女だ!」

粗末な貫頭衣を着せられた、痩せ衰えた少女たちが十人ほど、真つ暗な広間のあちらこちらにぐつたと横たわっていた。

「イルマ、外を見張れ! ほかの者は全員中に!」

アメリアが指示を飛ばし、ハンドライトを点けながらハンナの傍に駆け寄る。

「どうしてこんなところに……!」

「分からん。怪我はないようだが、みな衰弱している。動かす前に治療薬を射とう」

少女たちの身体を手早く見直し、決断するハンナ。最小限の装備しか許されない降下猟兵は治療薬もひとつずつしか持っていないが、迷わず少女の細い二の腕に射つ。部下たちもそれに倣い、床に倒れている少女の傍へ駆けていく。

「ん……あ……!」

ハンナの腕の中で、ぐつたりとしていた少女が小さく呻き、目蓋を微かに震わせた。

「気がついたか? もう大丈夫」

虚ろな瞳に優しく微笑み、細く軽く氷のように冷たい身体をギューと抱き締めるハンナ。

「お、おか……あ……!」

「ん? なに?」

弱々しく動く少女の口元を見つめ、か細い声を聞き取ろうとして耳を寄せたハンナは——。

「……ずりゆつ!」

「ッ!」

突如目の前に現れた触手に息を呑む。

少女の口から、生臭い粘液に濡れた長い長い肉紐が、激しくのたうちながら飛び出してきたのだ。

「畏かッ!? みんな、離れ……ああッ!」

すべてを言い切る前に、横薙ぎに振られた触手に

数メートルも弾き飛ばされ、背中から壁にぶつかつた。後頭部を強打し、脳震盪が起きる。慣性中和ユニットは一回の降下でエネルギー切れになるため、

衝撃を消してはくれないのだ。

「うわッ!? な、なんだッ!」

「きやああッ!」

部下たちの混乱した叫び声を遠くに聞きながら、(み、みんな……済まな……い……)

ハンナは為す術もなく気を失つた——。

「……ン……うッ!? な、なんだこれはッ!」

意識を取り戻したとき、ハンナは腰を拘束され、前屈みの姿勢を強制されていた。

状況を確認しようとして左右に首を振ると、

「ひあ、ひあ……あ、あああッ!」

「やらやらもうやら……やめてえ……ッ!」

同じように前屈みになった部下たちが、赤らむ頬を緩め、涙をこぼし涎を垂らしながら、激しく首を振っているのが見えた。

「おい、どうしたッ!? しつかりしろ!」

「ぶ、分隊ちよおお……ッ!」

「わ……私、も、もう……らめええッ!」

息を呑むハンナの傍らで副分隊長のアメリアがびくびくつと痙攣。激しく反り返って形良い乳房を跳

ね踊らせる。その向こうにも、さらに先でも——

のめりになった部下たちがしきりに身を振り、髪を振り乱しながら、ああ、ああ、とサカリのついた猫のような惱ましい鳴き声をこぼしている。

「これは、いったい……!」

「苗床だよ。エイリアンのね」

頭の先から聞こえてきた声にハッと顔を上げると、いつからそこにいたのか、ポケットに手をつ突つ込んでいやらしく笑み崩れた男が立っていた。

「な……苗床だっ!? 何者だ貴様!」

「エイリアンの協力者さ。名前はジェイムスン……」

「それだ、覚えてもらおう必要はない」

「エイリアンの協力者と言ったな? では、あそこ

にいた少女たちを掠ってきたのも貴様か!」

「指示を出したのは僕だけど、実行犯じゃない」

「そんなことは訊いていない!」

滾る怒りに突き動かされて必死に藻掻いたハンナは、ようやく気づく。

自分も部下も壁のような拘束具によってまとめ

拘束されている。尻の側にも空間があり——。

「……にゆるん!」

「ひあッ!」

足首に絡みついて脛に巻きつき、膝裏から太腿へと這い上がってくる紐状の冷たいぬめりに、思わず首を棘めて声を上げてしまうハンナ。

「お? なんだ、可愛い声も出せるじゃないか」

「う、うるさいッ!」

嘲笑われて耳の先まで真つ赤になったハンナは、

自由な腕を腰に伸ばし、壁に掌を押し当てて下半身を引き抜こうとした。が、ウエストを取り囲むクツ

ションには意外なほどの弾性と粘性があり、どんな

に力を込めてもすぐに引き戻されてしまう。

期待の変身ヒロイン陵辱ゲームが、ゲームシナリオも手掛けた
黒井弘騎先生により連載開始!!



光臨天使
エンジェル・リスト
—FACE THE DESTINY—
THE NOVEL 第一話 かが光を洗す者

小説 NOVEL くろいひろき**黒井弘騎**
挿絵 ILLUSTRATION さんしよくあみど**三色網戸。**
原作 ORIGINAL **Triangle**

海上都市ゼロポリス。

新たなユートピアを目指し建設された未来型都市は、一度ならざる危機に晒されつつあった。

多元宇宙に覇を唱えるアザハイド帝国による侵略。少女の名は朋衛玲奈——またの名を光臨天使エン

ジェル・レナ。

ゼロポリスに暮らすごく普通の少女であった玲奈は、しかし、数奇な運命に導かれ、魔法のカード「エンシェリウムカード」を手にする事となった。

カードに導かれ、武装天使ラエリスの加護を得た少女は、伝説の戦士——光臨天使として覚醒する。

もともと他人と争うことなど大嫌いな玲奈だったが、その優しさゆえに、大好きなこの街を、そして大切な人々を傷つけられることは許せなかった。

「誰かが苦しむぐらいなら、自分が苦しんだほうがずっとまし」——愛する者を守るため、自らの身を犠牲にしてでも、悲壮な戦いを決意する少女天使。

こうして光臨天使エンジェル・レナとなった玲奈だが、アザハイド帝国の力はあまりに強大だった。

皇子ダイネロやその配下たち、そして数多の魔物たちにより翻られ犯され、清純な心と汚れなき肉体を穢されていく光臨天使。

そしてこの戦いの裏で糸を引くジェネラル・コキエートスは、別世界の前世で玲奈と絆を交わした最

愛のパートナー・魔法人形クローラだった。

過酷すぎる運命と辛すぎる選択の中、それでもレナは決して運命に屈することなく、愛するものを救

うために自らの意志で戦い、新たな未来を切り拓く。そして最後にはクローラを救済し、アザハイド帝国

を退け、かけがえのない日々を取り戻したのだ。

だが、その平和も長くは続かなかった。

なぜなら今、ゼロポリスは再び、新たな災禍に見舞われているのだから。

そしてレナは再び、光臨天使として、この街を守るために戦っているのだ——

※ ※ ※

「うわああ！ ま、また魔物が出たぞお……！」

ゼロポリス商業地区——多くの専門店が軒を連ね、優れた流通機構により常にショッピングが楽しめるまさに近未来型都市に相応しい憩いの場。

今日も多くの市民で賑わっていた区画は、しかし、今や恐怖と混乱の悲鳴に支配されていた。

「グルルル……グシュルル……！」

街に突如現れた、異形の魔物。鋭い爪がアスファルトを引き裂き、のたうつ触手が人々を狙う。

「ひ、い、いや……いやあ、助けて……！」

逃げ遅れた少女の一人が、おぞましい触手の毒牙にかかる——その、刹那。

「待ちなさい！ これ以上の悪事は、このわたしが許しません！」

夜の街に凛々しく響く、澄み切った少女の美声。それは天使の歌声にも似て、魔物に怯える人々の心を希望の光で照らすのだ。

「あ、ああああ……レナ！ 光臨天使エンジェル・レナが、助けに来てくれたんだ！」

「はい！ 皆さん、もう大丈夫です！」

喝采の声に応え、ビルの上から舞い降りる白き影。真珠色のコスチュームに身を包み、ピンク色のポニーテールを翻しながら、少女天使は人々を守るように魔物の前に立ちはだかる。

彼女こそ、運命に選ばれし正義の天使——光臨天使エンジェル・レナ。

今夜もまた市街に現れた魔物を倒すべく、そしてそれ以上に、大切な人々を守るため。

少女天使は、人々の願いに応え現れたのだ。「人々を傷つけ、平和を乱す邪悪な魔物……わたしは、貴方を許すことは出来ません！」

少女をその背中で守りながら、毅然と言いつづエンジェル・レナ。おぞましい魔物に僅かにも引かず、天使は一枚のカードを取り出した。

それは光臨天使の武装オブション——正義の武装精霊が封じられた魔法のカードだ。

「蒼き閃光！ 剣の精霊ローエングリ、その強く気高き魂よ！ 我が願いに応え給え！」

少女の声に応え、武装精霊が顕現する。少女の細腕を守るように装着されたのは、箠手と長剣が一つ

になったかのようなシャープな武装。流線型のシルエットはどこか近未来的でありながら、月光を映し

青白く輝く刀身からは、敵かな神性が感じられる。これこそ、エンジェル・レナに仕える武装精霊の

一つ——剣の精霊ローエングリンの姿なのだ。「お願いローエングリ、力を貸して！」

物言わぬ武装精霊は、人の言葉を語ることはない。だが、レナにはわかっていた。自分と同じく、平和を愛し、悪を許さぬ正義の意志——青白い刃の輝

きで、ローエングリも応えてくれたのだと。「ありがとうローエングリ……いきます！」

「グルルル、グアアアア——！」

おぞましい叫びを上げ、鋭い爪を振り回す異形の魔物。目にも留まらぬスピードで触手が振り回され、爪と触手のコンビネーションが少女を狙う。

「ッ……っせああああああ！」

だがレナには、その軌道がすべて見えていた。ポニーテールを翻しながら、華麗なステップで斬り込む変身戦士。ミニスカートから覗く瑞々しい太もも

が肉感豊かに躍動し、豊かな乳房がぶるんと揺れる。見る者の目を奪うほどに美しくありながら、しか

し人々を守るためどんな邪悪にも真正面から相対する。その勇敢な戦いは、少女が抱く揺るぎない決意

と正義の心の表れだ。澄んだ瞳は真っ直ぐに敵を見据え、真剣そのものの光が眩いばかりに輝いている。

「地上に這い出し悪魔の使い！ その穢れし魂……武装天使の聖なる力によって、正義の裁きを受けなさい！」

ローエングリンの刃が、青白く輝きを増す。武装精霊の聖なる力を、レナはその一撃で解放した！

「いきます！ アブソリュート・パニッシング！」

鋭く弧を描くような剣筋が、夜の闇を斬り裂いた。剣の精霊の力を全開した必殺の一撃は、魔物の触手も牙も、そして本体をも一刀のもとに両断する。

目を奪われるほどの華麗な活躍に、人々は見惚れ、そしてすぐに喝采をあげた。

「ありがとうレナ！ 助けてくれて、本当に……」

「このゼロポリスが平和を保てるのも、レナちゃんのおかげだ。本当にありがとう！」

「あ……い、いえ。わたしは……当然のことをしたまでですから……」

その声に、顔を俯けて応えるレナ。可憐な美貌が赤らんでいるのは、戦いの興奮のせいだけではない。

「わ、わたしは……レナは……大切な人たちを、ゼロポリスの皆を守りたかっただけなの。だ、だから……全部、わたしが決めたことだから……」

言葉を詰まらせながらも、そこに嘘偽りはない。人々の喝采を浴びながら、夜の街にまた姿を消していくエンシエル・レナ。

かつてアザハイド帝国を退け、この街を危機から救ったその力は、まさに圧倒的。しかし同時に、彼女はどこまでも純真すぎる心の持ち主なのだ――。

※ ※ ※

「昨日はお疲れ様でした、玲奈さん」

「あ……うん。クーラちゃんも、いつもサポートありがとうね。犠牲者が一人も出なかったのは、クーラちゃんのおかげだよ」

翌朝。

四人分の朝食が用意されている食卓に腰掛けて、

玲奈は小さな同居人と親しげに言葉を交わしていた。「いえ。すべては玲奈さんの活躍によるものです。わたしは、誰よりも強く、そして優しい玲奈さんのサポートをしているだけなのです」

無機的な、ともすれば冷たくも聞こえる声。その言動に相応しい、ひどく無感情な美貌。

しかし、玲奈は知っている。

この人形のような少女が、どれほど優しく――そして、自分のことを親身に想ってくれているのかを。

「ううん……わたしが頑張れるのは、クーラちゃんのおかげ。本当にありがとうね、クーラちゃん」

「玲奈さん……勿体無いお言葉です……」

黒のゴスロリドレスに身を包んだ、小柄な女の子端正に整った容貌に、透き通るように白い肌。その外見も言動も、まるで人形のような印象を抱かせる。

彼女はクーラ――実際に、彼女は人間ではなく、ある意味では人形と呼ぶに相応しい存在だ。

異世界パレキシアにおいて、光臨天使をサポートするために製造された、マテリオネットと呼ばれる自律稼働型の魔法人形――それがクーラの正体だ。

偶然の出会いと残酷な運命、そして過酷すぎる戦いを共に乗り越え――玲奈とクーラは、主と従者というだけではなく、身も心も許しあうほどの絆を築いている。

クーラは玲奈を愛し、玲奈もまたクーラを愛している――二人は、最高のパートナー同士なのだ。

「ほら！ この朝食だって、クーラちゃんが作ってくれたんだもん。毎日こんな美味しいごはんが食べられるなんて、本当に幸せだよ」

「玲奈さんに喜んでいただけでわたしも嬉しいですが今日の朝食の準備は、わたしだけではなく」

「ええ。わたくしも腕を振りましたのよ？」

「ん……わたしも……姫様のこと、手伝った……」

扉を開けて部屋に入ってきたのは、玲奈と同じ私

立グリーンウオーターアカデミーの制服を来た二人の少女だ。大人びて気品溢れる金髪の麗女に、無愛想な短髪の少女が寄り添う。どちらも日本人離れた美貌と、どこか不思議な雰囲気を持ち主だった。それもそのはず。二人ともクーラと同じく、異世界パレキシアから来訪した異邦者なのだ。

「エリカ姫……アリスア。どうぞこちらのお席へ」

「ええ、ありがとうクーラ」

「コキユートス様……じゃなくって……あ、クーラ……あ。ありがとう……う……」

クーラの言葉に従い、二人もまた食卓につく。

金髪の少女の名は、エリカ・ラ・エティエンヌ。

エティエンヌ王国の王女である彼女は、アザハイド帝国との戦いの中、この地球次元に来訪し、そして伝説のエンシエリアンである玲奈と邂逅した。

生まれつきの品の良さや高貴さを感じさせるその美貌通り、エリカは高潔で、そして気丈な姫君だ。彼女自身も歴戦の光臨天使であり、玲奈を導き、また共に邪悪と戦ったかけがえのない仲間なのだ。

アリスアは、エリカに仕える近衛騎士だった少女だ。一度はアザハイド帝国に屈し、邪悪なる闇臨天使として玲奈とエリカの前に立ちはだかつたこともある。しかし今は正義の心を取り戻し、主君であるエリカと共にこの地球次元で戦いを続けている。

「エリカさん、アリスア、おはよう。今日も朝ごはん、作ってくれたんだ……ありがとう、嬉しいよ」

「ふふ、わたくしは、居候の身ですもの。このぐらいい然ですわ」

「うん……玲奈は、昨日も戦ってたんだし……ほら、たくさん食べて栄養……ありがとう」

「うん。そうだね……ありがとう」

振られた話題に、僅かに表情を曇らせる玲奈。

レナ、エリカ、アリスア、そしてクーラ……

彼女たちはアザハイド帝国を退け、このゼロポ

スを守り抜いた正義の戦士たちだ。
だが今、またしても不気味な影が、この街を覆わんとしていた。

「皆さんのおかげで、市街全域をカバー出来ています。これまで大きな被害はありません。ですが」

「相変わらず、敵は神出鬼没……そして、そんな敵の正体はわからないまま、ですのね」

クローラの分析に、エリカが相槌を打つ。
平和なゼロポリスに謎の魔物が現れたしたのは、ここ数週間の出来事だ。玲奈たちは手分けしてゼロポリス全域をパトロールし、その被害を未然に防いでいる。謎の魔物に遅れを取らぬよう変身ヒロインたちではないが、どれだけ倒しても敵は現れ続けており、その所在も正体も、まったくの不明なのだ。

「はい。わかっていることは、あれらがこの次元の存在ではないということ。異次元のゲートから出現する異界の魔物ということだけです」

「異世界の魔物……。クローラちゃん、エリカさん、何か思い当たるようなことはないの？」

異世界での知恵に頼る玲奈だったが、二人は首を振るばかり。数多の次元を旅してきたマテリオネットにも、事態は掴めていないのだ。

「お力になれず申し訳ありません。ただ……異世界より出現したあの魔物たちの存在は、どちらかと言えば物質的と言うよりも魔力的……具体的に言えば、精霊のような存在だと思われのです」

「精霊……。わたしたち光臨天使の使う、武装精霊みたいな……ってこと？」

「はい。もつとも、武装精霊は光臨天使との契約によって実体化する魔力存在です。あのよう到我欲のままに暴れる魔物とは、まるで異なる存在ですが」

「うん……。そうだよ。武装精霊は正義の心を持った、わたしの大切な仲間たちだもん……。あんな魔物なんかとは、ぜんぜん違うよね」

エンシエリウムカードに選ばれた伝説のエンシエリアンとは言え、玲奈はこの地球世界で生まれ育つた、ごく普通の女の子にすぎない。魔法や異世界に関する知識はなく、あまり実感のわからない話だ。それでも、玲奈は自身の契約した正義の精霊たちにはかけがえのない信頼と絆を感じているのだ。
「わからないことは、考えても仕方ない……わからない。だから……今はとりあえず、わたしたちに来ることをするしかない……」

「ええ、アリシアの言う通りですわ。というわけで、今日のパトロールはわたくしたちに任せて、玲奈は一日ゆっくりと羽根を伸ばしてくださいな！」

今日はアカデミーは休校で、玲奈は学友である美樹とつかさと外出する約束がある。なのでエリカとアリシアは気を利かし、今日は二人だけでゼロポリスのパトロールを行うつもりだったのだ。

「うん……。でも、本当に大丈夫なの？ 必要ならわたしも一緒に……」

「いい……。いつて言ってる。玲奈は、今日は休んで……美樹やつかさにも、よろしく伝えて……」

「玲奈。この街を、平和を大切に思う貴方の心……そして光臨天使としての責任感に、わたくしは敬意を覚えますわ。けれど、常に張り詰めていては糸は切れてしまいます。必要な時にその力を発揮できなくては、本末転倒というものですわ」

「……ありがとうアリシア、エリカさん。あ、でも何かあったらすぐに呼んでね、駆けつけるから！」

玲奈は優しく純真で、自己犠牲の精神も強い少女だ。何かを守るためにいくらでも無理をして、何もかもを背負ってしまう。

そんな無茶を慮り、今日だけはゆっくりと休息して欲しい……。そんな尊い思いを感じ取り、玲奈はありがたう二人の好意に甘えることにした。

「ええ！ それじゃアリシア、いきますわよ！」
「うん、姫様！」
エリカとアリシアは朋衛邸を後にする。空は青く、街は平和そのものだった——その時は、まだ。

※ ※ ※

「さて……こんな時間になってしまいました。今日は結局何も起きませんでしたわね……」

一日かけてゼロポリス全域を廻り、魔物や次元ゲートの気配を追ったエリカとアリシア。

しかし事件は起きず、もう日もとうに落ちた。結局二人は、朋衛邸への帰路についていた。

「うん……。でも、わたし嬉しかった。姫様と二人つきりしているの……。久しぶりで、嬉しかった……」

「ふふ。みんな一緒にいいですけど……。こうして二人水入らずも、たまにはいいものでしたわね」

異世界パレキシアの出身という、複雑な立場の二人だ。この生活にも慣れてきたとは言え、やはりこの世界とは一線を引いているところもあるのだ。

しかしこうして二人きり、それも人気もない夜の公園を歩いているとなれば話は別だ。二人は仲睦まじく手を繋ぎ、かけがえのない時間を過ごす。

「この地球は素晴らしい世界ですわ。こんなにも平和で、優しい人ばかり……。こんな美しい世界に、わたくしは、戦火の種を蒔いてしまった……」

「！ ううん、違うよ姫様……。悪いのはエリカ姫様じゃない……。アザハイド帝国が、全部悪い！」

アザハイド帝国の侵略により滅ぼされたパレキシアの魔法国家、エティエンヌ王国。

エリカはその王女であり、アリシアはその騎士だった。二人は光臨天使として必死に戦ったが、邪悪の力はあまりにも強大すぎた。

「……いいえ。わたくしは守れなかったのですわ……大切な国も、民も……。アリシア、貴方も……」

国民も、両親も、民衆も、騎士団の同胞も。若い

も若きも男も女も、すべてが蹂躪され殺戮された。そんな中、アリシアは帝国に囚われて想像を絶する調教を受け、一度は絶望に溺れ邪悪の傀儡へと身を棄れていたこともある。

そしてエリカはエティエンヌ王国たった一人の生き残りとして、強大な帝国相手に、しかし決して諦めず孤獨な戦いを続けてきた。

いつ終わるともわからぬ戦いの果て、エリカはこの地球次元へと来訪し、そこで運命の少女——玲奈と出会うことになる。

そして、すべてが始まった。

エンシエリウムカードに選ばれた玲奈は光臨天使となり、エリカとともに帝国と戦うことを決意する。

それは、あまりにも辛い選択——平和な世界で過ごしてきた、優しい少女に背負わせていい運命ではない。エリカも、それは理解していた。

だが玲奈は、その優しさゆえに、大切なものを守るために、自らの意志で戦うことを選んだのだ。

「この世界は、玲奈が命をかけて守り通した、かけがえない世界。でも、そんな何物にも代えがたい平和な日々を、今、脅かすものがある……」

「……うん」

エリカにとつても、そしてアリシアにとつても、玲奈はかけがえない友人であり恩人だ。そして玲奈は、今もまだ、光臨天使として戦い続けている。

それは彼女の望んだことだとわかつてはいる。優しさゆえの強い正義感には、敬意を持っている。

だが、それでも——普通の女の子だった玲奈に、これ以上の負担はかけたくない。

エリカもアリシアも、その思いは同じなのだ。

「アリシア……。わたくしも貴方も、大きな過ちを犯しました。大切なものを失ってききましたわ……」

「……うん……」

「けれど……今度こそは！ この平和な世界を……」

愛すべき人々の暮らす地球を、パレキシシアのように蹂躪させはしません。だからアリシア……これからも力を貸してください。共に、戦いましょう！」

「姫様……うん、うん！ わかっている……わたしと一緒に戦う……姫様と、ずっと一緒に！」

過去の闇に囚われることなく、未来の光を見据えるエリカ。その光で自分を絶望の闇から救ってくれた高潔なる主君に、アリシアは心から敬服した。

「わたしも……姫様と思いは同じ。エリカ姫様……コキユートス様……玲奈。わたしのこの力は、みんなのためにある……だから！」

その瞬間。アリシアの瞳に、鋭い殺意の光が宿る。

「……姫様！ そこっ！」

姿はない、気配もない。だが、磨き上げられた暗殺者としての感覚が、その予兆を察知したのだ。

「ええ、わかっていますわ！」

アリシアの言葉より早く、エリカはその場から一歩後ずさった。それと同時に、常に肌身離さず所持しているエンシエリウムカードを取りいだす。

「現れましたわね……。わたくしたちの二人きりの時間を邪魔するとは、不埒な無礼者ですわ！」

「……うん。殺す……わたしと姫様の邪魔をするものは……全部、殺す！」

時空がねじれ、異界とのゲートが開く。次々に這い出してくる不気味な魔物たち。軟体動物じみた触手怪物もいれば、獐猛な魔獣もいる。それは昨今ゼロポリスを襲撃している怪物と同種のものであった。

「相変わらずおぞましい姿ですわね……。アリシア、ここはわたくしただけでやりますわよ！」

「うん……わかっている！ 玲奈の平穏な時間を、こんな奴らに邪魔させたりなんてしない！」

決意を胸に、二人の少女は顔を見合わせ、それぞれにエンシエリウムカードを構えた。

眩く輝く光のカードと、対称的な闇に染まった黒

のカード——力の源は真逆であっても、友を慈しみ、悪を憎む気持ちは同じ。エリカとアリシアは、それぞれ契約したエンシエリウムカードの力を解放する。

「エンシエリウムカードよ……エリカ・ラ・エティエンヌの名において命じますわ！」

気高き決意を胸に、カードに命じるエリカ。高貴なるノブレス・オブリージュの精神に応じ、光のカードはその魔力を王女に分け与える。

「正義を守るため、無辜の民を守るため……。わたくしに、武装天使の聖なる力を……！ わたくしに、光臨天使の光り輝く衣と剣を授けなさい！」

眩い輝きが、夜の闇を照らし出す。この世界での仮の姿——学生としての制服は光に吞まれ消失し、生まれたままの裸体が顕になる。

光輝に照らし出された女性の、なんと見事なことか。すらりと伸びた脚線美に、むっちりとした太ももの瑞々しさ。零れんばかりに熟れ育った巨乳も豊満なヒップも、圧倒的なまでの肉感を見せつけている。学生服から解き放たれたグラマラスボディは、

気高き王女の矜持のままに、誰に恥じることなく自信に満ちた女体美を咲き誇らせていた。

光の中にあつてなお輝かんばかりの女体を、新たな衣装が覆っていく。それは高貴なる血筋と高潔な人柄に相応しい、麗美なドレス型のコスチュームだ。腰回りは締め付けるほどにタイトに、優雅に広がったスカートは満開の花のように艶やかに。胸部は大きく開かれて、溢れんばかりの巨乳は大胆に晒されている。しかしして僅かにも下品な印象を抱かせないのは、王女としての威厳と、天使としての神性ゆ

えか。汚れなき純白と透き通ったブルーの彩色は、見る者の心を洗うほどに鮮烈だ。

「光臨天使……エリカ・ラ・エティエンヌ！ 気高き決意と覚悟を胸に、今ここに降り立ちます！」

高貴なる決意を胸に、名乗りを上げる光臨天使。

腰まで伸びたベリーロングのプロンドがぶわりと広がり、天使の翼を思わせる髪飾りが頭頂を飾る。

変身を終えた王女——光臨天使エリカ・ラ・エティエンヌ。タイトなドレスから零れんばかりの美巨乳は、揺るぎない自負と覚悟に満ち満ちていた。

「エンシェリウムカード……。わたしが求めたのは……力。憎悪と復讐の力……呪わしき、闇の力」

アリシアが手にするのは、漆黒に染まった闇のカード。かつて絶望に堕ちた少女が、復讐を誓い手にした、罪と過ちの象徴だ。

「けれど、今は……！ 大切なものを守るために……その力が、欲しい……！」

だがアリシアは、今もその力を使い続けている。なぜなら、彼女は逃げなかつたからだ。過去の自分からも、そして、今の自分からも。

その力が善であれ悪であれ、アリシアは恐れない。無力ゆえの悲劇と屈辱を、二度と繰り返さないために。今、少女は自ら望み、闇の力に身を染める。

「だから……よこせ！ 力を……闇を……全てを滅ぼす、闇臨天使の刃を！」

夜よりもなお黒い、闇よりもなお暗い。無数に舞い降りる鴉の羽根が、少女の身体を包み込んでいく。少女が契約した、復讐と闇の精霊イルージオが、主の望みに応じ、闇の衣を纏わせているのだ。

すべてを飲み込む不定形の闇に、平穏な日常の象徴が食い破られていく。学生服は見る間に闇に呑まれ、白く透き通った少女の裸体が頭隠された。

ともすれば美年齢よりも幼いと取られない、あどけない童顔のアリシアだが、頭にされた裸体の肉感はいびく豊かで、そして淫らなものだった。

両の乳房は弾けんばかりにむちむちと肉をつけ、それでいて蕩けるほどに柔媚。太ももお尻もむちむちりと肉感的で、息を呑むほどに蠱惑的だ。

いかにも男好きのするグラマラスボディもまた、

アリシアにとつて罪と過ちの象徴——アザハイド帝国に敗れ虜囚となったアリシアは、筆舌に尽くしがたい陵辱と調教の限りを尽くされ、その肉体はたつぷりと開発されてしまっている。雄を誘うためにあるような媚体は、忘れられない快楽の痕なのだ。

そんな淫ら極まる肉体を隠すように、闇の翼が形を変え、少女の全身を覆っていく。闇臨天使が纏うのは、つま先から首元まですべてを覆う、黒色の密着型ボディスーツだ。肌に吸い付くようなきついつい締め付けにより、ただでさえグラマラスな肢体はきゅつとシェイプされ、いっそう蠱惑的なシルエツトを描き出す。だが闇臨天使の美しい肢体は、隅々にまで闇の精霊の力を宿した、危険な凶器なのだ。

「闇臨天使……アリシア。わたしの……わたしたちの邪魔をする者は……全て、殺す……！」

赤い瞳が、刃のようにキラリと輝く。闇の衣に身を包んだもう一人の変身ヒロイン——闇臨天使アリシアは、狂気と殺意を頭に敵に相対する。

「グルルル……グルル、ニジュルル……！」

不気味な粘音を立て、無数の魔物が空間から這い出してくる。気づけば異界のゲートからは数え切れないほどの魔物が溢れ出し、二人を覆うように閉んでいた。おぞましい粘液を撒き散らしながら、無数の怪物が一斉に二人へと触手を伸ばす。

「アリシア！ そちらは任せましたわ！」

「うん……任せて姫様！」

エリカとアリシアはそれぞれ背中を合わせ、周囲から殺到する魔物へ相対する。

迫りくる邪悪の群に対し、二人の変身ヒロインは、それぞれ武装精霊のカードを引き抜いた。

「輝ける光の化身にして万軍の主！ 剣の精霊王リーネシャヘルよ、エリカ・ラ・エティエンヌの名において命じますわ……わたくしに、邪悪を断罪する正義の剣をお与えなさい！」

眩い光が形をなし、巨大な剣となつて顕現する。白手袋に覆われた細指が、それを力強く握りしめた。

光臨天使エリカが召喚した武装精霊は、剣の精霊王リーネシャヘル。光り輝く刀身は、使用者の背丈をも超えるほど。神々しい輝きと威厳溢れるその姿は、異界の姫君が振るうに相応しい高貴さだ。

「さぁリーネシャヘル！ お見せなさい、貴方の真の力を……共に舞いましょう、悪を滅ぼす断罪の剣舞を！」

規格外の巨大武器を、華麗に片手で振るってみせる変身王女。華麗なステップで舞いながら、怪物たちの攻撃を見切り、受け止め、そして流れるような所作で斬りつける——その見事な剣舞は、まるで以心伝心のパートナーと踊る宮廷ダンスさながらだ。

「いきますわよリーネシャヘル！ これで……フィナーレですわ！」

邪悪を滅ぼす正義の光が、煌々と輝きを増す。エリカは大きく剣を振りかぶり、見事な跳躍とともに必殺の一撃を振り下ろした。

「受けなさい、ノーブル・エクスキューション！」

ぶるんつ！ とたわわな巨乳を揺らしながら、光の大剣を振り下ろす金髪の天使。必殺の剣舞を受けた触手たちは、光の粒子となつて消滅していく。

華麗な舞踏の背後では、黒衣の天使が、殺戮の宴を練り広げていた。

「無限の暗黒に揺蕩いし虚無の王……闇と復讐の精霊イルージオ！ その憎悪と絶望の力を、我が刃に宿らせたまえ……！」

アリシアの構える双剣が、闇の色に染まっていく。それは夜の闇よりもなお濃い、光すら飲み込む真の闇。恐るべき闇の精霊イルージオが、契約者の命に従い、その力を刃に宿らせたのだ。

「いくよ……イルージオ……クク、クク……！」

の身に宿した闇臨天使は、肉体だけでなく精神までもその狂気に影響される。湧き上がる殺戮衝動のまま、アリシアは肉食獣の俊敏さで敵に斬り込んだ。

「殺す……殺す、殺す、殺す殺す！」

真つ赤な眼光が残光を描き、闇色の刃が空を斬り裂く。激情に任せ防御を顧みないアリシアの攻撃は、峻烈にして無慈悲。目にも留まらぬ素早さで闇の天使が戦場を舞い、血飛沫の雨が噴き上がる。

「クク……ハハハ、ハハハハハッ！ 消えろ……闇に還れ！ ヴォイド・デイスペアー！」

闇と復讐の精霊イルージオ、その実態はすべてを飲み込む闇そのもの。その一撃を受けた魔物は闇に食われて取り込まれ、悲鳴を上げる暇さえなく、無慈悲に命を刈り取られていく。

「アリシアッ！ いきますわよ、合わせなさい！」

「うん、姫様ッ！」

光と闇——エリカとアリシア。

二人の天使の戦いぶりはまるで正反対、けれど悪を憎む正義の心は一つ。

お互いを信頼しあつた抜群のコンピネーションで、二人は次々に謎の敵を殲滅していく。

「ククッ！ これで……っ！」

「フィナーレですわっ！」

断罪の剣舞と殺戮の嵐が、同時に魔物たちを斬り裂いた。数十体もいた魔物たちはみるみる数を減じ、死体の山が積み重なっていく。

だが——しかし。

「オオオオ……グジュルルル……」

切り飛ばされた触手がそれだけで動き、両断された魔物が歪な姿勢で立ち上がる。今まさに倒されたばかりの軀もスタスタの身体を引きずり起こし、再びヒロインたちに襲いかかってきた。

「！ こいつら……殺してやったのに、まだ！」

「これは……何者かに操られていますの!? 嫌な魔

力を……邪悪な力を感じますわ！」

再び次元の扉が開き、巨大な何かを現わす死してなお眠ることさえ許されず、操り人形として死骸を役する——あまりに忌々しい、唾棄すべき魔法の使い手が、次元の壁を破つてその姿を現わした。

「愚かなる定命の存在よ……頭を垂れよ。貴様らは皆、我に操られる舞台人形に過ぎぬのだ……」

人のモノではない、尊大な声が響く。同時に、何もないはずの空間が歪み、そこからありえざるモノが実体を現わした。

不気味に蠢く触手が無数に這い出し、おぞましくのたうち回る。続いて何本もの巨大な腕が伸びだし、小山のような巨人の上半身が姿を見せた。

「……これは……この、魔力は……！」

「……リーネシャヘルが……震えている……？」

これまで相手取っていた魔物たちとは桁違いのプレッシャーに、緊張感を漲らせる二人の天使。エリカの手にした大剣の精霊は、主に警鐘を鳴らすかのように小さく震えていた。

「光の精霊王リーネシャヘル……ふん。この次元ではそのように矮小な姿で、懦弱な人間に身を委ねているのか。次元を異にするとは言え、同じ名と因果を持つ者として許しがたき侮辱……万死に値する」

傲岸な声で語る、巨大な魔物。その姿のなんと冒瀆的なことか。無数の触手で構成された巨体に、人間に似た筋骨隆々の上半身。だが頭部は頭足類そのもので、無数の触手がうろうろと蠢いている。

あまりにもおぞましい、この世ならざる異形の巨人——いや、放たれる強大な魔力とその威容は、もはや邪神とも呼ぶべきものだった。

「何を言っていますの!? 貴方は、一体……！」

姿を見せた巨大なる邪神に、エリカは信じられな

肌で感じる魔力、直感で伝わる存在感。それは、エリカが知らないものではなかった。

ゆえに、聡明な王女は、この怪物の正体が何であるか、すでに理解してしまっていたのだ。

「この魔力……気配……まさか!? そんなはず……ありえせんわ……！」

それでも認められないと、手の中で震えるリーネシャヘルと、そびえ立つ異形の巨人を交互にみやるエリカ。しかしそれが放つ強大な魔力、そして偉大な存在感、自分が手にする光の精霊王と同じ——

「そう。我こそはリーネシャヘル。邪精霊を統べる異界の王の一人……邪精霊王リーネシャヘルだ」

異形の邪神は、傲岸たる威厳のままに名を告げた。「邪精霊……リーネシャヘル？ なにそれ……リーネシャヘルは姫様と契約した光の武装精霊。お前みたいな化物が、リーネシャヘルのはずが……」

「愚かな人間には理解できぬか、いや理解できても信じられぬか？ だがお前の主は、腐つても王族だな。人間にしては多少は知恵があるようだ」

「え……姫様？」

邪精霊の王を名乗る者の言葉に、アリシアはエリカに視線をやった。エリカは強く大剣を握りしめたまま、緊迫した面持ちで応える。

「邪精霊……正義の武装精霊が、欲に溺れ邪悪に堕ちた存在。まさか、実在していたなんて……！」

エティエンヌ王家で幼少より教えを受けてきた魔法学や精霊学、そして旧き伝承の数々。

その中の一つを、エリカは思い出していた。純粹なる武装精霊は、その性格を使い手の性質によつて大きく左右される。

だがもし、その使い手が、精霊の本質を捻じ曲げるほどに邪悪な存在だったとしたら……？

そんな邪悪な使い手に使役され、狂い墮落し変わり果てた、欲に染まりきった武装精霊……人の業が

初めまして
ユミエルお姉ちゃん
マリエルママっ!!

私が始原にして
終末たる影魔の王
オメガエクリプスだよ♪

よろしくね!

王より姫の方が
可愛いかなあ?

って...

駄目!!
立てっ! 立つのよ
悠美っ!!!

ガガ

うんっ そうだ
やっぱり姫にしよう!
影魔姫っ

今倒さなきゃ...
皆を守りなきゃっ

止められ
なかった...っ!

ッ
るっ

聖天使ユミエル

カオティッククロード

第4話 闇に堕ちる天使

影魔姫オメガエクリプス!!
可愛いよね♪
ママユミエルお姉ちゃん

!?

!!
!!

漫画 COMIC 白う〜風い
くろいひろき
原作 ORIGINAL 黒井弘騎

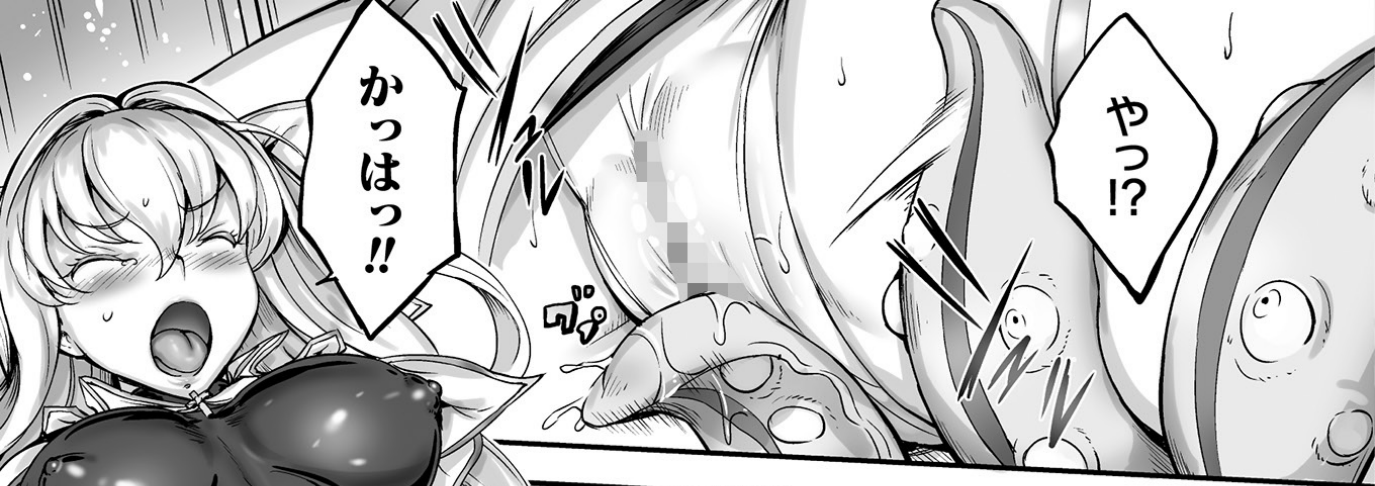
ダメ…っ何て
圧倒的な力なの!?

ねえ
知ってる?
わたしね

あの時ママが
犯されたエクリップス
全ての能力を引き
継いでるんだよお

体が動いて
くれない!





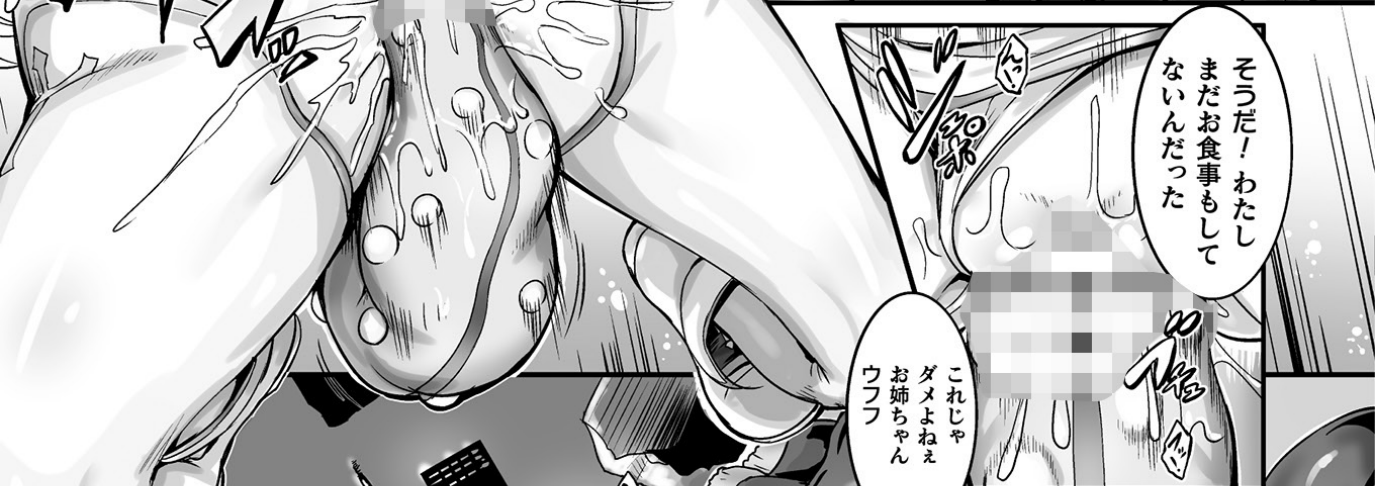
かつはっ!!

やっ!?



うん
上手く力が制御
できないなあ

やっぱり
産まれたばかりじゃ
ダメねえ...



そうだ! わたし
まだお食事もして
ないんだった

これじゃ
ダメよねえ
お姉ちゃん
ウフフ



人間の街かあ...

あんなのでも一杯
食べたらきつともっと
一杯遊べるよね!!

そっ!?

そんな事絶対に
させない…っ！

私が必ず皆をつっ
守ってみせるっ！！

ごめんな…さい
悠…美

私は何て
バケモノを…

ママっ！！

本当に
御免なさい

ひどいなあ
ママ
んんん

私が止めなくちゃ
いけなかったのに

正気に
戻ったのね
ママっ！！

でも
ありがとママ!!
こんな素敵な
力に...

こんな可愛い姿に
産んでくれて!

あっ!!

だから
お礼に

キ

誰よりも
すたすたに
犯し殺して
あげるねっ!

うふふ

あーあーあー!!

は...

はい
オメガ様あつ♡

ト

ぶ

そんなママ...
オメガの力の
影響がまだ...



びしょ...

お姉ちゃんにも
ちゃんとして
あげるねっ!!

何か
流し込まれて

あつぐ...かはあつ!!!

ドク
ドク

あつぐ

あつぐ

あつぐ

か

か

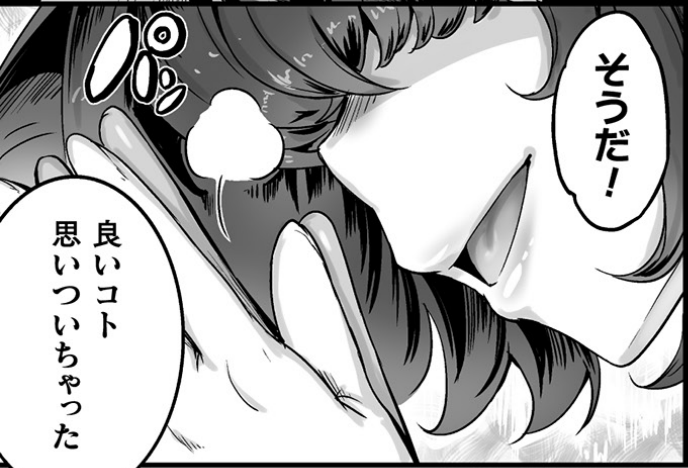


マッ...

ママにも皆にも
これ以上手出しは
させないっ!!

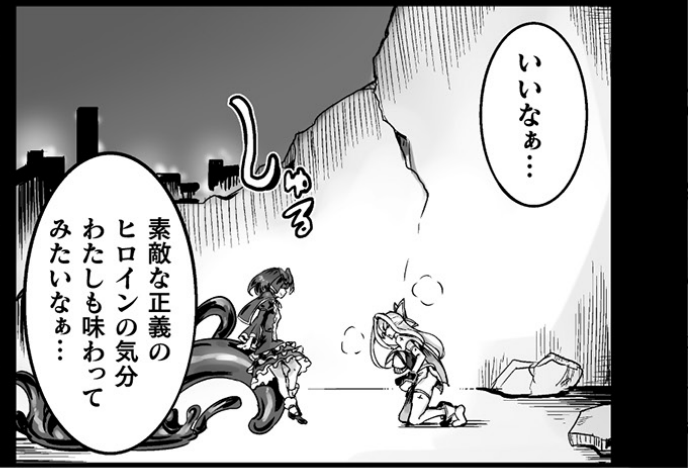
スコイお姉ちゃん
まだ発狂して
なかったんだ!

本当に
正義のヒロイン
なんだねえー!



そうだ!

良いコト
思いついちゃった



いいなあ...

素敵な正義の
ヒロインの気分
わたしも味わって
みたいなあ...



お・姉・ちゃん・の・体
少・し・借・り・る・ね

なっ!?

シャドウステイル

うわああ
—!!

何なんだ
これは?!

あつ
あれは?!

大丈夫ですか
皆さん!?

たつ…助けて
くれえ〜!!

ハアツ!!

何を…

皆さんは必ず
私が守りますっ!!

天使だ…

正義の天使が
助けに来たぞ!!

一体何をしようと
しているの
オメガエクリプス!!

キレイ…

ザワ



ああっ！

何てコト！
変身が解けて
しまっう…

ゴメンなさい…

私「悠美」のままじゃ
あのバケモノと
戦えないのにい！！

なっ？

やめて！！
そんな事したら
正体がっ！！

大丈夫
かい！？

もし私達に
出来る事があつたら
何でも言ってくれ！

本当ですか？

ゴメンなさい…

それじゃあ天使の力を
回復する為になんか
力を貸して下さい！！

ゴメンなさい…



おっさい♥

おっさい

突然
何をっ!?



ちよ!?

嘘!?

ま...まさか
おちんちん啜え
ちやつの...?



キャー

あむ

うめっ!!



キャー!!



こんな事しちゃ
いけないよ
ユミエルちゃん!!

あむ

あむ

君は廃病院で
私を助けてくれた
ユミエルちゃん
だろ!?

なっ!?

んぷい♥



おっ思い出した



ああ射精して
しまおうっ!!

ドドド

あん!

んっ

ど...ど...
覚えて!?

ああ...ダメ
おちんちん良いよお

あん
こんなに一杯精液射精
されちゃってるっ♡

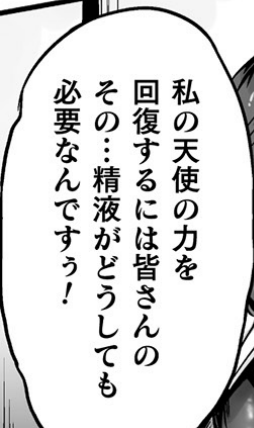
うめっ!!

天使の力で
封じ込めた記憶は私の力で
無効化しちゃった!



そっそんな...

違うんです
皆さん



私の天使の力を
回復するには皆さんの
その...精液がどうしても
必要なんですっ!

退魔ヒロインが一瞬見せた隙を
壁で喰らう!!

妖魔祓い方
柳町右京
やなぎまちうきょう

たかおかちから
小説 NOVEL 高岡智空
挿絵 ILLUSTRATION ねいさん



遙か東の海に浮かぶ島国ヒノモト、その雅やかなる都——ミヤト。国を治める代々の帝が座すこの都は絶えず人が集まり、物流が溢れ、日頃から喧騒と活気に満ちた、他国にも聞こえるほど華やかな街並みだ。けれど、人の集まる場所には情念が渦巻き、凝縮されるそれらには魔の手が伸びる。

怨念、恨み、憎しみ——。死してなお途絶えぬ負の感情は魔に取り込まれ、そこに込められた思念のままに、人へ仇を為そうとする。

元は人の中にあつた、けれどいまや人を離れ、人外に堕ちたモノ。都に住まう者たちは、それらを鬼と呼び、抗えぬモノと畏怖していた。

しかし、人の世にあつて人の理から外れたモノは、やはり人の手によつて屠られるが定め。鬼——そして鬼になる前の情念、その権化を妖魔と総称し、それらを祓う役職が、時の帝の勅により新設されて久しい。

魔を祓う令により武を振るう官人、検魔連使——人々は称賛と畏敬を込め、妖魔祓い方と呼んだ。

◇

その夜は月明かりも薄く、その細い光をたなびく雲がさらに覆う、まさしく闇夜というべき在り様だった。

漆喰壁と瓦葺きの家が立ち並ぶ街中は、喧騒響く昼間とは打って変わった静けさが満ちている。家々の灯りも途

絶えているのは、魔の跋扈する夜闇の中、人々は鬼にかどわかされぬよう早々に眠りに落ちていたためだ。そんな暗闇の街中——砂利石の道を歩くと、二つの影があつた。

わずかに晴れた雲間から覗く月光が、その二人の姿を仄かに浮かび上がらせる。一人は戦にでも赴くような胴当てと刀を帯びる背の高い女性、もう一人は長い錫杖を手にする僧のような背の低い少女。

両者とも年若く、鬼の蔓延る夜の都を歩くには似つかわしく、風貌だ。けれど二人の顔に怯えや恐れはなく、強く凛とした意志を眼差しから感じさせ、堂々とした姿勢で道を往く。

特に——背の高い彼女のほうは、剣技の修行で得られた立ち居振る舞いだろか。ピンと背筋を伸ばしてあごを引き、常にキリリと引き締まった表情を浮かべていた。

ただ、目尻の垂れた柔らかな大粒の瞳ゆえか、そこにあるのは威圧感ではなく、穢れすら飲み込もうとする包容力やたおやかさというもの。その気配は、胴当ての下にある胴着や袴に浮かぶシルエツトからも感じられた。

窮屈そうに鎧へ押し込められ、その端から溢れそうになっている大きな乳房は、歩みに合わせてタプタプと淫猥に弾んでいる。ツンと突き上がるように形のよい大振りな尻房も、袴に柔らかな丘陵を浮かび上がらせ、腰がくねるたび、男を誘うようにユサユサと左

右へ揺すられていた。

毛先を束ねて結んだ長い髪は、いかにもヒノモトの女という艶やかな漆黒を纏い、まるで宵闇に溶け込んでいるかのようだ。そこに白肌の美貌が浮かんでいるのだから、夜道で出くわすものなら、逆に驚かれ、その美しさゆえに妖魔と間違われかねない。

だが——もちろん彼女は、鬼や妖魔の類などではない。胴衣に刻まれた家紋は、ヒノモトで数代に渡り妖魔祓いを任される武門の名家、柳町家のもの。先代より引き継ぎ、当代の祓い方という重職を任されたのが、彼女ということにある。

足取りや表情に怯えはなくとも緊張が滲んでいるのは、代々引き継いできた誇り、その重みを実感しているがゆえなのだろうか。

「……いつものことながら、右京つてば緊張しすぎじゃない？ 初仕事つてわけじゃないんだから、もつと気楽に構えてなさいよ」

そんな柳町家の祓い方——柳町右京にため息交じりで声をかけたのは、隣を歩いている錫杖の少女だ。

「別に緊張しているわけではないのですが、お務めを果たすためと、気を引き締めますと自然に……そ、そんなに固くなっていますでしょうか？」

そう言いながらも、顔が強張り肩も固まっている自覚があつたのか、ペタペタと頬を擦り、表情を柔和なものへ戻そうとする右京。先ほどまで見せて

いた硬さは幾分か、隣の少女のおかげで和らげられたようだ。

「京香さんは、いつも落ち着きがあるというか……気分つたところがなく、表情も柔らかいですね。そういつたところ、見習わせてもらいたいです」

些か弛緩した空気も手伝い、右京も軽くなつた気持ちのまま、隣の少女——片町京香にそう答える。

右京と同じく、ヒノモト美人と呼んで過言ではない彼女。

その黒髪を二つに束ねて下げる少女の服装は、僧というには露出が激しく、ほっそりとしながらも肉づきのよい脚をほば根元まで覗かせ、スラリと伸ばして見せている。胸元の膨らみこそ右京には及ばないが、小柄ながらも確かな膨らみがツンと胸元を盛り上げ、腋下に入った胴衣の裂け目から張りのある乳肌を晒していた。

袖の広がつたその胴衣は、寺社に勤める聖職者ではなく、陰陽という術を行使する道士が主に着用しているものである。独自の改造を施し、年頃の少女らしい見栄えのする装いになっているが、手にした錫杖や鋭い目つきから感じられるのは、いくつもの修羅場を潜り抜けてきた実力の片鱗だ。

それもそのはず、京香の生まれた片町家も柳町家と同じく、妖魔祓いを任される家柄である。検魔連使となつたのは先代からだが、当代を受け継いだ京香は類稀なる陰陽術の才能を持つと噂され、これまでも数多の鬼や妖魔

を退けてきた実力者だった。

劍の右京、術の京香。

都を代表する検魔連使の二人が夜の街を並んで歩く、その理由は妖魔祓いにおいて他はない。だからこそ右京の緊張感だったのだが、京香によつてそれが緩むや、そこが危険な夜の都であることも忘れたように、年頃の少女らしい話題に花が咲こうとする。

「そうやって、なんでも見習おうとか考えてる時点で、すでに堅苦しいっていうか……真面目なのもいいけど、もうちょつと遊び心がないと、検魔連使としてはともかく、女としての魅力が衰えちゃうわよ？」

「そ、そういつたことは、あまり意識したことがなくて……というより、お役目を引き継いだばかりの私は、まだ修行中の身ですから——」

自身の外見、魅力、男女の仲。

そういつたことを考えるのはまだまだ早く、まずは何者にも負けない実力を身につけることが先決だ。右京は日頃からそう意識し、修行や務めに動んでいるのだが、確かに京香を見てみれば、唇に紅を引いたりと、外見に気を配っているのがわかる。

そんな京香と自分を比べ、華がなく地味なのはと少し落ち込みそうになるが、彼女が言いたいのは、そういうことではなかったようだ。

「ふふりん？ ま、殊勝なのはいいことだと思っ……あんなのそういうことを、帝の御子も気に入られたつてこ

となのかもねえ？」

耳元へポソリと囁かれる京香の言葉

に、右京の白肌は火が点いたように、ポツと朱に染まった。

「なつ……なつ、なつ、なつ……なつ、なにを、仰つて——」

「なにをなにも、都のあつちこつちで噂になつてるわよ？ ヒノモト一の妖魔祓い方が、帝の家に興入れるそうだし、つてね」

核心を突いた京香の言葉に、右京はわかりやすく瞳を泳がせる。

「あ、あくまで噂ではないですか」

「あのね……あたしの家にも、上からそのくらい情報が入つてくるわよ。

ま、どこで見染められたか知らないけど、さすがは帝の一族……なかなか見る目があるんじゃない？」

からかうようにポンポンと肩を叩かれ、右京は頭の上から湯気が立ち上らんばかりに、さらに顔を赤くする。

「そんなことは……そもそも、どうして私にそんな話が来たのか、まるで見当もつかないといえますか……」

それはひと月ほど前のこと。

務めを終えた右京を、帝からの使者が密かに訪ねてきたのだ。なにか無礼でも働いてしまったのか——戦々恐々とする右京をよそに、使者は手紙を託し、後日返事を受け取りに来ると言い残し、早々に立ち去つたのである。

恐るおそる中を確認した右京は、それが恋文であり、相手が帝の御子であつたということに、大層驚かされたも

のだ。気持ちの整理を兼ね、返事をするまでには随分と時間をいただいでしまいはしたが、つい先日、右京はようやく承諾の返事を済ませ、内々ではすでに婚儀が進められている。

（人の口に戸は立てられないと言いますけれど……京香さんはともかく、都中で噂になつているとは——）

夜の冷気も火照つた耳を冷やすことは叶わず、顔も身体もジワジワと汗が滲むほどに熱くなつていた。その様子を京香が、面白半分になやニヤと見て笑つていることに、さらなる照れ臭さが込み上げる。

「こ、このことは内密に……」

「それくらい心得てるわよ。ま、都の人たちもわかっているから、あんだと話しても話題にしないんでしょ」

確かに、街を警邏しているときも人々から声をかけられることが多い右京だが、そうした話を振られたことは一度もなかった。

「では、京香さんは皆さんとお話されるとき、そういつたことを？」

「ん？ いや、あたしはほら、あんだと違つて敬遠されがちだから。面と向かつて聞いてくる人もいないわね」

少し自嘲気味に京香が口にした通り、彼女が都の人々から積極的の声をかけられることはない。敬われているのは事実だが、それ以上に、彼女の扱う術が恐れられている——というのも理由の一つだ。

式神と呼ばれる、妖魔に似た異形を

使役することもある陰陽師を、鬼と同一視して恐れる人々がいるのは事実である。右京はそんな噂を聞くたびに否定してはいるが、根付いた偏見はそう簡単に払拭されない。

「ま、うちは柳町と違つて、検魔連使としても新参の家だしね。すぐに信頼してもらえとは思つてないわよ」

右京が慕われるのは、本人の朗らかな人柄もあるが、やはり長きに渡つて都の平穩を守つてきた家柄、柳町家という看板の効果も大きい。だからこそ右京は、その名に恥じないようにと高い目標を据え、日々邁進しているのはあるのだが——。

（……帝の御子が私を選んだのは、そうした理由もあるからでしょうか）

実績、実力、容姿や年齢を比較しても、京香が右京に劣る部分はない。なにと、右京は感じていた。

身体的な特徴の差はあるが、京香は右京より二つも若く、いずれ子をなすことも考えれば、むしろ京香のほうが望ましいのではとも思う。家名の差で京香がその候補から外されたのだとすれば、彼女に対して申し訳なく、右京のほうこそやりきれない。

そんな自責の念から、思わず彼女のほうを見てしまうと、その視線に気づいた聡明な彼女は、すぐさま右京の思考に追いついたようだ。

「——はいはい、無駄話はおしまいにするわよ。そろそろ鬼が出るつて噂の場所なんだから、集中してよね」

「あ——は、はい！」

このまま話を続けていけば、右京は京香に謝罪し、ともすれば帝の一族を批判するようなことまで口走っていたかもしれない。だからこそ京香は、これ以上この話題を広げぬようにと、明るい口調で会話を打ち切ってくれたのだろう。察した右京も、先の話をお忘れのように気持ちを切り替え、再び引き締まった面持ちを整える——が。

「……いえ、あの……私はずっと集中していたのに、話題を振ってきたのは京香さんのほうだったかと……」

これだけは言っておかねばと、右京はしっかりと原因を改めておく。ただ京香のほうとはほけた様子で首を傾げ、ニヤニヤと笑いながら正面を見た。

「あつれー、そうだったっけ？」

「そうでしたよ！」

「まあいいじゃない、細かいことは——あちらさんも、あたしたちのつまらない会話は聞き飽きたってさ」

言いながら京香が錫杖の輪をシャリーンと鳴らし、視線の方向へ注意を促してくる。いつの間にか現れたのか、そこには緑色の肌を持つ巨大な影が立ち上がり、二人を見下ろしていた。

「鬼——」

まるで接近に気づいていなかった右京だが、その姿を捉えるや反射的に身体が動き、居合いのような速度で刀を抜き構える。すでに反応していた京香も術符を舞わせ、周囲の闇を照らすように灯火を放った。

その仄かな灯りに照らされた緑の鬼の姿がより大きく、はつきりと見えるようになる。得物はないが、両手は丸太のように太く、足腰も力士以上にガツツリとしており、こちらへ飛びかかるかと、地を踏みしめていた。

「ニグツ……ニグウウウツツ！」

尖った歯を剥きだし、黒目のない瞳を爛々と光らせ、何事かを叫んだ鬼が凄まじい速度で突進を繰り返す。二人は左右に跳んで難なくそれをいなすと、京香は術符を一枚抜き、右京はそれを視界の端で捉えながら、一足飛びに鬼のほうへ飛びかかった。

「いかな想い、無念があるうと、此は人の領域——妖魔、退散！」

不自由な空中に飛んだ右京を掴み取るうと、鬼の太い腕が突き伸びる。けれど右京の腕ほど柔らかいという太い指は、彼女の翻した刀が撫でるように一閃した瞬間、すべて同時に断ち切られたように、バラリと地に落ちた。

「おー、やるうよ！」

「~~~~~ツツツ——ツツツ！」

右京の技に感心した京香の囁き、それを掻き消す咆哮のような悲鳴を轟かせ、鬼が腕を庇うように身を屈める。その腕と肩を踏み台に、右京がさらに高みへ身を投じると、一直線上に鬼と向かい合う形となった京香は、不敵な笑みを浮かべたまま片目を閉じ、唇に寄せた術符を鋭く投げ放つ。

「其は黄泉路への導き——轟！」

その札は意思でもあるかのように鬼

の額へ貼りつくと、その瞬間、雷のとき青白い光を放ち、鬼の全身を焼き焦がす。光が奔ったのは一瞬、けれどその苦悶は永遠にも思えるほどの衝撃だったのか。叫びさえも上げられない鬼はピクンツと全身を跳ねさせて棒立ちになり、焦げ臭い異臭が煙とともにスルリと立ち昇る——その頭上。

「妖魔——調伏！」

飛び上がった右京が刀を構えて舞い降り、寸分の狂いもなく術符を貫くと、鬼の全身が塵のように分解され貫かれた術符へと吸い込まれた。

術符は術式を発動させたのちも、符を傷つけることで、そこに刻まれた記号のような文字ごとに様々な効果を発揮する。京香が好んで使うのは魔と念を切り剥がし、その魔を符へと吸収する札だ。吸い上げられた魔は術式によって式神へと変えられ、再び彼女の力になる——というわけである。

「お見事——で、手応えは？」

舞い降りる札を掴み取りながら、京香が右京に問う。それに対して右京は難しい顔で、首を左右に振った。

「斬った感覚はありますが、おそらく幻の類でしょう。散った魔の気配も符ではなく、この道の先へと引き上げていくように感じられました」

「——みたいね」

札になんの気配も残っていないのを確認し、京香も肩を疎める。しかし、魔の気配が引き上げたということは、そちらに向かえば、いまの鬼の本体に

当たるとのことだ。

「この先は町外れで、確か……廃寺と墓地があるだけでしたか」

「もう人の手が入っていない、けれども情念が渦巻く場所——か。それらしくなってきたじゃない」

「はい、急ぎましょう」

華やかな都の街並みから大きく離れた鬱蒼とした森や竹藪へ向かう荒れ果てた街路。そちらへ向かうにつれ、魔性の気配が濃くなり、右京はピリピリと肌が痺れるのを感じていた。

（やはり——いえ、ですが……）

その気配を注意深く探っていると、京香が訝しむようにこちらを見ると

「どうかした？」

「ここにある魔の気配は、この地にあるものだけです。先ほどの鬼とは別種のもの……そして、それと同じ気配は小さいものが三つあるだけ……」

「——待ちなさいよ。だとしたら、この鬼騷動は誰か、おそらくその小さい気配のやつが、鬼を動かして起こしていたってことになるわよ？」

京香の言葉に、右京は頷いた。

先ほどの鬼を例に挙げるなら、怨念や強い魔の影響を受けた妖魔は、その強さゆえに力が溢れて幻影となり、周囲に姿や気配を現れさせることがある。今回の鬼もそれだと思っていたのだが、右京の感じた気配をそのまま素直に受け止めれば、小さな妖魔かなにかが、鬼の形を取らせた魔をけしかけてきた、ということになる。

「そんな妖魔、聞いたことないわ。妖魔が鬼を——魔を操るなんて」

「ですが、そうとしか……ただ、私が気になったのはそのことではなく、小さい気配のほう——」

そう口にしたところで、ガタンツと木の崩れるような音が響き、二人は弾かれたようにそちらへ向き直る。おそらくは寺の案内かなにかだったのだらう、立てられていた腐った丸太が崩れ落ち、その陰に、薄汚れたボロ布を纏った何者かの影が三体、闇に紛れて動くのが見えた。

「あれは——」

「右京！ 追うわよ！」

その影はこちらに気づいたからか慌てた様子で走り去っていく。弾かれたようにそれを追う京香に続き、右京もその後方を走りながら、わずかに見えた気配の主について考えていた。

（小さな気配——力を抑えているのかと思いましたが、いま見えた大きさは……もしかすると——）

右京の考えと合致するように、逃げる影はそう速くなく、ほどなくして三体を捕捉する。その影は、小柄な京香よりもさらに背丈が低いように見える——つまりは、子供のような大きさの相手だということだ。

「見つけた！ まず足を止める！」

言いながら京香が札を手にしたのを見て、右京は慌てた様子で彼女の腕を掴み、その動きを制する。

「待ってください、京香さん！」

「は？ なに言ってるのよ、さつさとしないと逃げられるじゃない！」

「ですが、相手は子供の可能性があまります！ 子供の妖魔であれば、調伏せずとも祓う術は——」

「言ってる場合じゃないでしょ！」

右京の腕を振り払い、京香は容赦なく札を投げ放つ。しかし、そこに込められたのは、先ほど鬼にぶつけたものと違い、刃物のような硬度と鋭さになる、飛び道具として扱われる術式だったようだ。その刃じみた術符が相手の纏った衣服——ボロ布を引き剥がすこととなり、姿が浮き彫りになる。

「やはり……」

そこにいたのは、先ほどの鬼を何倍も小さくした、見るからに小鬼といったサイズと容姿の妖魔だった。衣服を剥ぎ取られた衝撃で一体が倒れ、それを残り二体が慌てて助け起こす。その表情と反応には明らかに怯えが見て取れ、そんな彼らに容赦なく刃を向けることは、右京には躊躇われた。

「もうっ！ 右京が引つ張るから、狙いが逸れちゃったでしょ！」

「す、すみません、しかし……幼い妖魔であれば、無理に調伏する必要はなかったはずですよ。どうか、私に任せていただけませんか？」

「そんな甘いこと——あつ！」

言い争っているうち、仲間を助け起こした鬼たちは、足早に走り去る。そうして、目指していた廃寺に辿り着いた彼らは、入り口ではなく側面の崩れた

た壁から飛び込み、姿を眩ました。「ちっ、面倒なところに……でもまあ、袋の風つとところかしらね」

「……どうするおつもりですか？」

探るような口調になってしまったが、京香のほうも右京の態度に根負けしていたのだらう。彼女は肩を竦め、想像しているようなことはしないとばかりに首を振り、廃寺から離れるように、周囲の藪のほうへ足を進める。

「とりあえず、周りに結界を張って逃げられないようにするわ。右京はほかに穴がないか調べて、どこかに逃げてないか、気配も探っておいて」

「そ、そうですね、わかりました」

いつもながら、冷静で的確な判断力だと感心しつつ、右京も言われた通りに廃寺の周囲をグルリと回ってみる。

本来の入口や裏口などは、崩れた梁や柱で完全に塞がれており、どうやら小鬼たちが逃げ込んだ穴以外に入口はなさそうだ。もし地下を通る道などがあれば厄介だが、中の気配は遠のいておらず、そんな動きもない。

（となれば、対面するにはこの穴を抜けるしかありませんか……）

一応は油断なく刀に手を置きつつ、右京は穴の前に陣取り、これからの動きを考える。鬼を退治せず祓うためには、魔に飲まれた情念である彼らの意識と会話し、説得するのが第一だ。

完全に魔に飲まれた妖魔、道中に出会ったあの巨大な鬼のような相手では会話の余地すらないが、身体の小ささ

は魔の影響が少ない証拠であり、魔に憑りつかれる前の意識や念が色濃く残っているのである。こちらを見て逃げたことから、自分たちが検魔遣使だということには気づいており、祓われることを恐れているのだらう。それならば、痛みや苦悶を味わわず退散させられると言えば、対話で解決するという手段は有効に思われた。

（とはいえ、彼らがこの世から消えるのは事実です……それに納得してもらえなければ、これに頼るほかないのでしょうね……）

妖魔とはいえ幼き者を相手に刀を振るうのは躊躇われるが、彼らがこのまま世に残り、力をつけてしまえば、大勢の人間に害をなす。そうなる前に祓うことが自分の役目であることは、右京も重々承知していた。

その点においては、すぐに祓おうとした京香のほうが、圧倒的に正しかったといえる。彼女の言った通り、自分の行動は甘さ以外の何物でもない。

ただ、それでも——元は人間であったものが相手である以上、そこに寄り添うことができれば、慰めになるのではないかと信じていた。自己満足と言われればそれまでだが、右京は魔を祓うのではなく、人を救うことに重点を置いていた。最期を迎えるとき、心穏やかに逝くことができれば、情念や怨念が減る——そうした世を作っていくことが検魔遣使、妖魔祓い方の役割な



この人はお前の
婚約者で…

ふん

コイツ私より
強いのか？

私より強くなつてから
出直してきなさい

こんなヘタレと
結婚したくないわ！



うわッ！

バ
ツ

フイオ！
何をしていたんだ！

お嬢様壁尻的 ビフォーアフター

That's a SHIRIKABEFUL CHANGE!

あまみや
漫画 COMIC 雨宮ミズキ

なんということでしょう!!
壁尻の匠が登場です!



紹介するから
そこに行きなさい

そうだ
知り合いに花嫁修業の
躰してくれる人が
いるんだ



お前つてやつは
年頃だというのに…

フん



全く

今まで剣の修行ばかりだったのに急に花嫁修業だなんて

まあまあ

ローザ

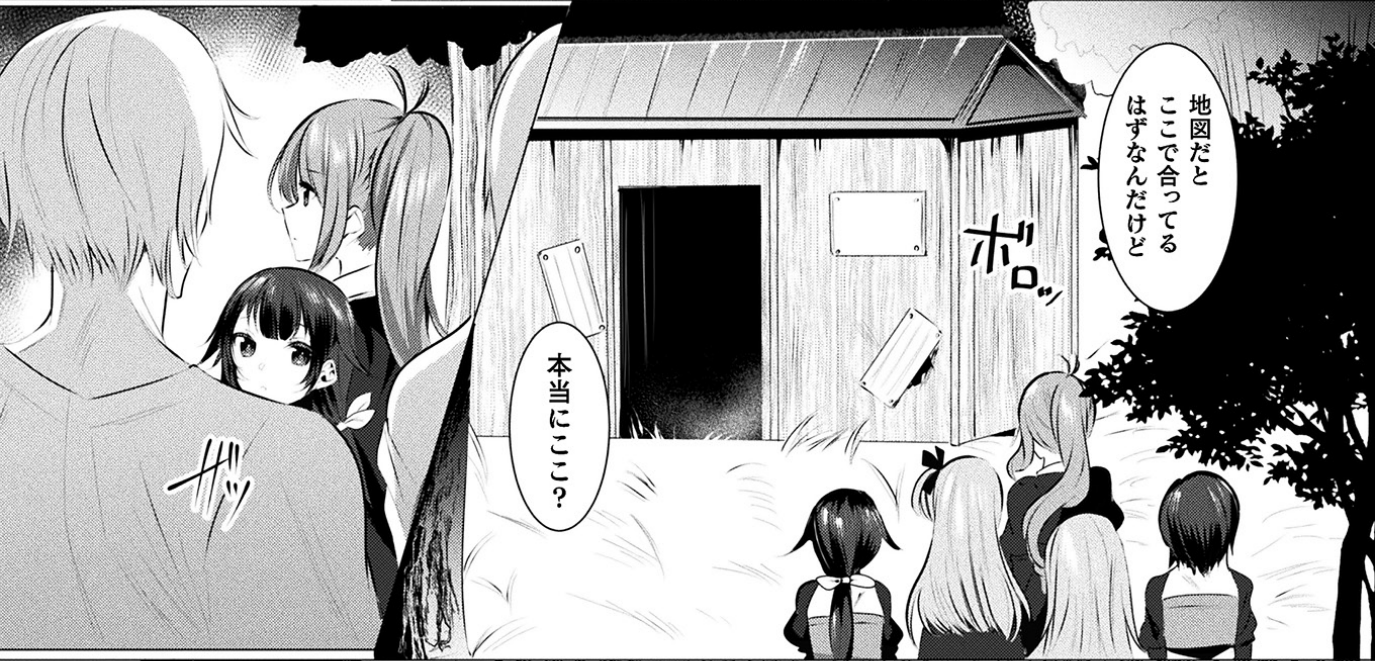
ヴィオラ

警備に親衛隊までつけちゃって…
本当過保護たわ

お父様はお嬢様のことが心配なんですよ

イリス

カメラリア



地図だとここで合ってるはずなんですけど

本当にここ…?



キヤツ!

誰!!

ガッ

親分、コイツらですか？
例の女達って

そうだ
丁重に扱えよ

何をやるの！

いやー
君のお父上から
話しかねがね聞いて
いますよ

本当にかわいく…
大きく育ったねえ

こいつが
父上紹介の男…？

おー怖い怖い
そんなに
怒らないで

調教だど!?

クソ！
振りほどけない！

お父上は詳細を
ご存じなかった
ようですが

私達が
しっかり調教して
差上げますからね

調教によってあなた方が
奉仕の心を覚えればちゃんと
帰して差上げますよ





舐めるなよ!

ここで男たちが
喜ぶことを学んで
もらうってわけ

もうすぐ花嫁になるのならば
こういうこともできなければ
いけないよ

しっかり稼いで
もらうからね



舐めているのは
どっちだ!

手足を
押さえろ!

お嬢様!

あの壁に
連れていけ!



気安く触るな!

やめろ!
やめろ!!

ほらほら
おとなしくして



まったく
調教するにも
一苦労だな

何を
するつもり
なんだ!

放せ!



お嬢様!!

あなた達
放しなさい!

なんです
この格好は!

それじゃあ早速
始めますよ

早く

早く



おお！
お嬢様処女ですか！

気の強い方だから
もう卒業してたのかと
思っていました

おおおお

おおおお



貴様！
後で殺してやる！



あー
締まりもいいねえ

はっ

はっ

お嬢様に
何を！！

痛いっ！
抜いてえ！

はっ



はいはい
できるなら
やってみな

おおおお

クソッ！
何で外れないんだ！

お嬢様！

少しうるさいから
口を塞ぐか



おおくケツ叩いたら
キツキツに締めて
きやがる！

ママま...

コイツ生粋のDMだな

あー？
何だコイツ
マグロか？

耐えなきや...
お嬢様を
助けなきや...!



でっけえケツ!
安産体型ってやつか?

一体何をされて
いるの...!?

俺の子供
産んでほしい
あもちろん
女を産めよな?

うっわコイツなんて
アナルヒクヒク
させてやがる!

オラ!

ヒクヒク!!

たくさん客が
取れるようになるまで
じっくり寝けてやるからな





花嫁修業としての効果もバツチりだろ？

そろそろ本格的に稼いでもらいますか



お嬢様もすっかりおとなしくなったな

一週間後



皆エロいケツしやがって



お客を取って儲けてくれれば帰れるからな

さあお嬢様たちこれからいよいよご奉仕の本番だ



早くお家に帰りたいよお…

もういや…

こんなので負けちゃダメ…

変に騒いだりすると帰るのが遅くなっちゃうぞ

マジカルファンジカル・シヤルルン

お助け魔法少女

マジカル☆シヤルルン

ゆかいなお尻牧場の巻

私の処女穴で
壁尻牧場の夢
叶えますっ☆

かりのけい
小説 NOVEL 狩野景
挿絵 ILLUSTRATION こはち

ある日の屋下がり。雲一つなく晴れ渡った空で、シャルルンはパートナーのムーニャンと一緒に空中散歩を楽しんでいました。

「今日も素敵な願いを心に秘めてる人と出会えるかな？」

フリルをタツプリとあしらったピンクのドレスを纏う、おっとりとした顔立ちの小柄な美少女。マジカル・シャルルンは魔法で人々の願いを叶える、魔法少女なのです。

長いリボンを結んだふわりとしたピンクのロングヘアが似合う童顔ですが、大きなリボンとフリルで飾られた可憐な魔法少女のドレスから、たわわな胸がこぼれ出そうな素敵なプロポーズンです。

その膨らみの前にハートをあしらった魔法ステッキを掲げて、シャルルンは意識を集中させました。

「昨日はアイドル志望の女の子とラノベ作家になりたいって人の願いを叶えてあげたよね」

シャルルの傍らで可愛らしく毛繕いをするのは、猫の姿をした使い魔のムーニャンです。

「皆さん、願いが叶ったって喜んでくれました」

「うんうん、みんなシャルルンに感謝してた。魔法で願いを叶えてもらっても、その業界に生き残れるかどうかは本人次第なんだけどね」

ムーニャンは空を飛んだり、危ないときは自分だけ姿を消したりできるだ

けで、これといって役に立つ能力はないけれど、飾らない言葉で思ったままの意見や助言を、シャルルンに与えてくれます。

「おや？ 強い波動を感じるよ。これは叶えられない願いを抱いている人の強い思念だね」

突然ムーニャンの首輪に付いている鈴が、ワナビク♪ ワナビク♪ と不思議な音色を奏でました。

「手助けを求める人の、心の声ね。案内して、ムーニャン」

「うん、シャルルン。こつちだよ！」
ムーニャンに導かれて、シャルルンはとあるアパートの前までやってきました。

「ここだよ、シャルルン。中から何か声が聞こえてくるね」

窓から中の様子を窺ってみます。

「ロスイ・ングベル・ナブレ・ス・デハ・ポ・ン。深き深淵より現れたまえ、全てを邪悪に染めし偉大なるキング・オブ・ダークネスよ。私の望みを叶えたまえー!!」

部屋の中では、朝からハンバーグをおかわりしそうな感じの小太りな少年が、気弱そうな丸顔に目の下を黒く塗ったフェイスペイント姿で、禍々しい儀式を行っています。

「あれは悪魔召喚の儀式！ だめー。早まった真似はやめなさい！」

魔法陣の前に立つ彼の、稚拙なドクロのマークを紫色で染めた女子用の黒いスクール水着に身を包み、ド派手に

デコレートした張りぼての死神鎌を抱えるというその姿に若干引きながらも、シャルルンは急いで部屋に飛び込みました。

「うぐつ！ こ、この匂いつて？」

途端に強烈な栗の花臭さが鼻腔に押し寄せて、一瞬意識が遠退きました。

部屋の隅のゴミ箱には丸めたティッシュが山盛りあふれています。

それでもシャルルンは気力を振り絞って、儀式を続ける少年を押し倒しました。

「おわつ！ 本当に現れたぞ闇の王！ うはあ、すごいオッパイ大きい。それにプリップリの弾力ケツが僕のチンポの上に乗っかってる！」

一瞬驚いた少年は、シャルルンの可愛い姿とナイスボディに大喜びです。

「ひやうつ！ ち、違います、闇の王ではありません。私は人々の願いを叶える、お助け魔法少女、マジカル・シャルルンです」

「そして僕は使い魔のムーニャンだよ。慌てて少年の上から飛び退いて、ポーズを決めながら名乗ると、どこからともなくシャルソンと効果音が鳴り響いて、星の光がキラキラと散ります。

「魔法……少女？ 願いを叶えるって、僕の願いもきいてくれるの？ それとどんなパンツ穿いているの？」

「はい。強い思いを心に宿した人たちのお手伝いをするのが、私の使命なので。あ、あの、スカート覗かないでください。恥ずかしいです」

少年は嬉しそうにキラキラと目を輝かせて、シャルルンのスカートを捲ってきました。

「それであなたは何を望んでいるのですか？」

スカートを押さえて後退しても、少年はハアハアと息を荒くしてローアングルからパンツを覗こうとします。

「うんとねえ、僕ねえ、牧場を作りたいんだ。可愛い家畜と戯れて暮らすのが夢なんだけど……。でもこんな都会のアパート暮らしじゃ難しいし、貯金全部ガチャに注ぎ込んでやって一文無しだから、闇の王に魂売り渡して願いを叶えてもらおうと思っただ」

「牧場……ですか？」

欲望を隠そうともしない素直な少年に何を求められるかと身構えていたシャルルンは少し驚きました。

「食の安全や自給率低下が問題になっている昨今に、牧場経営を望むだなんて感心な少年だね。この願い、ぜひとも叶えてあげようね、シャルルン」

「僕、修二だよ」

感心するムーニャンに少年は屈託のない笑顔で名乗りました。でもその手は隙あらばスカートを捲ろうとしています。

を彼が直接作り出せるよ」

「修二くん。その一途で素敵な願いを叶えられるように、あなたに私の魔法の力を授けてあげますね。マジカル・フアジカル・デリヴァリリン。私の魔法をあなたのもとへ。シャルルン♪」

詳しく話をそれ以上修二くんから聞くこともせず、シャルルンはムーニャンのアドバイスに従って、魔法の力を他者に授ける術を発動しました。

「わはー、パンツ見えた！ 純白だ。ちよつと染みが付いているし、マンスジくつきり浮き出てる！」

ステッキを軽やかに操って魔法発動の動作をしなくてはいけないので、ついにスカートが捲られてパンツを見られてしまいました。

膨大な魔力が修二くんの身体に注がれましたが、本人はそれどころじゃない様子で、シャルルンの下着に釘付けになっています。

「あ、あの、これで修二くんも魔法を使えるようになったので、思った通りの牧場をどこにでも作れるようになりましたよ」

今日はおりのものが多い日で、汚れた下着を見られた恥ずかしさに顔を赤らめながら、シャルルンは修二くんを牧場作りに専念させようとします。

「僕が、魔法を？」

「そうだよ、修二くん。君が作りたい牧場を心に強く思い浮かべながら、マジカル・フアジカル・シャルルン♪って唱えるんだよ」

「間抜けな呪文唱えるの恥ずかしいなあ。でも牧場のためだから、我慢してやってみるよ。僕の牧場現れる、地価最高の一等地に。マジカル・フアジカル・シャルルン♪」

素敵だと思っていた呪文をデイスラれてシャルルンが傷つくさなか、修二くんは魔法を発動させました。

その途端、ちやるん♪ と邪に濁った鈴の音と共に、淫靡な紫色の輝きが炸裂しました。

「おほつ、ここは！」

目を眩ませたその輝きが収まると、少年の栗の花臭い部屋から、一等地の繁華街に移動していました。

しかも青々と茂った牧草地が広がる中に、頑丈そうな壁を備えた牧舎が出現します。

「わあつ、すごいね修二くん。魔法力を与えても、使いこなすのは難しいのに。妄想力が並外れているんだね！」

「毎日ノートに僕の考えた最高の牧場の計画を書いてたからな。もう二十冊くらい溜まったぞ」

あまり強い妄想を抱いている人に魔法を使わせると、世界大戦とか起こしてしまうので、シャルルンは内心ちよつとマズかったかもと焦ります。

そんな中、突然の異変に人々が騒然とします。

「な、なんだ？ いきなり現れたぞ」

「繁華街が、草原に？」

「あれつて、テレビ出てる人が何かな？ お笑いタレントっぽいけど」

スク水姿の小太りな少年は、確かにちよつと芸人っぽいかもしれせん。

なにかのイベントかとますます人が集まってくるのを横目に、さらに修二くんの魔法が続きます。

「牧場で飼育される可愛い家畜たちよ、現れる。マジカル・フアジカル・シャルルン♪」

呪文を唱えた途端、この光景をスマホでインスタにアップしていた女性たちが、見えない力に引き寄せられます。

「え？ あ、な、なに？ なんか、身体が引つ張られるんだけど!？」

「うそ、どうなつてんの？ いや、いや、助けて!」

「さやあつ！ あの建物に、引き寄せられてる!？」

踏ん張ったり、物や他の人に掴まったりして抵抗しますが、引つ張る力はどんどん強くなって、女性たちは卵子に引き寄せられる精子のように、牧舎に突進していきます。

「ひいひいっ!」

「いやああああつ!!」

「ぶつかると。痛いッ。え……?」

建物に激突するかと思つた刹那、女性たちの身体は、なんの衝撃もなく頭からその壁にすっぽりと埋まり込んでしまいました。

「な、なに？ なんなの?」

「えつ? ど、どうなつてんの、これ」

「壁、ぶつかつたと思つたのに、すり抜けた?」

「でもお尻が通り抜けれられない……」

引き寄せられた女性たちの身体は、腰までが壁に埋まった状態で、固定されてしまいました。

「牧舎の外から見ると、下半身だけが壁から生えて、横一列等間隔にずらりと並んでいます。」

「はわつ、物質透過魔法と、硬化魔法をあんな精度で!？」

「おやおや、もしかして修二くんって一万年に一人の逸材かも。本気で修行したら、あつという間にシャルルン追い抜かれちゃうね♪」

難易度が高いらしい魔法を易々と操るスク水小太り少年に、魔法少女と使い魔がビクビクしました。

「嘘つ、抜けられないじゃないの、これ!」

「いや、いや。助けて! 誰かつ」

「牧舎の中では、女性たちの上半身がやはり等間隔で、まるで餌付けされる家畜のように、並んでいます。」

うろたえながらも必死に藻掻いて逃れようとしています。頑丈そうな壁はビクともしませんし、それぞれの腰のサイズピツタリの穴は、少しも緩む様子がありません。

「よーし、家畜も牧舎に収納したし、牧場の稼働開始だ!」

準備万端と喜ぶ修二くんに、魔法少女が呆気に取られます。

「え……? 修二くん。牧場つて、これ……なの?」

「ははくん。なるほど、こういう牧場かあ」

イメージしていた牧場と余りにも違う光景にシャルルンは呆然ですが、ムーニヤンはなんだか嬉しそうに納得しています。

「そうだぞ、シャルルン。美人でいっぱいだとケツがでつかい女を壁にはめ込んで飼育する牧場だ。ケツは外に出してあるから、いつでも誰でもホイホイ種付けできるんだぜ。家畜が孕めばうまいミルク搾って、飲み放題なんだから最高だろ！」

「なによそれ！ ふざけるな。頭おかしいんじゃないの？」

「こ、こんなことが許されると思ってるの？ 訴えられたくなかったら、早くここから出なさいってば！」

「牧場……？ 家畜……って。い、いや……。そんなのいやあああつ」

修二くんの計画を聞いて、女性たちが怒りと怯えの叫びを上げ始めたけれど、彼はまるで家畜の鳴き声かのようにスルーします。

「ば、牧場って言うから、牛さんとか羊さんとかいる、普通の牧場だと思っただのに……」

「やだなあ、シャルルン。僕のこと、獣姦するような変態野郎だと思っただのか？ 勘弁してくれよお」

想定外すぎる思い違いに、シャルルンは頭がくらくらしてきました。

「やっぱり人の話は、しっかりと聞いて確認しなくてはダメですね。」

「それにしても極上品の可愛い家畜がいっぱい集まったな。おおっ？ あれ

ってONH69のミサりんじやないか！ すこい極上けものが入ったぞ」

「もう！ せっかくのオフ日だからシヨッピングに来たのに、なんでこんなことにつ？ あなたの作業なの？ 早くここから出してよ！」

捕まえた家畜の中には、人気アイドルがいました。可愛い顔で睨み付けてくるけれど、修二くんは有頂天です。

「あれれ、こつちには学園一の美少女の白紗木真由ちゃんまで捕まってる。うはは、美少女だけゲットするように魔法使ったけど、大成功だ」

「げっ、あんた、うちのクラスのマモデブじゃないの！ 女子トイレ盗撮して停学になったから、しばらくキモい顔見ないで済むと思っただけに。性懲りもなくこんなことしてっ。いい加減にしないと張り倒すわよ！」

可愛い顔なのに性格がキツイ白紗木さんが怒鳴ってくるけれど、腰が壁にはまっついては、それ以上どうすることもできません。

「さーと、家畜も揃ったところだし、早速種付けしていこうかな。最初はアイドルにしようかな？ それともクラス的美少女がいいかな？ 濃い目のタツプリ注ぎまくって、一匹残らず孕ませるぞ」

騒がしい家畜を大人しくさせるためにも、取りあえず一発ヤツちやうのが良さそうです。

「あ、あの、やっぱり牧場は人間を飼うよりも牛さんとか羊さんとか飼っ

た方が可愛いし、楽しいと思うなら、私もお世話のお手伝いするから、新しい牧場作り直そうよ」

女性たちが種付けされる前に、どうかこの人間壁尻牧場をやめさせようと、シャルルンが説得を試みます。

「なんだよ、僕は獣姦には興味ないって言っただろ。シャルルンってば、そんなに僕が牛とか羊に種付けするところが見たいのか？ 呆れた下変態女だな。パンツは白で染みが付いてるし」

「へー、シャルルンで男の子が動物とヤツってるの見る趣味があつたんだね。知らなかったよ」

「ふえ!? ち、違う……」

言葉が足りなかつたらしく、修二くんとムーニヤンに誤解されてしまい、シャルルンは顔が真っ赤です。

「とにかくシャルルンの変態趣味にはつきあつてられないから。僕は人間の家畜に種付けするからね！」

獣姦を強要してくる魔法少女にウンザリした様子で、修二くんは美女家畜たちへと向き直ります。

「種付けって……冗談でしょ！ そんなことして、ただで済むと思ってるの？」

ギラついた欲情の眼差しを注がれて、女たちがまた耳障りな声を張り上げます。

「い、いやあつ、やめてっ。私には彼氏いるんだから！」

「き、きみ、私のファンなのよね？ サインと握手してあげるから、ここか

ら外して？ ねっ、ねっ。外しなさいよ!!」

クラスメイトの言葉から、修二くんが女子トイレを盗撮する元気な少年だと知った家畜牝たちが、種付けの言葉に怯えて騒ぎ始めます。

「ああそうだ。種付けする前に、家畜の健康状態を調べておかないとね。マジカル！」

家畜の一匹の「彼氏いるんだから」発言に、ふと不安になった修二くんがステータス探知の魔法を使います。

「ふあつ？ ミサりんって、ひ、非処女？ おあつ、白紗木さんも？ こいつも、この女も、こつちの牝も！ あああああつ、捕まえた家畜全部非処女じゃねえかあよおおおつ！」

なんと壁にはめ込んだ家畜牝は、一匹残らず経験済みのステータスが表示されていきました。

「はくあ、萎えたあ。ガツカリだよ。これだけ美少女がいて、一人残らず他の男とヤツちまってるなんて。ふざけんなってんだ……」

がっかりな結果に修二くんは年相応の口調でやさぐれてしまいました。

イキのいい新品マンコに童貞チンポで種付けしてやろうと思っただけなのに、全部使い古しの中古穴だったのですから当然です。

やる気無くすのも仕方ありません。

「ねえ、せっかく捕まえた家畜だけど、非処女なんだって。どうしたらいいと思う？ シャルルン」

「え……？ あ、は、はい。あの、人間を牧場へ家畜みたいにつなぐのはいけないんじゃないかって思うので、解放した方がいいんじゃないかと……」
余りに想定外な展開に安心していた魔法少女が、我に返って良識的なことを言います。

「そうかな？ なんの価値もない中古の非処女マンコたちだけけど、せっかく捕まえた家畜なんだし、中身はともかく顔だけはいいんだから。種付けは非処女とか気にしない、犯れればいいって男どもに任せればいいんじゃないかな」

「あく、そっかあ。そうすることに決めたよ。ありがとう、ムーニヤン」

あまり役に立たないシャルルの意見にかわって、ムーニヤンがナイスイデアを提案しました。

「家畜になりそうな処女がいなくて、いま魔法で探ってみたけど、顔もスタイルも不細工ばかりで論外だったからなあ。それなら中古でも美人な方がまだましだし……」

修二くんは、女性の容姿には非常にうるさいのです。

「せっかくの牧場なのに、孕ませないとミルク搾れないから、使い古しの穴でも気にしない奴らに任せれば、種付け一日体験って感じで、牧場感出るしな」

外の様子を魔法で空中に投影して確認すると、先程より何倍もの人たちが集まってきていました。女性たちは、

壁に吸い付けられないようにと逃げてしまってるので男ばかりです。

「な……、なんだ？ 女が壁の穴に突っ込んだと思ったら、尻だけ外に出して……。腰の所でガツチリはまって、抜け出せなくなってるぞ！」

牧舎の外では、壁に並んだお尻に、盛りをついた男たちがスケベな視線を注いでいます。

「なんだか知らないけど、こうして女の尻がずらつと並んでると、ムラムラしてくるよな」

「ケツの形もそれぞれなんだな。スカートとかズボンとかなければもつと違いがわかるんだけど。尻がせちやつていいのかな？」

「このお尻の持ち主ってどんな顔してるんだろ？ 想像しながら鑑賞するのもいいけれど、顔がわかるとますます興奮するだろうな」

抜け出そうとして藻掻くほど悩ましげにくねる、ムツチリな膨らみの列に野次馬たちは欲望を隠そうともせず、昂つた声を上げます。

因みに魔法の力で中からの声は外に聞こえないけれど、外からの声はしっかりと中に届くようになっていきます。

「もしかして、私たちのお尻、外の人たちに見られてる!?」

「い、嫌あつ。こんな変な姿、見ないで！」

男たちの欲望の対象にされていることに気がついて、壁の家畜たちは臆病な羊みたいにうろたえ始めました。

「最近では農作物でも、生産者の顔が表示されてたりするし、壁から生えたお尻も家畜自身の顔がわかると、種付けする牡も安心だよな」

「えっ？ そんなことされたら恥ずかしくないと思うけれど……」

「さすがムーニヤン、それには気付かなかつたよ。やつぱり牧場経営者として、利用者に誠意を示さないとね。マジカル」

シャルルは家畜たちの身になって止めようとしたけれど、ムーニヤンのナイスイデアに、修二くんは牧場主の責任を果たして魔法を使いました。

「おおっ？ 尻の上のところに、顔写真が出たぞ！ これって、尻出してる本人の顔か!?」

抜け出そうと足をばたつかせるお尻の上に、女性たちの顔の画像が映し出されて、野次馬たちが沸き立ちました。

「すげえ、全員美人ばかりじゃないか！」

「右から三番目の子、すごい美少女だな。ちよつと性格キツそうだけど、そんな子がケツはまって動けなくなってるなんて……!!」

「うおおっ！ ONH69のミサりん!? マジか？ じゃあこれってミサりんの尻？ 舐ろうと思えば、簡単に触れるようになってるんだけど！」

「取りあえず写真撮って拡散だ！」

誰のかわからないお尻が並んでいるというの、それはそれで想像が掻き立てられるけれど、壁の向こうに隠

れてる顔が美人ばかりとわかって男たちの興奮が最高に高まりました。

「ひっ！ 私だつてバレちゃつてる!? ああつ、嘘つ。こんな姿見られちゃつたら、アイドル続けられなくなつちゃう！ 嫌あああつ」

有名なアイドルのミサりんが半狂乱になりました。

今時は、ちよつとしたことでもネットで炎上して、活動休止や下手すれば引退に追い込まれてしまうのに、壁からお尻出した姿を顔写真付きで拡散されてしまうのですから、芸能人も大変です。

「他の女の子もアップしとこうぜ。誰か身元特定してくれるかもしれないからな」

「おほ、早速ひとり特定きた！ この子、虹鳥学園のミスコン一位の白紗木真由ちゃんだつてさ」

「いやああつ、やめてっ！ 名前とか調べないでっ」

「他の女もどんどん写真アップして、調べてもらおうぜ！」

「こんな写真、ネットに流さないで！」

「なんで壁から抜けられないのよっ」
もちろん有名人じゃなくても、ネットに写真を晒しただけですぐに個人特定されて、名前や住所や通ってる学園まで拡散されてしまうので、うかうかできません。

ますます必死に抜け出そうと藻掻く家畜たちですが、壁の外のお尻が激しくくねって、男たちの劣情をますます

す刺激してしまいます。

「この尻って触っても構わないんだよな？」

「当然触つていいから、こんな所に並ばされてるんだろ！ 動きだつて触つて欲しいにますますスケベになつてきてるし」

「見ているだけじゃ我慢できなくなつた人たちが、手を伸ばしてきます。」

「ひあつ！ 触っちゃだめつ。見るのもだめえつ！」

不思議な力で壁にはめ込まれただけで、好きでお尻を並べてるわけではありませぬ。

お尻の動きだつて抜け出そうと藻掻いてるだけで、誘っているのではないのに誤解されてしまいました。

壁牝たちは、慌てて藻掻くのを止めます。

「だけど男の欲情はそんなことでは収まりませぬ。幾本もの指が一斉に、全てのお尻を鷲掴みにします。」

「ああつ！ いやああつ。お尻触つてるつ。揉んできてる。ああああつ」

「そんなに強く掴んだら、あうう、痛いっ。だめえ、放してつ」

「はうううつ。いやらしい触り方つ。気持ち悪いつ。やめなさいつてば、変態っ!!」

お尻への刺激に嫌悪感を顔いつぱいに表して、今度は触ってくる手を振りほどこうと腰をくねらせ始めます。

「おほつ、柔らかくえ尻つ。しかも気持ちよさそうにまた振り始めたぞ」

「アイドルのケツ、弾力すごいな。やつぱりダンスで鍛えてるからかな」

「だけど服の上からじゃ触り心地いいちだな。これつて脱がしてもいいんだよな？」

「触るのも自由なんだし、脱がそうと何しようとか構わないだろ」

「よし、脱がせ脱がせ！」

集団心理で罪悪感が緩くなり、お尻を触つた勢いでパンツやスカートを下着ごと引き下ろしてしまいました。

「いやああああつ！ やめてつ、ああああああつ!!」

「何するのよつ！ こんな犯罪なんだからつ!! 訴えてやるつ。あううううつ！」

何を叫んでも外には聞こえないし、たとえ聞こえたとしても興奮を暴走させる男たちには通じそうにありません。

服を押さえようと手を伸ばすけれど、虚しく壁に阻まれて届きませぬ。

女性たちはあつという間に全員お尻丸出しにされてしまいました。

「うおおつ、やつぱり尻は柔らかさも弾力も全然違う！」

「ムチムチのケツに指がズブズブめり込んでいくぞつ。たまんねえつ」

「あああつ、いやああつ。直に触るな、バカあつ」

「男の手がっ。お尻をおつ。気持ち悪いつ。あうううつ！」

尻の触り心地に採み方が激しくなると、格段に跳ね上がった不快感に女性の悲鳴も一段と高まります。

「触り心地も最高だけど、見た目もすごいな。ケツはもちろん、尻の穴もマスコも丸見えだもんな！」

「うへへ、アイドル陰毛濃いな。なののにこつちのOLはパイパンだぜ」

「アナルの皺もピンクから茶色まで色々だぜ」

「こつちの女、マンコのピラピラすくてクリも大きいな。そつちのスッキリしたワレメの方が好みだわ。もうクパつて開いてるし」

男たちがケツ弄くりながら目でも楽しみ始めたので、壁牝たちの悲鳴が泣き声まじりにまた激しくなりました。

「これだけ尻揉みまくつても大丈夫なんだから、もちろん穴の方も自由に使つていいんだよな？」

「と、当然だよな。手軽にやれそうなマンコ見せ付けられてるのに、挿入禁止とか、我慢できるわけないから！」

「入れるぞつ、チンポ!!」

「お、俺もだ。アイドルの穴でヌイてるぞつ」

一人が怒張したペニスを露出させる

と、我も我もと全員が続きました。

「さやあつ！」

もうすつかりと大量の我慢汁をあふれさせた蒸れ蒸れ勃起竿が、大量にさらけ出されました。

外の光景は相変わらず牧舎内にも魔法で空中に投影されています。

たくさんのオチンポを見てしまったシャルルンが、顔を真っ赤にしながら両手で顔を覆います。

もしかして男の性器を初めて見たのでしょうか、かなりショックを受けた様子です。

そんなウブな魔法少女の動揺にもお構いなしで、イカ臭い臭気が草地と化した真昼の繁華街に立ち込めます。

「入れていいわけないでしょ、バカあつ。汚いちんこ、近づけるなつ！」

「い、いやつ、いやああつ、誰だか知らないおちんちんに犯されるなんてつ」

「こ、これ、あんたたちの仕事なんでしょ？ 他のことならなんでも言うこときくから、こんなことやめてよつ」

迫るチンポに怯えながら、女たちは修二くんたちに懇願し始めました。

「あ、あの、嫌がつてるみたいだし、もうやめた方が……」

「ううん、他のことならなんでもつて言われても、僕、使い古した非処女穴なんかに入れたくないしな」

優しいシャルルンは家畜にも情けをかけるけど修二くんは渋ります。

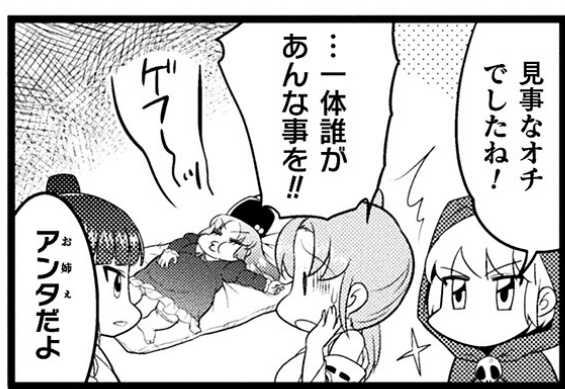
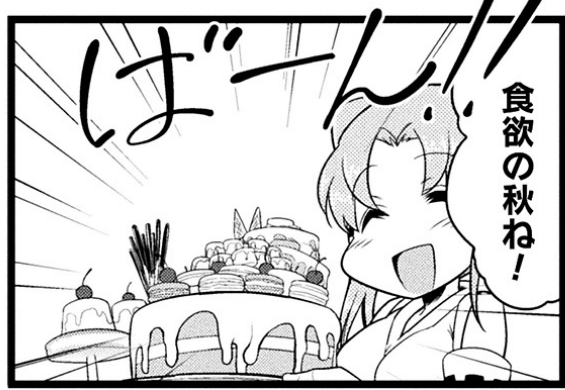
「誰とでもホイホイ寝そうなピッチマンコじゃ、野良牡の種で孕ませるくらいしか使い道ないよね」

ムーニャンも修二くんに同意して、図々しい使用済み牝に心底呆れた溜息を吐きます。

「ふ、ふざけんな！ 誰がお前みたいなデブガキの童貞チンポなんか入れさせるか!! いいからさつさとここから出せ……んおおつ。おうつ、おあ、あ、ああ、だめ、ふあ、い、入れちゃ、だ……め、ああ、あぐううつ」



食欲の秋





初歩的罠

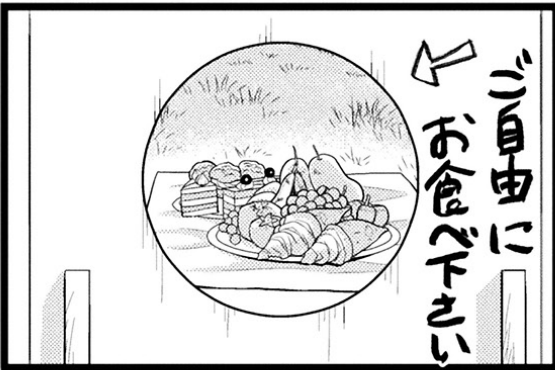
如月神社の双子巫女の姉。
おっとり巨乳で、男の靈に憑かれやすい。



如月鈴音
如月神社の双子巫女の妹。
靈力は弱いがしっかり者の常識人。



真中
如月神社に押しかけて居候している17歳。
珠音の中学時代の同級生。



もう手遅れ



最終

木

決着をつけて
くれようぞ!

勇者ア!!

よからう!
ならば本気だ

形態

こわがよるこび。
ほろびこそ美しい。
死にゆく者こそ美しい。

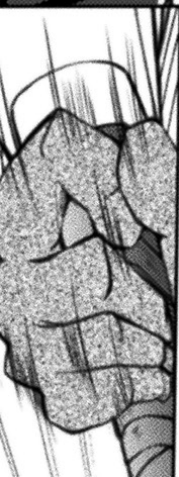
望む所だ
覚悟しろ!

大魔王
リヴィアス!

大魔王
リヴィアス

漫画
COMIC

ぱふえ





く...
そおっ



八八八八
やるでは
ないか!
人間!!

ア
キ



だが!

強さの
格が!

概念が!

違いすぎる
のだ!!

魔王と
人間では

キ





魔界の勝利を
人間共に突き
つけてやれ!

奴の首を
勿ねよ

アーハハ
ハハハハ



勇者と言えど
所詮は人の子

この大魔王
レヴィアスの
敵ではない

かしこまり
ました

元・

魔王殿

えっ!?

ガッ



な…

あ…

…





私は死人使い
ですからネエ

魔軍参謀
ノレク!

これは何の
つもりだ!?

人間との
戦争の完全勝利

おめでとう
ございマス

かか

あつ

こら!
さわるな

大魔王様の
指導力あれば
こそデシタ

デスガ

勇者の力で
封印させて
頂きマシタ



戦争が
終結した今

もう
魔王は用済み
なのデスヨ

ああいや
まだ仕事
が
ありマスネ



ククク...



産み増やす
牝としての
仕事

ま...か



戦争で減った
我々の子を



さすが魔王
牝の素質は
十分ですな

おっ
吸い付く
吸い付く

穴の
具合はと

やめん!!

ああっ

このっ!
壁めえ

ダッ
ダッ

触るな!

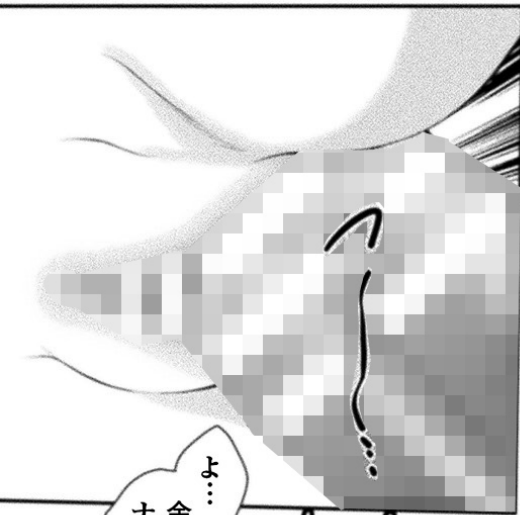
殺して
やるのこ!
手が届けば
貴様らなど

貴様らが
触れて良い体
ではないぞ

壁越しでは
何言ってるか
聞こえんぞ
ハハハ

覚悟は
良いな?

さあ
お遊びは
ここまで



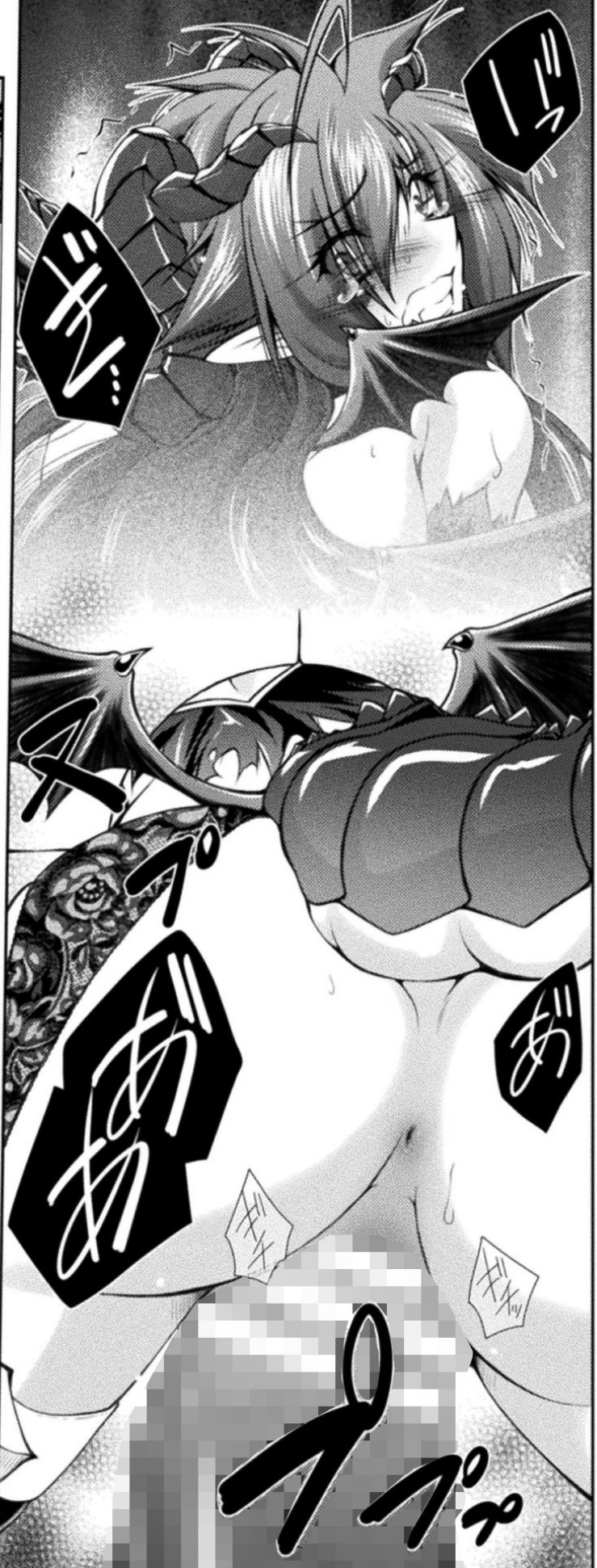
よ...
余の
ナカに



な...っ
入...て



な...っ





ははっ
魔王様が
処女との噂が
真だとはな

くじ引きで
一番になって
ラッキー
だよ!!



くじ引きだっ!!

魔王への反乱を
遊びのつもりか



処女らしい
良い締めまりだ

そらっ!
チンポの
くわえ方を
覚えろ!



余は
大魔王だぞ

こんな...
人間共と
同じ扱いなど



く...そお
はなせえ
ええ!!



魔法少女は尻にハメられ、
無抵抗の尻は痴肉と化す！



魔法少女 快樂牧場

まほうしょうじょ かいらくぼくじょう

◆ 壁尻調教編 ◆



小説 ^{せんやよみ} 千夜詠
NOVEL
挿絵 ^{しろくま} シロクマA
ILLUSTRATION

虹のアーチが複数見える。春の穏やかな日差しを感じるような気候で、汚れ一つない煉瓦通りの脇には大きな花畑があった。排気ガスもなく、澄み切った空気で、街の上空にまで蝶が飛びまわっている。

「ここが、魔法の国……」

幻想を散りばめたようなパステルカラーの家屋や、人間と動物が仲良く歩いている姿を見て、魔法少女スプレと、佐々川美葉は歓喜を込めた呟きを発した。

「やっつと、これなんだ」

艶やかなストレートの銀髪を肩まで伸ばした小柄な少女の隣を浮かんでいる彼が肯定してくれる。

「そうさ、ここが、魔法の国だよ」

小さな狸の縫い包みのような姿をした魔法の国の使者。彼に初めて出会ったのは、半年前だ。

魔法少女になって、悪い魔獣を懲らしめてくれたら、ご褒美に魔法の国に招いて、願いを叶えてあげるよ——にわかには信じがたい存在と言葉にも飛びついたのは、反骨心とも取れる正義感からだ。

通っている学園では風紀委員長長の肩書きを持っている。しかし、口煩く何度言っても更生しない連中に自分の無力さを感じていたタイミングだったのだ。

魔法の力を得ても、心までは変えられなかった。力づくで言う事を聞かせても無意味。だからこそ、望みを叶え

てくれる褒美を欲するのだった。

自分の他にも多くの女の子が魔法少女に選ばれ、戦っていた。互いに競い合うようにして、魔獣を倒していく中で、魔法少女スプレは、ちよつとした有名な人になっている。

臍出しのちよつびり露出の高いシャープさと可愛らしさを混ぜたコスチュームで、他の子とは決して組んで戦ったりはしなかった。一人で魔獣を倒すと、より多くの魔力が得られるからだ。卒業までの時間が限られた状態だったから、一分、一秒でも早く、魔法の国に招かれたかったのである。

強引にでも魔力を得ていったスプレは、いつしか、死神の異名までつくようになつてしまった。

魔獣王を名乗る大物を苦戦の末に倒したのは、つい十分程前の事だ。

「おめでとう、スプレ。君は、この短期間に信じられないような速度で成長し、ついに快拳を果たした」

暗雲の立ち込めた夜空から一筋の光が自分の体に降り注がれ、魔法の国に招かれるだけの魔力を得たのだと知つた。

時にはライバル、時には危ないところを助け、助けられた他の魔法少女らが、拍手で祝福してくれ、スプレはここに至る。

「おっと、まだ戦闘の後で、ポロポロじゃないか」

ここまで自分を導いてくれたボンズが治癒魔法で傷を癒してくれる。

「ありがとう、ボンズ、アンタのお陰よ」

お風呂場に忍び込んできたり、勝手にベッドに潜り込んできたりするちよつとスケベなマススコットだったが、彼がいなければ、途中で諦めていたかもしれない。

「それじゃあ、行こうか」
ボンズが先を進み、それについていく。美しい町並みを歩いていくと、この国の住人らが視線を送ってくるのだ。男性も女性も皆スマートで、整った顔立ちをしている。

「こ、こんにちは」
そう挨拶すると、微笑みで返してくれた。手を振ってくれる人もいた。

街を縦断して流れる川のせせらぎも眩しく、どこもかしこも美しく清潔感がある。

「素敵……、ああ、こんな国に、ずつと暮らせればいいのに」
前をゆくボンズのどす黒い笑みに気づくはずもなく、魔法少女は浮かれていた。

街から離れると、視界一面に広がった可憐な花々の咲き誇る緩やかな丘があり、真っ白な城が見える。

「あそこが、噂に聞いた女王様の住むお城ね。きつとあそこに向かつているのだわ」

しかし、道は途中で急激なカーブを描き、城からはどんどんと離れていくのだった。

「ねえ、どこに向かつているの？」

「そんなに慌てないで。ほら、もう少しで見えてくるよ」

高原に入り、まだ少し歩かされると見えてきたのは薄赤い色の広い屋根を持つ建物で、牛舎のように見えた。

「こつて、牧場なの？」

ボンズは答えない。黙って前を進む彼に、今はついていくしかなかった。近づくとつれて、独特の干し草の匂いが鼻孔に届いてくる。ただ、強烈な糞尿の臭いはなかった。代わりに、本能的に頬を赤めるような淫靡さが香ってくる。

鳴き声が聞こえてきた。牛や馬とは違うのは、すぐに分かり、それはまるで発情した猫のように思える。

「こ、ここに入るの？」
未成熟な女の子の体が警告を発しているように感じたが、緊張のせいだと考えてしまう。

「そうだよ。僕は君をここに導くために、これまで頑張ってきたんだ。さあ、入って」

促され、一歩前に進むと、畜舎らしい建物の扉が勝手に開いていく。生唾を飲み込んで、魔法少女スプレは薄暗い中へと踏み込んでいった。

後ろで扉が閉ざされていった事にまったく気づかない程に、少女はその光景に驚愕する。

真つすぐに伸びた通路を挟んで、菓の敷き詰められた左右には、大勢の女の子が横一列に並んでいた。皆、自分と同年代の年若い少女ばかりで、四つ

「はいの格好で鉄棒に繋がれている。——え!? この子たち、全員、魔法少女?」

「可愛らしいコスチュームと感じる魔力が確信させる。ただし、全員衣装はボロボロになっていて、半裸の状態だ。乳房が露れ、お尻が剥き出しにされて、そして何よりも、犯されていた。」

「ほおお——、チンポ凄いいいいい!」
「も、もう、ズボズボやめえ……、お、お、イクつ、まらイっちゃうう」

「もつとオマンコつ、挿き回してえ!」
美葉にだつて、性的な知識はある。が、目の前でセックスを見た事なんてなかったし、勿論、自分で性行為をした事もない。

「そんな彼女が、家畜のように繋がれて、股座を扶られ続けている少女の集団を見てしまつては、思考が状況を整理できなくても仕方がなかった。」

「い、いったい、これつて……、はっ!?」

大勢の魔法少女らを犯していたのは、漆黒の毛並みに狼のような顔をしながら、人間のような体格をした魔獣であったのだ。

慌ててスブレは振り返る。

「た、大変よ、こんな場所に魔獣がつ……、奴ら、ここまで攻めてきて……」

常に傍らにあつて、ずっと自分をフオーロしてきてくれたボンズが、ニツと笑つた。
「何を慌てているんだい?」

「だつて、あんなに沢山の魔獣が……。きつと、大軍で攻めてきたんだわ。だから、皆……」

「おかしな事を言うね。攻められてなんているいさ。彼らは最初から、ここにいたんだ。この——魔法少女牧場の職員としてね」

「何を……言っているの?」

さらにボンズは口角を上げ、悪魔の笑みのような表情を作つた。

「言つてなかつたっけ? 成長して強くなつた魔法少女は、その魔力でこの国を支える役割が与えられるのさ。魔法少女に快感を与える魔力が高くなる。それは通常の数倍の魔力になる。それを毎日のように搾り取り、消費して、魔法の国は成り立っているんだよ」

「嘘……、ご褒美は? 何でも望みを叶えてくれるつて……」

「ここにずっと暮らしたいつて言つたじゃないか。快楽を放ち続ける家畜として、ここで飼われ続けたい」

「騙したのね! じゃあ、私に近づいて、魔法少女にしたのは……」

「僕らはね、人間界に行つて、魔獣たちがその気になる可愛い女の子ばかりに目をつけて、魔法少女にしてきたのさ。でも、最初は弱いら、煽つて成長させる。で、強くなつた頃合いに、収穫するんだよ」

魔法のステッキを握る手に力が込められる。怒りに任せて、この全てを破壊したい衝動に駆られたが、これだけの大勢の魔獣を相手にしてはとて

敵わない。

逃げなきゃ——どんな手を使つても逃げて、人間界に帰つて、まだ信じている魔法少女らに、この事実を伝える必要がある。

ただ、目の前の憎らしい狸の縫い包みだけは、ここで倒してしまいたい。ステッキを掲げて、真つすぐに飛び込んでもいく。一撃で倒せればいいが、ダメでもそのまま一氣に扉に向かえばいい。

しかし、不意に力が抜けるのだ。

「え、なに、これ……」

「馬鹿だな。誰が君に力を与えたと思ふんだい? 快感で増幅された魔力さえただけだから、余計な戦闘力は封印させてもらったよ」

絶望感に動けなくなつたスブレの背後に数体の魔獣が迫ってくる。

引き撃つた表情で振り返つた魔法少女の腕を魔獣の一体が掴んだ。

「ヒイ……、は、離さない!」

「くく、覚えてるか、俺の事。人間界でお前に倒されたんだが、あの時は痛かつたな。まあ、ここで再生させてもらえらつて知つたからいいが……」

もう一体が顔を近づけ、臭い息を吐きかけながら、長い舌で顔を舐めてくる。

「う……」

「そんな、顔もするんだな。俺もお前に倒されたんだが、へへ、やつとここまで来たか。お前を姦るのが楽しみだつたんだぜ」

「俺も、戦いながら、そのガキの工口体を堪能する日を思い描いていたんだぜ」

取り囲まれ、涙目になりながら、しかし、気丈に睨みつけた。

「こ、こいつら……。奇るな! やつ!」

伸びてきた手が鋭い爪で胸元を削り、コスチュームの一部が引き裂かれる。剥き出しにされた片方の乳房は、小振りであったが、形良く女を主張し、牡どもの視線を集めてしまう。

真つ赤になつて隠そうとした腕は取られ、同時に足も掴まされた。四肢が強靱な腕の拘束で自由を奪われながら、仰向けにされて、体が宙に浮かされる。

「やめ——、な、何をする気」

大の字の格好で、身動きができない。取り囲まれた状態で、強烈な劣情を帯びた血走つた瞳で全身を見られ、戦士から女の子に心が戻つて、恐怖と羞恥で萎縮していく。

薄ら笑いに耐えながら、全身を揺り動かして逃げようとするが、ピクともしない。

まだコスチュームに隠れている方の乳房がむんずと掴まえられた。

「ちよ、触らないで……、いや……」

小さな胸は魔獣の大きな手の中にすつぽりと取まり、潰されそうに握られる。苦痛を滲ませる少女の表情に、奴らは興奮し、二体の顔が近寄せられた。べちゃ、と首筋が舐められ、ゾゾツと悪寒が走つた。泣きそうな顔を背け

ると、今度は反対側からも舐められ、唾液に塗れさせられる。

「ううっ、臭い……。ひゃ?!」

一斉に伸びてきた腕が全身を弄ってきた。細身ながらむっちり感のある太股が擦られ、小さな乳房とは対照的に良く肉付いた牝尻が揉まれてしまう。

——気持ち悪い。こんな事されて、快感なんて……。

こいつらの目的が、自分から快楽を搾り取る事であるなら、その目論見は的外れだ。魔獣なんかに体を弄ばれて感じるはずなんてない。

全身をいやらしく嬲られながら、魔法少女は耐えざる事を誓った。自分が気持ち良くならなければ、そのうちに諦めてくれるかと思っただけだ。

——大丈夫、こ、こんなの気持ち悪いただけだわ。これさえ、我慢し続ければ……、あ、あんっ!

その瞬間、ビクッと小柄な体が跳ねた。露出した胸、その小さな膨らみの先端。乳首がつんつんと舌先で突かれたのである。

まるで独立した別の生物のような舌は、くねり動きながら、小刻みな振動を与え、性感帯を刺激してきた。

「ん……、そこ、やめて……」

素直に弱さを露呈してしまったのは、やはり性行為への耐性のなさのせい。歯を食い縛るような表情を見せるスプールの反応に魔獣らはニヤニヤして、しつこく乳首を責めてきた。

「くう……っ、う、うう……」

転がされ、舐られる乳首が観察されるうちに伸びてしまう。

さらにお尻を弄っていた手が指先を谷間に忍ばせてきて、コスチュームの上からアナルが捉えられた。

「ビっ、そこ……、やだやだ——」

ぐりぐりと擦られると、どうしてもジーンと甘い痺れが発して、腰を躍らせてしまう。肛門の皺まで揺らされて、いやいや、と首を振るのだった。

気持ちいいとはまだ思えない。なのに、的確に与えられる刺激に体は翻弄されて牡を喜ばせる反射を見せていく。「そろそろ、僕もボーナスを貰わなくちゃね」

無理矢理に広げられている股間にポイズが寄ってきた。その直後、コスチュームの鼠蹊部が、引き裂かれ、股座が露出させられる。

「いや——、見ないで、見ないでつたら」

好奇と欲情の瞳が股間に注がれたのが分かった。

思春期に入っても成長の遅かった美葉の股間には、未だ大人の証が生えていない。形状も縦スジが深く切れ込んでいて、無垢さが強調されている。

コンプレックスを増大させられる羞恥に、とうとう涙を零すのだった。

「ぐふふ、思っていた通りの可愛らしいオマンコしてやがる。堪んねえ、これを抉ってやった時、どんな顔で泣くのか、ハア、ハア……」

縫い包みのような体の股間から、ア

ンバランスな巨棒が生えてくる。血管が浮き上がり、鋭角にエラの張ったそれを見せられ、少女は顔を引き攣らせた。

「え、抉って……」

「こまで魔法少女を連れてきた使者には、特権が与えられ、最初に犯す権利があるんだよ」

と可愛らしく言うのだ。そして次にまた悪魔のような笑みを見せ、

「じゃあ、いただきます」

肉棒の先端が、可憐なワレメに押しつけられる。気持ち悪さ以上に、恐怖感に苛まれ、スプレは叫んだ。

「やだあ——、無理っ、そんな大きなのっ、入るわけ——」

「平気だって。魔法少女はそんなに簡単に壊れないよ。でも、せつかくだから、普段は鈍くしてある痛覚を戻してあげる。記念すべき、破瓜の瞬間をこれで楽しめるね」

ぬぶっ——、遠慮なしに肉裂が押し広げられ、ペニスの形のままに膣が拡張されていく。

「んぎっ……、い、いたっ……、痛いっ、痛い——」

「だらしがないな。死神なんて呼ばれた歴代でも最強クラスの魔法少女でしょ、君は」

涙目を見開いて首を振る少女の下腹部からメリメリと音が響き、杭を打ち込まれるような感覚が重い衝撃を伝えてきた。限界まで広がった膣口から破瓜の出血が流れ、純潔を失った悲しみ

は、激痛の中に掻き消される。「いやあああ——、あ、あわ……、死んじやう」

凄惨な光景にも陵辱者は嗜虐の興奮を覚え、子宮を壊す勢いで、穿り返してきた。

「大袈裟だなあ。あ、でも、このオマンコ……、やつば、ちっさい子は良い締めつけをするね」

ぬっぶ、ぬっぶ、と奏でられる粘膜の摩擦音が聞こえる中、もうスプレは失神しそうになっている。完全に白目を剥いてしまう激痛に、感情は散らばり、涙を流しながら呻くだけ。

「あうっ、う、う、こ、殺すう……、こいつら、全部……、う、うぐ……」

歪んだ愉悅で初めてのレイプを多くの魔獣らに觀賞されている。屈辱、恥辱、怒りと悲しみ、それらがごちゃごちゃになって膨らむと、獣のように叫ぶのだった。

「あああああ——、あー、あー、ああああああつっ!」

仰向けで四肢を握られた状態で、腰を暴れさせる魔法少女を見つめながら、魔獣らは笑う。楽しそうに、嘲るように。

「ぐふふ、君は優秀な子だったから、特別に濃いのをあげるね」

ズンズンと膣の最奥までペニス叩きつけられ、その勢いが加速したかと思っていると、

ドプツッ! ドクドプドプツッ! 灼熱を感じさせる腐液が肉壺の中で



嫌悪する男に肉体を弄ばれ、
それでも恋人を想い懸命に耐える。

ネトラド 異世界転移

Netorare
Another World
Transition

身体を差し出す少女騎士

第二話 彼の為、彼女は身体を差し出す

小説 うえだ 上田ながの みち 挿絵 弥弛 あ
NOVEL ILLUSTRATION

「今……なんて？」
「ですから、私とセックスすれば元の
世界に戻ることは可能ですよと言った
んですよ」

どこまでも真面目な顔でそんな言葉
をジェイドは重ねて口にしてきた。
「なっ……ふざけるなっ！ そんな馬
鹿みたいな話」

「いいえ、事実です。私と身体を重ね
れば貴女は強大な力を得ることができ
る。それこそ、異世界への扉を開ける
ほどの強大な魔力を」

「……どういう意味？」
話の内容自体は人を馬鹿にしている
としか思えないものだったが、ジェイ
ドの顔は嘘をついているようにはとて
も見えなかった。

「姫様の話が嘘だということですよ」
「レイリアの話が嘘？ それって……
つまり……」

「異空騎士はどんな人間が相手であつ
ても、身体を重ねれば魔力を回復する
ことができるということですよ」
「誰が相手でも？ それじゃあ……な
んで私だけじゃなく奏多までこの世界
に？」

奏多は魔力回復の相手として必要だ
から呼ばれたのではないのだろうか？
「彼が呼ばれたのは偶然です。召喚対
象である貴女の近くにいた。それだけ
のことですよ」

「……そんな。それじゃあ奏多は私の
……」
本来ならばこの世界に来る必要はな
……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

「魔王を滅ぼすまでは貴女に帰っても
らつては困る。しかし、彼を帰還させ
る程度であれば問題はありませぬ。……
貴女に巻き込まれてしまった恋人を
帰したいのであれば、分かりますね？」
舐め回すような視線で夏凜を見つめ、
囁いてくる。

「まあ、貴女は私が嫌いなようですか
ら、なかなか決心は難しいとは思いま
すよ。ですが、それでも彼を思うので
あれば……」

それ以上ジェイドは言葉を続けては
こなかった。ただ、それでも魔術師が
言いたいことは……。

だが、結局その日は決断できなかつ
た。

「聖衣装を着ろ!!」
力が——奏多からもらった魔力が夏
凜の内側から溢れ出す。身に着けてい
た衣服が光の粒子となつて溶け消え、
代わりに一見するとブレザー制服にも
似た聖衣に全身が包み込まれた。

ただ——
力が……やっぱ減っている

しかし、初めて異空騎士の力を発揮し
た頃よりも、明らかに魔力量は減退し
ていた。それは多分、奏多からもらう
ことができる魔力量が少ないから……。

（駄目。今は変なことを考えるな！）
漆黒の刀を夏凜は構え、切っ先を目
の前の魔族へと向ける。

「異空騎士——殺すッ!! ガアアアア
の前の魔族へと向ける。

……

……

……

……

……

……

……

……

……

「アアッ!!」
強烈な殺意を全身に漲らせつつ、刃
に怯むことなく魔族は吠えた。ミノタ
ウロスとしか形容しようがない身長五
メートルほどの化け物が、ドストスト
地面を揺らしながら夏凜に向かって突
っ込んでくる。魔族の全身から溢れ出
る強烈な瘴気によって大気がビリビリ
と震えた。

「くっ!!」
聖衣を身に着けているとはいえ、現
在の魔力量で直撃を受けるわけにはい
かない。右前方に飛ぶことで魔族の突
進を回避する。

「逃がさんッ!!」
だが、すぐに魔族は旋回した。回避
した直後でバランスを崩した夏凜に対
して追撃を加えてくる。

（まずいッ!!）
これでは避けることなどできない。

「させるかああッ!!」
その刹那、恋人の——奏多の叫びが
聞こえた。

戦場に出る必要はないといつも言っ
ているのに、夏凜が心配だから待つて
いるだけなんてできないと、ついてき
てしまっている奏多の音が……。

ドンツと突き飛ばされる。夏凜のこ
れまで立っていた位置に、代わりに奏
多が……。

「奏多ッ!!」
思わず声を上げ、奏多へと手を伸ば
す。

そんな夏凜の前で、奏多は魔族の突
……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

前回のあらすじ
突然異世界に召喚されてしまった夏凜と奏多。夏凜は王国のお姫様レイリアと魔導師ジェイドから「異空騎士」として魔族
と戦ってほしい」と頼まれ協力を決めるが、恋人同士でセックスでしか魔力を回復できないと知らされ……?

進を受けて吹っ飛んだ。まるでトラックにでも撥ねられたかのような勢いで数メートル、いや、数十メートルも飛んでいく。

「奏多……奏多あああああ！」

「チツ……邪魔が入ったか……。今度こそ」

魔族の視線が自分へと向けられた。巨体に魔力が収束していく。凄まじい力だ。けれど、怯えなどない。魔族のことを考える余裕などない。今考えられることはただただ、奏多のことだけ……。

「邪魔ああああああつ！」

全身に魔力を行き渡らせる。刀身に力を収束させる。早くこいつを斬って奏多を救う！

「あああああああああああつ！！」

強い想いと共に刀を振り下ろし、魔族を斬った。

*

「大丈夫か……大丈夫か奏多つ！」

戦いの後、魔族の返り血に塗れながら、自分の魔力を流し込んで奏多の身体を治療した。

「ん……ああ、大丈夫。夏凛のお陰で助かったよ」

そう言っただけで奏多は笑う。ただ、その笑みは実に弱々しいものだった。ギリギリのところまで救うことはできた。けれど、本当に死んでもおかしくないほどの重傷だったのだ。どこか辛そうなのも仕方がないことだろう。だから

（奏多のこんな姿は見たくない。だから

ら戦場になんて出てきて欲しくは……でも……）

心のどこかでは、戦いの場にまでついてきてもらえていることに喜びを覚えてしまっていた。

魔族を倒す力はある。けれど、力があっても化け物を目の前にすると足が竦んでしまうのだ。

今、戦えているのはきつと、奏多が見ていくからだと思う。奏多がいなかったらきつと……。

しかし、それでも恋人が傷つく姿は見たくない。だからこそ、余裕を持って魔族を倒したい。が、それはできない。力が足りないのだ。

脳裏にジェイドの言葉が蘇ってくる。（奏多を元の世界に帰すにしろ。そうではなにしろ……私には力が……。だ

けど……でも……）

恋人を裏切りたくはない。絶対に……母のような人間にだけはなりたく

なかった。（どうすれば……私は……どうすれば……）

*

「決心は固まりましたか？」

数日後の夜、迷いに迷った末、夏凛は宮廷魔術師ジェイドの部屋を訪れた。金色の髪の大柄な男が不敵な笑みを向けてくる。

「……この間の話……嘘ではないな？」

静かに尋ねた。

こんな選択はしたくない。しかし、これ以上奏多を危険に晒すわけにはい

かなかつた。彼は自分のせいでこの世界に連れてこられた。大切な家族と引き離されてしまった。絶対に守らなければならない。彼だけは元の世界に……

……。だから……だから……。「本当に貴方……お前とすれば……」

「はい、嘘だったら私を斬っていたでいて構いませんよ。と……そこまで私が口にしても信じられないのであれば、少しだけ試してみますか？」

「試す？」

「はい。セックスではなく……口で私のものに奉仕をしてください。意味は……分かりますか？」

「えっ!? な……何をふざけたことを！」

唐突すぎる言葉。想定外の提案に思わず声を荒げてしまう。

「別にふざけてなどいませんよ。私のものを口です。それが試しになるのです」

夏凛の唇を見つめながら言葉を向けてくる。

「魔力回復は別にセックスを行う必要はないんです。人間が興奮した時に発する精気——それを吸収することさえできれば、別に繋がりが合わずとも回復はできるのですよ。まあ、実際身体を重ねた方が回復率は大きいですけどね」

怒る夏凛に対し、ジェイドは動じることなく説明してくれた。真面目な顔での淡々とした説明——内容自体はともんでもないものだけれど、嘘をついているようには思えない。

言いたいことは理解できた。

「さて、いかがですか？ やりませんか？ やりませんか？ 私はどちらでも構いませんよ」

ジツと見つめて来る。向けられる視線——思わず視線を外す。

（レイリアも帰還する術を隠してはおけないと言っていた。だから多分、こいつの言葉は本当のことだと思う。だ

けど……でも……）

奏多を裏切りたくはない。しかし、思い出してしまう。この世界に来てから何度も自分の目の前で傷

ついできた奏多の姿を……。（あんな姿……もう……）

奏多を守る。その為ならばなんだって……。

だって、好きだから。彼のことが大好きだから……。

母とは違う。自分の享樂のためだけに父を裏切った母とは……。

「……分かった。やる。試させてもらう」

奏多の為——その思いを免罪符に決断を下した。

「ただ……始める前に一つだけ聞かせて欲しい」

「とはいえ、すぐさま行動に移るわけにはいかない。」

「なんでしよう？」

「お前とレイリアの話聞いた時、お前はレイリアにこの国の為には帰還方法は隠しておくべきだ——みたいなこと

を言っていた。それなのにどうして帰還方法を私に？」

その点の矛盾だけは解消しておきたい。この男が何を企んでいるのか分からないからだ。答えいかんによつてはこれまでの話すべてが嘘という可能性だって出てくる。

「ああ、その話ですか。それは単純なことですよ。貴女に帰られてしまったら困るからです。異空騎士である貴女がいなければ、この国も、この世界も終わりですからね。しかし、貴女には聞かれてしまった。だったら素直に話しておいた方がいいと思っただけです。信頼関係というのは重要ですからね」

「……隠しておいてよくも信頼なんて……」

「私にも事情というものがあるのでね。まあ、そういうわけですから、試した後、これからも行為を続ける気になった場合には契約をしていただきたい」

「契約？」

「……たとえ異界への扉を開くだけの魔力を集めることができたとしても、魔王撃破まで少なくとも貴女は帰らないという契約を……。もちろん、彼を帰すことに異論はありません」

「それは……まあ納得できる……か」

ジェイドの話におかしな点はないように感じた。

「さて、他に質問は？」

問いかけに対して押し黙る。何かないか……何か回避する方法は……そんなことを考えてしまう。

「ないようですね。では、始めましょうか」

だが、こちら此方の思考などジェイドはまるで気になどしてはくれなかった。

「……今日は遅いなあ」

風呂に行く——そう言つて夏凛は奏多を残して部屋を出て行つてしまった。テレビもスマホもない部屋で一人きりという状況。寂しい暇だ。

それに——

（正直言えば心配だ）

城の中だから大丈夫だとは思うけれど、ここは現代の日本とは違う。場合によつては城の中に変な連中が侵入してきてる可能性だってなくもない。もし夏凛に害をなそうとするような者がいたら……。

考えるだけで胸が苦しくなる。

（つて、あり得ない。夏凛はこの世界の救世主なんだ。心配のしすぎだバカ！）

膨れ上がった不安を心の中で一蹴すると、ゴロリッとベッドに一人寝転がった。早く戻つてこないかな——と無邪気に考えながら……。

「では、ローブを脱がせてください。貴女自身の手で私のものを……」

「……分かった」

やりたくない。やりたくないやりたくない。

けれど、脳裏には傷ついた奏多の姿がちらつている。やる以外はない。

嫌悪感を覚えつつも、指示されるがままにジェイドの前に跪き、彼のローブの下衣を脱がせた。

ポロンツと肉棒が露わになる。まだ何もしていないから勃起はしていない。けれど、通常状態だということの明らかなに屹立している時の奏多のものよりもジェイドのそれは大きかった。

ずるりと皮も剥けている。

（……凄いい匂い）

肉棒を目の前にする。ムワツと噎せ返りそうなほど濃厚な牡の匂いが夏凛の鼻腔をくすぐつてきた。

（奏多のよりずつと匂いが濃い）

別に風呂に入つていないというわけではないだろう。ジェイドのペニスには赤黒くはあるけれど、恥垢などがこびり付いているということはなかった。

仮性包茎味の奏多のペニスより、どちらかという綺麗に見えるほどである。だというのに匂いはずつと濃厚だ。スンスンと嗅いでいるだけで、なんだか頭がクラクラしてしまいそうなほどである。

（これが大人の男の匂いなのか？）

「さて、それでは始めてください」

果然とペニスを見ながら考えていると、行動開始を促されてしまった。

だが、動けない。

「どうしたのです？ 始めてください」

言われなくても分かっている。けれど動けない。

「……そう言われても、どうすればいいか……」

それが分らないから……。

「ほう、もしや……口でするのは初めてですか？」

「ない。口でなんてできるはずがない」

「なるほど、つまり夏凛様の初フェラチオは彼ではなく私ということになるのですか？」

夏凛の答えにジェイドは嬉しそうに口元を綻ばせた。そんな顔に嫌悪感がわき上がってくる。こんなことならば奏多にしてやれば良かった——とさえ思った。だが、何を考えたところで後の祭りだ。

「では、私の指示に従ってください。そうですね、まずは私のものにキスを……」

「……なつ!? そんなこと……」

「できるでしょ？ まあ、したくないというのであればそれでも構いませんが……」

けれど、その場合魔力を得ることはできませんよ——と視線で暗に伝えてくる。拒絶などできない。

（奏多……）

泣き出しそうな奏多の表情が思い浮かんでくる。こんな男に口奉仕をしたなどと彼が知ったらどれだけ傷つくだろうか？ 本当に罪深い。

しかし、やらなければきつといつか奏多は戦場で命さえも……。

（守る。何をしてでも……だから……すまない）

心の中で謝罪し、目の前のペニスに唇を寄せる。躊躇しつつも「んちゅっ」

と命じられるがまま肉先に口付けをした。口唇に生温かな感触が伝わってくる。同時にヒクンツと肉棒が震えた。「ひっ」

反射的に口唇を離す。

「ふふ、その調子です。その調子で何度も……ね」

そんな夏凜の動揺などまるで気にすることなく、ジェイドは指示を重ねてきた。

「……わ、分かった」

頷く以外に選択肢はない。

やりたくない。触れたくない。恋人がいるのだ。好きな男がいるのだ。大切な人が……

でも、その人の——奏多の為に……

「んっちゅ……ふちゅっ……ちゅっちゅっちゅっ」

身体を強張らせつつ、再び肉棒にキスをする。それも一度ではない。何度かというジェイドの命令通り、繰り返し繰り返して膨れ上がった赤黒い亀頭部に口唇を押しつけた。

「いい感じですよ」

煽るようなジェイドの言葉。おぞましさに身体が震える。奏多に対する申し訳なさで心が押し潰されそうになる。それでも行為を止めはしない。これは奏多の為にと言いつつ自分に自分自身に言い聞かせ続けながら、亀頭に口唇を密着させ続けた。

その結果、ペニスが勃起する。

夏凜の目の前で、今にも破裂しそう

なほどに硬く、熱く、屹立した。

「……嘘」

ガチガチに硬くなった肉槍。それを見て思わず咳いてしまう。

「どうかしましたか？ 何か彼とは違う点でも？」

「あ……べ、別にそんなこと……」

動揺は見せたくないでなんでもないと口にはしたのだけれど……

（こんなに違うの？）

違う。そう、全然違う。目の前のペニスは奏多のものとはあまりにも違っていた。

大きく開いたカリ首に、肉茎に浮かび上がる血管。奏多のものよりも太さも長さも一回り以上はあるように感じられる。

男——というよりも牡といった方が正しそうなくらい、逞しい肉槍だった。これと比べると奏多のものは本当に子供のものかと思えない。

想定以上のペニスの変化に、呆然としてしまう。

「いかがいたしましたか？」

「へ？ あ、べ……別になんでもない」

動揺を隠すように慌てて首を左右に振った。

「そうですね。では、次の行動に移してもらいましょうか。私のものを……」

「舐めてください」

指示が飛ぶ。だが、動き出せない。怖い。

「どうしました？ できませんか？」

ならば……魔力回復は諦めますか？」

「それは……。それは駄目。やる。やる……から」

キス以上に受け入れがたい命令だった。だが、頷くしかない。躊躇いつつも、命令に従う。ゆっくりと肉槍に舌を這わせた。レロツと膨れ上がった亀頭を舐める。するとすぐさま舌先に塩気を含んだペニスの味が伝わってきた。

これがこの男の味——不味いとか苦いとか、そういうことない。けれど、ただただしょっぱい。男の汗や体液を舐めている現実を突きつけられるような味だった。おぞましさが増幅する。

けれど、行為を止めることはできない。始めてしまった。してしまった。もう、後には引き返せない。だったら……

早く終わらせる）

苦しみは短い方がいい。

「ちゅれるっ。れろっれるっ……んれろお」

一舐めだけでは終わらない。さらに舌をくねらせる。まるでアイスでも舐めるかのような勢いで、ジェイドの亀頭を舐り回した。

「ふふ、いいですよ。その調子です」

心地よさそうに魔術師は眼を細める。だが、この程度で満足してくれてはいなかった。

「ですが、少し単調です」

「単調？ それじゃあ……どうすれば……」

「どうすれば？ 指示を待つだけでは駄目ですよ。人間、自分で考えないと人を小馬鹿にするようにジェイドは

笑う。腹が立つ態度だが、逆らえない。（どうする？ えっと……こ、こうか？）

「ちゅろろ……ふっちゅろ……んちゅれるお」

必死に考え、行動に移る。ただ肉先だけを舐めるだけではない。カリ首をなぞったり、裏筋を舐め上げたり、様々な場所に舌を這わせてみた。指示や命令ではなく自分自身の意思で……。その動きは無意識だったけれど、まるで本物の恋人に奉仕しているかのように濃厚なものとなっていた。

「いい感じですよ。これは、私も我慢できなくなりそう。ですから……そろそろ啜ってもらいましょうか。夏凜様……貴女の口で私のものを」

そこまで奉仕して尚、この地獄のような時間は終わらなかった。さらなる指示が飛ぶ。

（これを……啜える）

ただでさえ大きかった肉槍は、舌奉仕のお陰かさらに肥大化していた。亀頭なんか今にも破裂しそうなほどパンパンである。不気味だ。啜えたくない。

けれど逆らうわけにはいかない。（もし魔力回復の話が嘘だったら……殺してやる）

生まれ初めて人に対して殺意さえも抱きつつ、夏凜は「んあっ」と小さな口を限界まで開くと、巨大すぎる肉棒を啜え込んでいった。

「んっも……もっもっ……んもおお……」



半分ほど肉棒を呑み込む。するとそれだけで息が詰まった。呼吸が阻害され、嘔吐には涙さえ浮かぶ。

「ふふ、入っていきますよ。彼とはキスしかしたことがなかった口……。ああ、気持ちいいですよ。そのまま頭を前後に振って扱ってください」

わざと奏多を意識させるような言葉で挑発してくる。そうした態度に怒りがより膨れ上がる。だが、ジェイドの言葉に従う以外の選択肢はない。

「し……ぎよく……？ こ、こふっ？」
その命に従うように——
「んじゅ……じゅう……んぼ……むぼ
おお……んじゅぼっ！ じゅぼっじゅ
ぼっじゅぼっじゅぼっ」

頭を振り始めた。
浮かび上がった血管によってゴツゴツとした肉茎を、口唇で擦り上げていく。唇を窄めることでキュッと強く締めつけながら、幾度も幾度も口腔全体でペニスを刺激した。

「いいですよ。その調子でもっと……
そうですね、私のものを吸ったりもしてください」
「んっじゅる……ちゅずるっ！ んじゅるるるる」

口内いっぱいには牡の匂いが広がる。吐き気さえこみ上げてしまうほどに気持ちが悪いくらい。それでも逆らはいはしない命じられるがままに頬を窄め、肉槍を吸った。ジュルジュルという下品な音色を室内中に響き渡らせる。

（奏多……奏多……奏多……ごめん。）

「……私を許して」
「……だか

だけど、全部奏多の為だから……だから……私を許して」
心はひたすら奏多だけに向けながら、射精してくれと口腔全体で訴える様に肉先を吸引し続けた。

「んっも……もふうっ……もじゅるるるる」
跪いて頭を幾度も前後させる。情けなさすぎる姿だ。それでも続けるしかない。口腔全体で精液を搾り取ろうとするかのように肉槍を刺激し続けた。

「くっ！ では、イキますよ」
そのお陰か、遂にジェイドが限界を訴えてきた。反射的にペニスを離そうとする。しかし、魔術師はそれを許さないともいうように、両手で夏凜の後頭部を押しさえ込んできた。

「ぐぼおっ！」
食道に届くほど奥にまで肉槍が突き入れられる。首元が内側からポコッと膨らんだ。凄まじい衝撃に瞳孔が開きそうなほどに瞳を見開く。

「あっば！ ンぼっ！ おぼおおおおっ！！」
瞬間、射精が始まった。夏凜が苦しうに身悶えていようが容赦などしてはくれない。ドクドクドクドクと白濁液を喉奥へと流し込んでくる。その量は一瞬で口腔が満たされてしまうほど多量だった。

（おお……多すぎる！ 凄く熱くて……生臭い。これ……溺れる。私……精

液で溺れるっ！！）

まるで白濁液の海の中に沈められたのではないかと錯覚さえしてしまうほどだった。息が詰まる。呼吸を求めて口腔からペニスを引き抜こうと藻掻いてしまう。だが、頭を押さええられていく状況ではそれもできはしなかった。

「あつぷ……んふううっ」
「はああああ……最高でしたよ」
やがて射精を終えたジェイドが心地よさそうな吐息を漏らす。

「お……わった？ にやら……ぬ……ぬい……抜いで……うっぶ……あぶううっ」
「駄目ですよ。まだ抜きません」
「にや……にやれえ！」

「簡単なことです。飲んでください。全部ね」
「しよんな……ころ……れきるわけ……」

「そうですね？ まあそれならそれいいですが……その場合、貴女の行為は全部無駄になりますよ」
それはどこまでも残酷な言葉だった。（か……奏多……）

こんな姿を奏多に見られたら……。彼が悲しむ顔が浮かんでくる。胸が砕けそうなほどに痛んだ。強い後悔を覚える。耐えきれなくなつて涙さえ零してしまふ。

（ごめん……ごめん奏多……）
心の中で何度も謝罪しつっ——
「んっぎゅ……ごきゅっ……ごきゅっごきゅっ……んげっほ！ げほっげほ

っ！ んっ……んふうう」

濃厚すぎる精液が喉に絡まる感覚に咳き込みながら、喉を上下させてゴクゴクとジェイドの精液を嚥下した。胃の中に生温かいものが広がる。肉体に染み込んでくる。まるで自分の身体が奏多のものではなく、この男のものに変えられていくかのような感覚だった。おぞましい。あまりにも……。それでも行為を止めることはできない。ただひたすら嫌悪感に抗い、牡汁を喉奥へと流し込み続けた。

「んっぶ……はああああ……」
飲み干すと同時にペニスを引き抜く。反射的に吐き出した吐息は、自分でも分かるくらいに白濁液臭かった。

最低で最悪な状況。死にたいとさえ思ってしまう。だが、感じるものは絶望だけではなかった。

（ああ……これ……感じる。魔力を……）
身体の内底から魔力がわき上がってくる。その量は、口奉仕しただけだというのに、明らかに奏多と身体を重ねた時以上のものだった……。

「あ……お帰り夏凜。今日は長風呂だったね」
城内に用意された部屋に戻った夏凜を、奏多が笑顔で迎えてくれた。

「あ、うん……たたいま」
短く答える。

そんな夏凜に奏多が近付いてくる。いつものように抱き締めようとしてく

……

アツツルン下社には
黒い噂がある

それを確かめる為に
私たち潜入官が
やってきたのだ

近年の急成長には
人身売買が絡んでいると

初めての潜入…
緊張するなあ…

さくら先輩
まだかなあ…

来た…!!

15階は無人
全てクリア済

私も15階に急がなきゃ!

新米捜査官が忍び込んだ先は

女潜入捜査官、 凌辱

～壁尻調教



はてしなく...



まじろ

まじろ

...さくら先輩
どこですかー？



はか

!?

まじろ!!?

まじろまじろ!!?



いいかつこだな
潜入官ども

…アンタは
アプグルント社の
会長!?

最近うるさい
蠅がいると聞いて
罌を張って
待っていたが

ここまで見事に
ひっかかるとはな

くっ…!!

自分の立場を
わからせてやれ!

…はっ!

きゃあああ!
な…何!?

良い音だな

潜入者は殺しても
良いのだが

お前たちは思ったよりも
上玉だからな

たっぷり調教して
雌豚壁オナホとして
出荷してやる

やはりこいつらは
人身売買を……

私たちを
売り飛ばす気!?

それが我々の仕事
だからな

……あー

ニヤッ



体が熱くなって...!?

何これ...!?

な...!?

これは牛でも正気を失う超強力媚薬だ

お前たちはどれくらい人間としての意識を保っているかな?

ちやぶん

馬鹿な!

このような物に負け……

.....!!?

は…あつ
先輩…ツ私…
体…変で…す…ツ

桃子…!
耐えなさい!

これくらい…訓練で
やってきたでしょう!?

で…でも…
これは…凄くて…ツ

はあ
はあ

異変…に…気づいた味方が
助けに来て…くれる…から…
それまで…耐えて…

あひいいい!!

ぼんっ

ぼんっ





本当だ！
もう濡れてやがる！

この淫乱女め！

んぐ
んぐ
んぐ

調教する前から
壁オナホ適性が
あるなんてな



違う…
そんなことは…ッ！

先輩…ッ

苦し…ッ
ドキドキドキ…ッ



ははっコイツ

何もされてないのに
乳首立って
やがるぜ!

わ、私...
どうし...て...

あっ

あっ



先輩が...あんな風に
なってるから...

んあ...
あ...

私まで...



そうか...先輩が...

ん

壁尻女騎士 カロリーヌ

壁尻人間牧場での淫らな躰が正義の女騎士の心を折り砕く!!

小説 さかい ひとし 酒井仁
NOVEL
挿絵 はるみ ハルアミ
ILLUSTRATION

【シーン1】

「あれか……」

鬱着と茂った森の奥にひっそりと佇む洋館。一見、静まり返っているようだが、中には人の気配が幾つもあり、おそらくは地下室などもあるだろう。

屋敷を窺っていたのは、豪華な金髪を緩くウエーブさせた女騎士。

長身を包む白い騎士服に軽甲冑。だがその胸元は隠しきれないほどのボリューム感。

王立歌劇の役者かと思紛うほどの美貌に、くびれた腰と成熟した腰回り、すらりと伸びた太腿は駿馬のように引き締まっている。

それらは潔々しさと美しさを兼ね備えた彼女が、うら若き乙女であることが物語る。

華麗なる女騎士の名をカロリーヌ・メルトヴィンテという。

カロリーヌは女でありながらかなりの剣の使い手であり、その身軽さゆえに単身で王国領内の犯罪に関する捜査を行うことも珍しくなかった。

今カロリーヌが探しているのは、フランソワーズという名の貴族令嬢であった。とある夜会に向かう途中で賊に襲われ、使用人は無残に殺されたが、令嬢だけが行方不明であった。

「あの屋敷で間違いなさそうだ」

令嬢の身の安全を考慮して密かに調査を進めていたカロリーヌは、とある

噂を耳にした。森の奥の屋敷に幾人もの男たちが出入りし、そこに若い娘たちが連れ込まれているというのだ。

「しかも連れ込まれた娘たちが屋敷から出てくることはないという。ことによると、大規模な組織犯罪の可能性もある」

カロリーヌは夜になるのを待って、音もなく屋敷に潜入した。まるで屋敷に忍び慣れた義賊かにかのようだが、これはカロリーヌの持ち前の運動神経と大胆さによるもの。

しかし乙女の胸の内には確固とした騎士道精神が宿っている。

いかに堅牢に見える屋敷であれ、人の出入りがある以上、必ず潜り込む場所が存在する。女騎士は警戒しつつも屋敷の深部に進んでいった。

（思ったとおり、地下室があつたな。しかもこの声は……！）

抜け道の先に微かな灯りが見え、そこからいかにも粗野そうな男たちの笑い声が聞こえてくる。

「ひえへへへ、そろそろ感じてきたんじやねえか、ああ？」

しかし男らに罵られているであろう、娘たちの声は聞こえてこないことに、カロリーヌは疑問を覚えた。

そつと地下室の内部を覗き見た騎士カロリーヌは——絶句した。

（な、なんだあれは!?）

なんとということだろう。

石壁からよつきりと並んで生えているのは人間の尻。それも若い女の臀

部であつたのだ。

一瞬、作り物かとも思ったが、青白い血色と時折ひくひくと痙攣するさまは、それが間違いなく生きた娘の尻であることを物語る。

「ひひひ、いい濡れっぷりだぜ。こりやそろそろ『出荷』も間近だな」

尻を撫でまわされている娘たちの下半身は一樣にぐつたりして、抗議の声を上げる気力もなさそうだ。

否、たとえ悲鳴を上げてこの地下室の厚い石壁に閉ざされ、なにも聞こえはしないだろう。

（あれらは全て、連れ込まれた乙女たちか！ そういえば、奇妙な噂を大臣から聞かされたことがある）

それはなんとも異様な噂。妖術を使う魔導師が若い娘を「壁尻女」なるものに仕立て上げ、それをあたかも美術品のごとく高額で売り捌くという、人身売買組織の噂であつた。

（よもや……いや本当にそんなことがあるとは思わなかつたが）

少女たちは一糸まとわぬ全裸で、尻だけを壁から突き出している。だが上半身は石壁の向こうにあるのか、身動き一つできないに違いない。

いくらかがこうともびくともしない石壁に閉じ込められた裸身の少女たちの身体を、屈強な男たちが罵りものにしていただつた。

「こつちの股ぐらからも粘っこいスケベ汁が垂れてきてるぜ？」

「このでか尻を見ろよ。こりやあ間違

いなく高値がつくぜ」

石壁から突き出たむき出しの尻の奥に、男が無遠慮に指を突っ込んでかき回す。

くちゅ、くちゅと湿った音をわざと大きく響かせ、男たちが卑猥な笑い声を漏らす。その異様な光景に、カロリーヌは頭に血が昇るようだつた。

「そこらの人買いに攫われるより、こいつらの将来はよほど安泰だしな。金持ちに買ってもらって、一生その石壁の中で可愛がられるんだからな」

「ああ、それで俺たちの懐もたつぷり潤うつてもんだぜ」

男が手首をくねらせると、娘の股間からは濡れた音が響く。

それは、彼女たちを「美術品」に仕立て上げるための工程。少女たちはここで飼育調教され、「壁尻女」に育て上げられているのだ。

（こんなことが本当に……いや、これは現実だ。ここは邪悪なる魔導師が作りあげた、『壁尻女』の調教部屋、いや……『牧場』だ！）

女騎士の胸に、正義の焔が燃え上がる。同じ女として、いや人としてそのような外道が許せるはずもない。

すぐにでも飛び出してあの男どもを斬り伏せてやりたいところだが、カロリーヌは鋼の克己心で己を抑えた。

（私は一介の騎士。目的はあくまでフランソワーズ嬢の奪還だ。それにあの男たちは、どう見ても魔導師などには見えない。その魔導師、真の黒幕を押し

さねば意味がない)
なおも罵られる娘たちに心の中で謝りながら、女騎士は「壁尻女牧場」を観察する。

と、そのときである。

「首尾はどうだ——」
低い声が地下室に響いた。ハツとしてカローリーヌが視線を走らせると、そこに黒ローブを頭からすっぽりと被った、やや小柄な男がいた。

だがその体格とは裏腹に、屈強な男たち、壁尻女を調教する調教人の間に緊張が走る。

「こ、ゴズワルドの旦那。へい、身体の方は順調に仕上がってます。あと一息で心も折れてしまいまさあ——」
「そうか——」

（ゴズワルド、あれが魔導士か——
たしかに異様な存在感だ）

誘拐した良家の娘たちを「壁尻女」に仕立て、美術品と称して売り捌く大悪党。だがカローリーヌは、魔導士の傍らに一人の少女が佇んでいることに気づいた。

（あ、あれは、フランソワーズ嬢！）

やや薄めの茶髪は絹糸のようにまっすぐで腰まで伸びている。こげ茶色のワンピースドレスに施された刺繍や装飾は、明らかに庶民の着るものではない最高級品。

人相書きで見た顔に相違ない、静かに目を伏せ、魔導士の横に佇む美少女こそ、カローリーヌの救出対象であるフランソワーズである。

（くっ！ 私の任務はフランソワーズ嬢の奪還、しかしこの悪漢どもを一網打尽にできるチャンスかもしれない）
「さあ服を脱ぐがよいフランソワーズ。お前もじきにあの石壁に埋め込まれ立派な『壁尻女』となるのだ」
「……………」

魔導士の言葉に、美少女は無言でワンピースドレスの首元に指をかけて衣服を脱ごうとする。

突然見知らぬ屋敷に拉致監禁されるこんな陰惨な場面を見せられて、抵抗する気など起こらないに違いない。
（私はどうすれば…………！）

「諸悪の根源、あの魔導士さえ倒せばこの組織を壊滅できる——」
↓ P211 シーン2へ

「悔しいが、ここはフランソワーズ嬢の救出を優先すべきだ」
↓ P214 シーン3へ

【シーン2】

「か弱き乙女を穢すその行い、正義の眼差しが見逃すと思うてか！」
「ぎやあつ？」

調教人が振り返ったときには、既に仲間が一人叩き伏せられていた。炎に照らされた金髪をなびかせ、女騎士の影が疾風のように走る。

「なんだこいつ、どこから…………」
二人目の首筋に剣の峰が撃ち込まれ、

どざりとその場に昏倒する。残りの男たちもおっとり刀で剣を手にするが、カローリーヌは右に左に身をかわす。

「こいつ早…………ぎやあ！」
カローリーヌの狙いは調教人たちではない。狙いは一つ、魔導士ゴズワルドただ一人だ。

（いかに魔導士といえど、呪文詠唱の時間も与えず強襲すればひとたまりもないはず！）
ちん、と金の拍車を鳴らして黒フリードの男に肉薄した、そのとき。

「ふつ、愚かなネズミよ——」
「なんだと…………うあつ!？」

魔導士が軽く手をかざした瞬間、快進撃を続けていた女騎士の歩が止まった。その足首に紐のようなものが幾本も絡みついていたのだ。

「魔導士の館に侵入者への備えがないとでも思っていたのか？」
見ると、無数の石が組み合わさってできて壁の隙間から、糸のように細い細い触手が何十本と這い出てきて、カローリーヌの手足を拘束しにかかっていたのだ。

一本一本の力は弱くとも、何十本、何百本となれば女騎士といえど簡単に引きちぎれない。もちろんこれは、あの魔導士による魔法であろう。

「くう、ぬかつた…………うぐうつ！」
女騎士の細い首にもおぞましい糸状の触手が巻きついて、ぎりぎり締めあげ始める。

剣で切り裂こうとする、その手首に

も触手が巻きつき、カローリーヌはついに長剣を取り落としてしまった。

「ぎ、ざまあねえ…………さつきはよくもやってくれたな——」

カローリーヌに打ち据えられた男がよろよろと立ち上がり、復讐心に燃えて大剣を握り直す。

（こ、こごまでか…………）
「やめんか、馬鹿者！」
だが、男を叱り飛ばしたのはなんと魔導士だった。

「せつかくこんなところまで潜り込んできたのだ。あつきり殺しては勿体ないではないか…………くくくく」
不気味にほくそ笑むゴズワルドの声を遠くに聞きながら、カローリーヌの意識はやがて闇に飲み込まれていった。

「……………はつ？」
目覚めは唐突だった。と同時にカローリーヌの手は剣を求め、その手がびくともしないことに気づく。

「な…………なに…………？」
目の前に広がるのは誰もいない無人の部屋。だがカローリーヌは腕ばかりか脚も腰もまったく動かせない。身体に感じるのは、ぞつとするほど冷たい石の感触。

（む、胸が…………！）
豊かな胸部を覆う甲冑は外され、引き下ろされた騎士服の下から真っ白い肉球がこぼれ落ちていた。

カローリーヌの位置からは見えないが、かろうじてスカートと銀の脚絆はは

たままだが、股間がスースーする。下着を脱がされ、ほとんど臀部が丸見え状態なのだ。

なんとも恥ずかしい半裸状態に剥かれ、女騎士の頬が熱くなる。染み一つない乙女の柔肌と、冷たく硬い石とのコントラストが不気味であり、扇情的でもある。

「くっ、こ、こんなもの」

だが邪悪なる魔法によって固められた石壁は、カロリーヌの抵抗を受け付けけない。

必死にもがいても、量感たっぷりの乳房がわずかに揺れるばかりで、却って女騎士の優美なボディラインを晒すことになってしまう。

いかに鍛えられた女騎士とはいえ、甲冑も剣も失った身では、ただの無力な一人の女に過ぎない。

「これもあのゴズワルドという魔導師の仕業か。私としたことが、相手を見くびっていたというのか」

だが幸い、全裸にされただけで怪我や傷はなさそうだ。たとえどのような恥辱を受けても、カロリーヌはただの娘ではない、自負があった。

「ふふ、どうやら目覚めたようだな」

「だ、誰だ！」

不意に耳元でくぐもった声が聞こえた。だが部屋に響くのはカロリーヌの声のみ。これも魔法の類であろうかどうか。やらの声の主は、女騎士の下半身がある別室にいるらしい。

文字通り「壁尻女」にされたカロリー

ヌの尻が、不意にさわさわと撫でられ、思わず「ひっ？」と声を上げてしまう。

「このゴズワルドさまの力を侮ったのが運のつきだったな。お前は私のこの手で、じっくりと調教してやろう」

すっぱああんっつ！

むき出しになった女騎士の尻に、強烈な平手打ちが見舞われた。

ひりひり痛む臀部が、「すばん、すばんっ！」と立て続けに引つ叩かれる。

「うう、や、やめろっ！」

だが壁越しにカロリーヌの声はゴズワルドには届かないのか、今度はもみゆ、もみゆっと尻たぶが掴み上げられ、餅のように捏ねまわしてくる。

「もの」として、いや「壁尻」として弄ばれる恥辱に、頬が紅潮する。

「ひ、卑怯者め。貴様、フランソワズ嬢はどうした！」

「ゴズワルドさま、例のフランソワズとかいう娘の『出荷準備』が完了しました」

と、魔導師の部下と思しき男の声がして、カロリーヌは総毛だった。

「しゅ、出荷だど！ 貴様たち、まだ罪を重ねるのか、悪党め！」

だがカロリーヌの声など魔導師たちには届かず、わずかに「思ったより高額で売れた」などという非道な言葉と笑い声が漏れ聞こえるばかり。

カロリーヌは己の無力さに唇を噛みしめた。

「あの娘も悪くなかったが、いかんせ

ん貴族の娘は育ちが良すぎてすぐに心か身体が壊れてしまう。その点、この女騎士は少々乱暴に扱っても大丈夫だろう……」

「うぐうっ!?」

すばんっつ、すばばあんっつ。平手打ちがなおも女騎士の尻を打ち据える。それはただ苦痛を与えるのではなく、カロリーヌに絶望を与え、心を折り砕くための拷問だ。

「ふふふ、高潔な女騎士の壁尻女ともなれば、さぞ高値で売れるだろうて。そのために、こやつ純潔は取って奪わないで置いてやるか」

なまじこちらの声が届いていないだけに、屈辱は二倍。いくらカロリーヌが強がっても、相手はなんの痛痒も感じないのだ。

（自分を見失うな、カロリーヌ。こいつは私の心を蝕もうとしているのだ）

たとえ壁越しでもこの悪漢どもを喜ばせまいと悲鳴を堪える。

しかしそれは虚しい虚勢でしかない。カロリーヌはさんざん尻を叩かれ、ときには尻穴を指でほじられるという屈辱さえ受けた。

（負けぬ……私は高潔なる騎士！ その魂はどんな恥辱にも耐え抜いて見せよう！）

「思ったとおり、これはなかなか調教し甲斐のある尻だ！ そう簡単に壊れてくれるなよ、女騎士！」

「うああああっ、くふうっ」

無人の部屋に乙女騎士の悲痛な叫びだけが響き渡る。数時間にも及ぶ責め苦の果てに、ついにカロリーヌは失神し、ようやくゴズワルドから一時だけの解放を得た。

それから、ゴズワルドによるカロリーヌ調教は続いた。

何十回にも及ぶスパニングで騎士の尻は腫れあがり、腫れあがっては薬草が塗られた。

「お前も、なかなか強情だな」

「う……………」

気がつけば、目の前に黒いフードの男がいた。

「尻を責めるばかりでは能がないのでな。この美しい乳房も楽しませてもらおう。な、に、尻の腫れが引いたらまた引つ叩いてやるからな」

「そんなことをしても無駄だ……」

「果たしてそうかな？ まあ、この美しい乳房を味わえる時間がそれだけ延びるといふものだが」

「……………」

あれからどれくらいの日日が経ったのか。カロリーヌにはもはや騎士の威厳を示す言葉や、抵抗を示す怒声を上げる気力すらなかった。

魔法によって固められた石壁は堅牢で、どう足掻いても脱出できない。ゴズワルドはいつしか無抵抗な女騎士を商品に仕立てることより、乙女を辱めることを愉しむようになっていた。

（わたし、は……………わたしは、いつ、ま

でこんな目に……………）

け入れ、いつしかカロリーヌに快感を
与え始めていたのだ。

しかも後から後から押し寄せる触手
は何百、何千本と女騎士の肢体を取り
囲んでいる。

「いやあ、いやだ！ 熱いの注がない
で、お腹灼ける、灼けちゃう！ きひ
い、気持ちよくなっちゃううう！」

助けの手など来るはずもない魔導士
の屋敷の地下室……「壁尻女牧場」に
いつまでも女騎士の悲痛な悲鳴が聞こ
えるのだった……。

その村に現れたのは、流民と思しき
女であった。

ぼろぼろの服一枚をまとった女から
は異臭が漂い、焦点の定まらぬ瞳、だ
らしなくにやけた唇からは正気など一
切感じられない。

「うひひ……あは、あはは……」

女は村の男を見つけるとへらへら笑
いながら近寄って「ねえ抱いて、犯し
て……」と誘っては断られた。

「なんだあの女、イカレてやがる」

「三日ほど前、森からふらふらさ迷い
出てきたんだよ。気がふれて仲間にと
てられたんだらうさ」

その女の脳裏には、魔導士ゴズワ
ルドと呼ばれた男の言葉だけが微かに残
っていた。

「ふん、心が完全に壊れてしまったか
これでは商品どころか廃棄処分にする
しかないか……もういい、解放してや
るからどこへなりといくがいい」

触手による中出し陵辱によって、女
騎士カロリーヌの騎士の魂は完全に打
ち砕かれた。カロリーヌは石壁から解
放され、粗末な服だけ与えられると、
屋敷を放逐されたのであった。

「おい寄るなよ、気持ち悪い！」

「あひひひ！ だれかあ……誰れもい
いから、おちんぼちようらい……私を
わらしをぐちゃぐちゃに犯してくらさ
い……」

その後、女騎士カロリーヌの行方を
知る者は誰もいない。

BAD END

【シーン3】

どん！ という軽い爆発音と共に地
下室内にもうもうと白煙が広がってい
く。

「な、なんだ？」

「火事か？ ひ、火元を探せ！」

慌てふためく調教人たちが、これ
は火事の煙ではない。カロリーヌの放
った煙幕弾による、視界を遮るだけの
煙である。

（我がメルトヴィンデ家に伝わる秘伝
の煙玉だ、この隙にフランソワーズ嬢
をお救いする！）

フランソワーズの立っていた位置は
把握している。カロリーヌは音もなく
令嬢に近づき、その手を取って耳元で
囁いた。

「フランソワーズさま、お救いにあが
りました。どうか、私を信じてついて

きてください」
軽く手を引くと、令嬢は素直にカロ
リーヌに従った。

そのまま「壁尻女牧場」を抜けて、
屋敷からの脱出路を急ぐ。後に残され
た「壁尻女」たちのことが心残りだが、
今はフランソワーズを脱出させるのが
第一と自分に言い聞かせる。

（だが必ずやあの魔導士を倒し、娘た
ちを救いだしてみせる！）

心に堅く誓う女騎士は、追手がな
いことを確認して、しばし歩を止めた。
貴族令嬢であるフランソワーズは、案
の定息を切らしていた。

「追手はまだかかっているようです
フランソワーズさま、ご安心を」

「あの、あなたさまは」

さすが貴族令嬢、息を切らしてい
ても優美に問いかける仕草に、女騎士は
膝を折って名を名乗る。

「申し遅れました、私は騎士カロリー
ヌ・メルトヴィンデ。貴女の身柄は私
がたしかに送り届けます」

「そう……そうですか。ですが」

と、ここでなぜか貴族令嬢は気のな
い返事をして、すいっと右手をカロリ
ーヌの前に差し出した。

「……はい？」

ぶしゅつ。何気なく顔を上げた女騎
士の鼻先に、液体のようなものが噴き
つけられたのだ。

「うぐつ？ な、なにを……」

その液体から立ち上る刺激臭を吸い
込んだ瞬間、くらりと目眩がした。立

ち上がりかけた膝が、再びぐくりと折
れる。なにが起こったのか理解できず、
カロリーヌは混乱した。

「騎士カロリーヌ、大儀でした。けれ
ど、私はもうお家に戻る必要はないの
です。なぜって私は……もう、立派な
「壁尻女」なのですから」

うふふふ、と微笑むフランソワーズ
の瞳はどこか虚ろで、浮かべた笑みは
作り物のようだった……。

「う……」

意識がゆらゆらと水面下に浮上しか
けたとき、いきなり乱暴にカロリーヌ
の金髪が掴み上げられた。

「気がついたみたいですね、ゴズワ
ルドの巨那」

「ここは……き、貴様は魔導士！」

カロリーヌの前にいたのは黒ロウブ
を着た魔導士。傍らに何人もの屈強な
調教人がいて、その一人が乱暴に女騎
士の髪を掴んでいた。

「手荒な真似はよせ、大事な「商品」
の材料だぞ」

商品、という言葉に反応したカロリ
ーヌは、不可解なフランソワーズの行
動、そして自分が置かれた状況に気づ
いて愕然とした。

なんとカロリーヌは乳房をむき出し
にされ、美しい女体を石壁にすっぽり
埋め込まれていたのだ。これが魔法と
いうものか、乙女騎士は壁の一部にな
ったかのようで、下半身だけが別室で
痴態を晒しているようだった。



動けぬ巫女姉妹に

残された道は

忌まわしき鬼と

村への服従なのか



[ふういんみこ]

封印巫女

～淫獄の壁尻調教牧場～

小説 た ま き たけし 多摩木 毅 挿絵 ひきとぐ ひきとぐ

NOVEL

ILLUSTRATION

現代の自然科学の知見をもってしてもなお、理解の及ばない奇怪な現象や摩訶不思議な力のことを、人々は超常現象と呼ぶ。それらは往々にして日本で伝承される民話や信仰と言った、説話の中で登場するものだ。

その中でも特に心霊現象を始めとした、呪術や妖怪、憑依——そんな風と呼ばれるものの存在は、ありとあらゆるモノに宿り、感情を持つものだと考えられてきた一方で、その正体はモノに有らずして人にあり。人の思想そのものだと言えらる人もいたほどである。

すなわち、哲学、宗教、倫理、心理と並び、それらは昔の時代にとつて、人々の生活と強い結びつき、関係性にあつたのだ。

ところが、時代の進歩、またそれに伴い情報化が発達した現代社会において、解明された事象は数えきれない。

高度に合理化、管理化できる範囲が広がれば広がるほど、畏怖の対象とされてきた価値観は変化し、いつしか人々の興味や関心も、すっかり時間という流れの中に埋もれてしまった。

幽霊や妖怪なんて、現実にはいない。所詮は架空の存在だったのだ——と。

否、かつて歪みと呼ばれた地獄の妖や悪鬼たちは、今日も人々の日常を犯すために狙っている。

一般社会から隔離されたような人里離れた村では、未だに独自の宗教や信仰が根強く残っていて、奴らに食べられたり、地獄に引きずり込まれたり

といった伝説が生きているほどだ。

元々危険な場所であつたり、神隠しに遭つたり等、そういった場所が禁足地と定められるのにも理由がある。

夜になればたちまち一帯を包み込む闇が全てを支配し、震えあがらせ、正常な理性を狂わせてしまう。

理性とは道理によつて物事の善悪を判断する、人間が人間らしい社会秩序を築くため、絶対に持ち合わせていなければならぬ能力。故に、面白半分で踏み入れば、その一歩が死への入り口となつてしまうのだ。

(ほおら、聞こえる。地獄の底からやつてきたモノの足音が)

ここは妖気漂う森の中——
それでもこの世に蔓延る悪を払うため、特別な力で戦い続ける者がいる。

「隠れてたつて無駄よ。こんな殺気……私に気づかないとでも思った？」

そうやって彼女に目をつけられたのが奴らの運の尽き。

「ゾロゾロと出てくれば相変わらず醜い姿。今から私が相手してあげるわ」

巨大蜘蛛や大蛇、鬼といった悍ましい怪物たちに囲まれた中、月明かりに照らされて映るのは、後ろ髪で結われた艶やかな黒髪と煌めく薙刀。そして

なんと言つても特徴的だつたのが、彼女の身を包み込んでいる装いだつた。純白の小袖と朱色の袴という巫女装束の姿は、それだけで神事に奉仕する神聖な存在、心身に清浄な存在であることを表し、落ち着き払つた佇ま

いからは穢れた身を寄せつけない気を感じさせる。それでいて時折、割れた袖の部分から覗かせる脇や横乳へと繋がる膨らみ、その下に位置する腰のくびれから尻へと向かうなだらかなラインなど、全身から女としての魅力も隠しきれずにいるのだから、その存在は尊さを極めていた。

犯しがたい神秘的なオーラを放ち続けている巫女。そのオーラとは、雰囲気や存在感といった曖昧なものとは明らかに一線を画していた。

なぜなら、神霊をその身に憑依させる、所謂神憑りと呼ばれる現象は、特別な修行を積んだ者にしかできない霊能であつたからだ。

「ウゴオオオ！ グゴオオオオ！」
「理性なき邪悪な化物共よ。覚悟なさい！」

木々を薙ぎ倒しながら一斉に襲い掛かつてくる巨体を往なす様は、まるで舞を踊っているかのように一切の無駄がなく、華麗で優雅。そのまま手に持っている薙刀で斬りかかり、動けなくしたところを胸元から取り出した札で封印していく。

「厄災もたらす悪しき魂よ、速やかに人の世から去れ！ 邪気退散！」

祟りを断ち切るかのように飛ばした霊符が怪物たちに貼り付くと、黒と赤の墨で書かれた文字が全身に広がり、鎖のように締め上げ、邪念諸共そのま

ま影の中に溶け落ちていく。「うわあああああ！」

「だ、誰か！ 誰か助けてくれえ！」
続けざまに村人と思わしき者たちの叫び声が辺りに木霊すると、巫女はすぐさま助けに向かつた。

どれだけ周囲を見渡してもすでに人が住んでいるような面影はなく、背の低い木造の民家が点々と建ち、手入れのされていない荒れ果てた山と森に囲まれていた。そんな時代に取り残されたような、地図にも載っていない隠れ村が今回の舞台だつた。

(いたわ！)

鬼に追い詰められ、道なき道を行こうとしている集団はきつと逃げ遅れた村人たちなのだろう。

まさに捕まる瞬間を危機一髪、彼女は電光石火の早業で助け出すと、すぐさまこうなつた事情を聴く。

「あなたたち大丈夫？ この村で何があつたの？」

「鬼がッ、鬼が襲つてきたんだ！」

「みんな連れ去られて……あなたのような格好の巫女さんも来たけど、どこかに消えちゃつた！」

男たちの言う通り、辺境の地とも呼べるこの場所に鬼が現れたという報告で妹二人が向かつたのは、もう三日前の話になる。その妹たちとの連絡が取れなくなつたことで心配になり、探し

に来たのが長女である北條舞だつた。彼女ら三姉妹巫女は、何百年も前から戦つてきた封印巫女の末裔だつた。

「ほら！ 話している間にまた現れましてよ！」

そろそろと押し寄せてくる脅威に立ち塞がった舞は、薙刀を構えて力強く言ってみせる。

「封印されたくなければ、今すぐ連れ去った人たちをどこにやったのか言いなさい！」

「グルル……ヒ、ト？ ニンゲン？」
「くっ、人の言葉も通じない哀れな鬼。会話にもならないわね」

彼女はこの鬼と散々戦ってきたからわかる。相手は特別頭がいいわけでもすばしっこいわけでもない、図体が大きいことぐらいいしかり取り柄のない一本角と単眼の鬼。

古くから人々に墮鬼と呼ばれ恐れられてきたが、封印巫女からすればはつきり言ってこんなのは雑魚だった。

ただ、これからは村人を庇いながら戦わなければいけない以上全力は出せないし、敵の数が数なだけにいつまでも構っていられる余裕はない。

（さつきみたいに速攻で封印するわ）
そう思っていたのに、こちらの攻撃が躲され、札が効かなくなりだして、

途端に緊張が走りだす。
「ミコ……ウザイ。ウザイ。ウザイ！」

（鬼の動きがいつもと違う!? まさか歪みの影響が大きくなってるの!?）
舞は先ほどと同様に薙刀と封印術を用いて鬼たちを捌いていくが、不穏な

空気は濃くなっていくばかり。それに次から次へと湧いてくる魑魅魍魎に対し防戦一方になり始めて、これ以上の

数の暴力は封印巫女であつてもさすがにお手上げだった。

「どんどん出てきます」
「もうこの村は終わりだ」
「諦めてはダメよ! その弱った心に邪悪は入り込んでくるんだから!」

そう言つて村人たちの沈んだ気持ち奮い立たせようとするが、このままだとジリ貧なものも感じていた舞は、霊符を周囲に飛ばし、清浄な空間を作る

ことで相手を足止めさせる。
ところが、それも結局時間稼ぎにすぎなかつた。

「大丈夫なんですか? 耐えられるんですか?」
「……それは無理よ。だからここは私に任せて。結果を解いて、注意を逸らしている隙にあなたたちは逃げて」

「おいおい、そんなマジかよ」
「で、でも、あなたが来てくれたから、この村は大丈夫なんですよね?」

心配そうに聞いてくる村人たちの不安をできれば取り除いてあげたかつたが、嘘で取り繕うことはさらなる絶望

を招くことを彼女は知っている。だから首を縦に振ることはできなかつた。

「残念だけど事態は想像以上に深刻よ。おそろくこのまま鬼を封印し続けても埒が明かない。この村を救うには、こ

うなつた原因を突き止めてその大本をどうにかするしか手立てはないわ」
ありのままの真実を伝えると、動揺

したように視線を逸らす老人がいる。舞はその仕草を見逃さなかつた。

「どうしたの? そのあなた、何か

心当たりでもあるの?」
「あ、ああ、あの……ずっと黙っていたのですが、捕まった人たちは村の外れにある建物にいます。おそろく鬼の巣窟です。きつとそこにあなたの妹さんも捕まって……」

酷くざらついた声で言うのは、何か重要な手がかりを掴めそうな情報だつた。それと同時に舞の心の中で引つかる一つの疑問。

「ちょっと待ちなさい。あなた、どうしてそんなことを知っているのよ」
「連れていかれるのを実際にこの目で見たからです。でも、それを誰かに言

つたら、次は私が狙われるのではないかと……だから怖くて誰にも言えなかつたのです」
尤もらしい理由をつけているが、舞

が本当に聞きたかつたのはそんなことではない。
不吉な風がびゅうびゅうと吹き荒れ、周囲の音をかき消している。

何か嫌な予感を感じる——
鬼たちが何者かの合図を待っているかのようだつた。

「違うでしょ!? どうして捕まった巫女が私の妹だつてわかるのよ」
「……ッ!? そ、それは……それは」

まるで虚を衝かれたかのように、しどろもどろな受け答えをしだす老人。次第に化けの皮が剥がれ落ちていく。

「それは……ですね。グヒ、グヒヒヒ私だからですよ!」

老人の頭頂部から全身にかけて亀裂が入ったその瞬間、割れ目から飛び出してきたのは恐ろしい鬼の影だつた。
成人男性ほどもある身長と、醜く弛んだ腹の形、胴に対して異様に長い手足などの特徴から、相手が誰なのかすぐにわかつた。

「あなたは……餓鬼! 人間に化けていたのね!」
「今更気づいても遅いですよ!」

舞は咄嗟に応戦しようとしたが、押し倒された勢いで薙刀を失い、両腕を地面に押さえつけられてしまう。それでもなんとかして上に跨がっているのを退かそうと足をばたつかせ、必死に

もがくが、草履が脱げ、緋袴が捲れるばかり。彼女のスラッと伸びた脚線美が注目的となるだけだつた。

「グヒヒ、油断しましたねえ。私たちの狙いは、端からあなたなのです!」
「みんなッ、巫女が襲われてるぞ!」

「はっあぐッ! 私のことはいいから、あなたたちは早く逃げなさい!」
結果が解けても封印巫女以外眼中に

なく、走り去る村人たちを追いかけもしないで舞を取り囲む鬼たち。
村人たちが逃げていくのを見届ける

舞の視界を、いくつもの魔の手が覆い尽くすと、彼女の意識はそこでプツリと途切れてしまふのだった——

※※※

「んんッ……んう。あれ……わた、し

はじめまして。多摩木毅と申します。今作をこうして無事、デビュー作として世に送り出せたことを私は嬉しく思っています。これも担当編集者様や、ひきとく先生のお力添えのおかげです。本当にありがとうございます。

……なんで」

「ここは一体どこなのか——
自分はどうなってしまったのか——
しばらくして、彼女はそんな風に意識が戻ってきた。

「い、痛ッ」

気づけば全身傷だらけ。頭にズキズキと走る痛みが、まだもう少しだけ本調子に戻ることが妨げている。

「この格好も何がどうなってるの？
本当にこれッ、ちよつとお！」

身動きが取れないことに違和感を覚え、舞はすぐに状況を確認した。そしてわかったのは、どうやら自分の体が壁に埋まっているらしいということ。

どうにか抜け出せないかと試しても尻が固えてうまくいかないし、両手首には頑丈な鎖まで繋がれている始末。

何か活路は見出せないかと辺りを見渡しても、鉄柵のようなもので空間が仕切られていて、まるで今の自分は畜舎で飼われる家畜のようだった。

周囲の状況もこれ以上は暗がりのせいでよくわからず——ただ、鼻が曲がるような生臭い悪臭と、諦めずは何度も抜け出そうと試みる女の艶めかしい吐息だけが、一帯を深く深く包み込んでいた。そんな彼女が遠くで誰かの話し声に気づくと、急いで目を閉じて耳を澄ます。

「はい、ちょうどエサの時間にするところだったのです。是非ともご覧になってください。きつとあなた様も満足していただけたと思いますよ」

耳に張り付いてくるその掠れた声は、言ってしまうえば品性を全く感じさせない汚らしく下劣な声。ところが、全く知らない声ではなかった。

会話を一瞬だつて聞き漏らすわけにはいかない。なぜなら、醜い顔が勝手に思い浮かんできたのを皮切りに、これまでの出来事が雪崩となって襲い掛かってきたから。

今さっきまで固く閉じられていた記憶の扉は、気持ち悪い声によつて開かれたのだ。

（そうだな。あいつの名前は餓鬼。そして私がこうなっているのは……）

今一度、壁に埋め込まれた尻がビクともしないことを確認すると、不甲斐ない自分に怒りがこみあげてくる。

（情けない……。これじゃ助けが必要なのはどつちなのよ）

敵の恐ろしさは神社の娘として育てられた時から散々教えられてきたことだし、こうなるケースだつて初めから想定できたこと。それを承知の上で、それでも人々の平和のために、舞は封印巫女を続けてきたのだ。

ただ、一つだけ残念というか、心残りなことがある。それは、自分の妹で共に戦う仲間でもある楓と唯のことだつた。こうなるとわかつていたら、初めから同行すればよかったと心の底から後悔するしかない。三姉妹巫女としての真価を発揮しきれずに捕まったとなれば、なおさらだ。

「それに関しては何も心配に及びません。」

今回の作戦で生じた損害は、きちんと彼女らに償ってもらいますから」

ボウツと、火の玉による明かりがくと、白濁で汚れた地面と丸太のように太い脚が視界に入ってきた。

「おや、気が付いていたんですか。どうですか？ 今の気分は」

「き、ぶん……？ ああ、そうね……。随分手厚い歓迎を私にしてくれたみたいで、今とつてもあなたたちにお礼がしたい気分だわ」

「グヒヒヒ、そうでしょう、そうでしょう。なんせこの壁はあなたを捕えるためにわざわざ地獄から持ってきたんですから。自慢の力も発揮することはできないでしょう」

どんなにピンチな状況でも、敵に弱みだけは絶対に見せない。それが人々の平和を守るものとして、そして何よりも妹たちの上に立つ長女として努めてきた姿だった。だからこそ、ここでも往生際悪く笑ってみせる。

「それで何？ あなた牧場主にもなつたつもり？ フツ、フツ……こんなおちゃんちゃらおかしいわね。だって、そんなならしない身体……家畜にびつたりなのはあなたの方なんだから、今からでも遅くないわ。私がおこ、代わつてあげるから、さつと繋がれてプヒビヒ鳴いてみなさいよ——つてあ

あつああッ！ くうッ！」

舞の態度がそんなに頼んだのか、餓鬼がいきなり彼女の頬を引つくと、長い黒髪を掴み、無理やり顔を上に向

けさせた。

「ペラペラとよく動く口です。まだ自分の立場をわかっていない」

まず目に入ってくるのはブツブツの緑肌と頭部から突き出た二本角。ギョロツとこちらを見つめる目つきは刀のように鋭く、仰々しく、口は耳元まで

裂け、牙ははみ出し、鼻は押し潰された豚鼻のように大きい。これを豚にたとえるのは豚に失礼に当たるとは思えない顔。散々見てきた宿敵の顔面だつた。

その横で餓鬼よりもさらに一回りも二回りも凶体が大きく、黒々とした肌と、邪知暴虐を示す捻じ曲がった片角が特徴的な鬼がいる。それが歪みの元凶であり鬼の親玉、邪鬼だった。

舞は結んだ髪が乱れるのもお構いなしに鬼の手を払いのけると、恐れずにした。

「んぐつくつ、触らないでッ！ ハアハア、私がどうなつたつてねえ、あなたたちに負けを認めるものですか！ こんな悪趣味な施設だつて、あとでぶつ壊してやるんだからッ」

「ハア……鬼神である邪鬼様の前でもないという無礼を……。見苦しいのがわからないんですかね？」

「フツ、好きに言わせておけ。これから地獄を見ることになるのは明らかなのだからな」

そう言つて邪鬼が目の前に立つと、あれだけ威勢のよかつた舞がその威圧感に気圧されてしまう。

「な、何よ。イラツとでも来たわけ？」
本来ならば神の加護により、鬼は舞に指一本触れることのできない存在のはず——だが。

「ハツハツハツ！ 未だに力を妄信する哀れな人間の女よ。ちょうどいい機会だ。己の無力を思い知るがいい」

「こちらが動けないのをいいことに、敵めしい形相の邪鬼が神聖な巫女装束を胸元から掴むと、思いっきり引つ張ってビリビリに破いてみせた。それにより、ひらひらと手の届かないところに落ち、汚い足に踏みつけられていく札が彼女の危機を演出する。」

「やあああッ！ 急に何するのよ!？」

「フン、たとえ神の依り代となる存在だろうが、所詮は人間の小娘。力は私の足元にも及ばないということだ」

邪鬼や餓鬼だけが例外なのか、舞の巫女としての力そのものが弱まっているのかは定かではないが、すでに神の加護なんて全く通用していない。

「そうやって白日の下に晒されるのは、乱暴に引ん剥かれたことでブルンツと揺れるたわわに実った二つの丸み。舞の女としての部分だった。」

鬼の手のひらにちょうどよくスッポリと収まってくれそうな、小さすぎず、かと言って大きすぎずのわけでもない胸の膨らみ。触れば指に吸い付いて、自在に形を変えそうな柔らかい質感と張りのある艶。その先端にはプクッと隆起した突起物が、可愛らしくも大胆な主張を繰り返している。

もしそれを形容するのなら、今までどんな外敵にも狙われることのなかった奇跡の果実と表すのが相応しい。

だが、その奇跡もここで終い。
邪鬼が自身の両手に唾を塗すと、あらゆることかその手で巫女の胸を驚掴みしてきたのだ。

「んんん!? きゃあ! そ、そんな汚い手でどこ触つてんのよッ、変態イ!」

「何を言う。これから鬼の子を孕み、産み育てるのに相応しい体かどうか、我が直々に確かめてやっているのだ」

「バカなこと言わないで! 鬼の子を孕む! 巫女である私が!? 寝言は寝て言いなさいよッ! うあああ!」

倒すべき敵を前に問答無用で採みしだかれる女の象徴。鬼のゴツゴツした指と長く鋭い爪が乙女の柔肌に食い込むように沈んでいくが、それだけでは済まない。執拗に塗り込むようにして広げられる唾液が次第に泡立ち、糸を引くようになると、胸がヌラヌラと艶めかしい光沢を放ち始める。

その間、舞はなんとかして邪鬼の腕を掴み返し、胸を揉むのをやめさせようとしていたが、どうしたって繋がれている鎖が邪魔をして、そこまで手を伸ばすことができなかった。

「んっ、んはあ……こんなことをして、人を弄ぶのがそんなに楽しいわけ?」

「そう言う割には呼吸を荒げて喘ぎ声を出して、我らに聞かせたがっているのはむしろお前の方ではないか?」
「誰が聞かせたくてこんな声……出す

わけないでしょ! んうふうう!」

だがしかし、舞の反応は正直だった。鼻腔をツンと突き抜ける酸っぱい匂いと、ネチヨネチヨとわざとらしく立てられる官能的な水音により、神聖な巫女の体が汚され、支配されていく感覚に拍車がかけられていく。

コリコリに硬くなった先端部分が露わになると、今度はそこを爪で潰され、摘ままれ、捻じられてしまう。

「や、やめて! そこは——ああんッ」

段々胸の奥からじんわりと熱を帯び、むず痒くなっていくのを感じると、彼女は心の中で危機感を覚えていた。

普段から体を慰めることをしないから、こういった刺激に対してあまりにも敏感すぎる。その証拠に乳首を思いつき引つ張られると——

「ひつぐうッ!? あっあっあっあっはう……くひゅううううん!」

散々弄られたことで先端に集中した刺激が脳天に突き刺さり、あらゆる音が漏れ出してしまふ。すぐさま口を噤んで耐える一方、隙だらけな体は翻られ続け、楽になった頃にはすっかり快楽に征服されてしまっていた。

「フン、餓鬼よ、こいつが見えるか? 私の爪で虐められた女子の乳首がヒクヒクと悶えておるわ」

「はい、邪鬼様。赤く腫れあがり、淫らに勃起しております。子を孕んだ暁には上質な母乳が出せるでしょう」
「フーツフーツ……どこまで本気が知らないけど、こんなことで私をどうにかできると思わないでッ!」

舞は微かに耳を赤らめながらも恥ずかしさを誤魔化すため、邪な視線で見下してくる鬼たちをキッと睨み返していた。

「生意気な女です。封印巫女としての誇りがそんな態度をさせるのですか? だとしたらくだらない。そんなもの、さつさと捨ててしまいなさいな」

「んぐ……ッ! なんですって!？」

「ンフフ、わかりませんか? この方たちを見習ってみてはどうですか? と言っているのですよ」

ニヤリと笑う餓鬼が、このタイミングで舞の目の前を退く。すると、ちょうど通路を挟んだ向かい側に、そして右にも左にも、同じように体の半分を壁に埋め込まれ、身動きを取れなくなった女の人たちがいた。加えて目隠しと猿轡もされた状態で。

女性の尊厳が踏みにじられた、本当に目を覆いたくなるほどの無残な光景になった。ところが、舞はある部分に気がなせなら、ちょうど正面に位置する二人。ポロポロに朽ちるもわずかにその面影を残す小袖に緋袴——神の加護を人々に与える存在を示す巫女装束が、誰であるかを如実に表していたからだ。

「まさかッ!? ねえ、あれッ! もしかして!」
「ああ、確認しますか? ほら」
「んっ、んもっ——ふはあ! エサの時間! おおお、おちんぼ……ッ!



おちんぼく大きい！ おちんぼ！ おちんぼ！ おちんぼお！

「これ以上、お預けやア……あだまッ、おがじぐなりゆ。はへ、アへへへへ」

目と口に施された布が外されると、それは紛れもない妹たちの姿。ただ、

明るかたつ表情はもはや見る影もなく、オスに媚びるようなだらしな顔と下品な体で、すでに何もかも手遅れの現実がそこにあつた。

清い体を邪欲で穢されるようなことがあれば、神霊をその身に憑依させて戦う巫女の力は使えなくなってしまう。それなのに二人はこちらに気づきもせず、理性すらも感じさせない言動で、必死に肉棒を求め続けてしまつていた。

こんなこと、絶対にあつてはならないことだつた。

「……うあ、あああつ、嘘、でしょ……。なんなのよ……これ」

「御覧なさい。あなたがずつと会いたがつていた妹さんたちです。素晴らし

い変わりようでしょう？ これが私たちに逆らつた末路ですよ」

巫女としてだけでなく、人としても完全に壊れてしまつている——

舞は餓鬼の言葉も耳に入らず、首を横に振りながら、ただただ眼前に映る景色を受け止められずにいた。

「せつかくの再会を果たしたんです。お姉さんであるあなたから、妹さんに何か言葉をかけてあげてはどうですか？」

やり返しのつもりなのか、怒りの感

情をわざと逆撫でするようなことを言つて心を折りにくる餓鬼に、さすがの彼女も動揺を隠すことができない。

「ハアツハアツ……こんなものあり得ない！ だつて私の妹なのよ？ 誰に対しても優しくして立派で、こんなダメな姉にもついでにきてくれた二人が、そんな……私は信じないから！」

「あらあら、彼女たちは本当に哀れです。実の姉からもその存在を拒絶されてしまつたんですから。グヒヒッ」

何も言い返すことができず、その言葉に一目絶句していると見るや否や、

餓鬼は早速次の段階へと移行する。「さて、今日は邪鬼様がいらしているんです。いつまでも無駄話している時間はありません。あなたたちにはこれから、家畜奴隷としてしつかりと働いてもらいますから」

（何——家畜、奴隷？）

するとどこからともなくゾロゾロと通路に並びだし、一列になつて下半身を露出させたのは、なんと人間の男たち。おそらくは全員あの村の住民なのだろうが、問題は拘束されている女よりも明らかに数が多いうことだ。

「まずはエサの時間ですよ！ 家畜は家畜らしく、たくさんベニスに奉仕し、精液を飲ませてもらいなさい！」

餓鬼がこの場にいる全体に対して号令をかけると、先ほどまでベールに包まれていたカオスなメス家畜奴隷としての実態が明らかとなる。

次々と括りつけられた布を外され、

誰かの「おちんぼ様……おちんぼ様」と、オスに媚びるような声色が聞こえだすと、周りの女が次々と復唱し、その口に肉棒を咥え込んでいくではないか。そうして始まるのは、「ジュルジュルズソゾソ……」と厭らしい音の大演奏会。

「どうしたのよ……みんな！ 何やつてるの!? そんなこと今すぐやめて！ 男の人も何やらせてるの！」

鬼たちに脅されて嫌々やらされているのかと思えば、人間扱いなんて全くされていなくても拘らず、満足気な表情で肉棒を頬張る集団の光景がある。

そんな舞の視界をも遮るように群がりだしたのは、なんと先ほどの戦いで助けを求めてきた男たちであつた。

「今回はよろしくな。北條舞さん」

自然と寄り目になつてしまふほどの至近距離で自身の顔に突き出されたのは、どれも天を向くほどに反り返つて勃出した男性器だつた。

竿の周囲も長さも女をよがらせるには申し分ないサイズ。どれだけの血液が海綿体に集まつているのか、パキパキに浮き出た血管と大きく笠の開いたカリ首に目を見張る。

これは決して鬼の肉棒ではない。あくまでも人間の男の肉棒なのだ。それでいて両手が何本あつても足りないほどの数が、先端の鈴口から透明な雫の玉を浮かばせ、パクパクと呼吸を繰り返し、「女を犯したい」という欲望を存分に漏らしている。

「私になつてもの向けてるのよ！ 今すぐそれをしまいなさい！」

舞は近づいてくるそれを直視しないよう手で目を覆い隠そうとしたり、押しつけようとしたりするが叶わない。

「フン、嫌だね。巫女にしてもらえる機会なんてそうそうないんだ。この際たつぷり綺麗に、気持ちよくしてもらうからな」

「ええッ!? あなた何言つて——」

「グフッ、ここにいる人間はみんな、封印巫女の存在を知り、魅了され、あなたを犯したかつたそつですよ？ 喜んだらどうですか？ 守るべき存在であつた人間から、貴重な食料を提供してもらえるのですから」

それを聞いて思わずゾツとした。人間は誰もが清く正しい心を持つわけではない。中には歪みすらも凌駕するほどのどす黒く邪悪な人間もいる。ただ、これほどのレベルはかつて経験したことがない。もはや村そのものが鬼に完全支配されてしまつていて、

女として生まれた者としての性——舞自身が無自覚に男を虜にする美貌持ち合わせるが故に、こうして捻じ曲がつた欲望からも標的にされ、その身に至んだ寵愛を受けることになるのだ。

「お、お願いだから考え直して！ まだ希望を捨てちゃダメよ！ 一時の欲望に身を任せるなんて、こいつらの思う壺なのよ？」

「なあ、さつきからなんか勘違いしてねえか？ これが俺ら村の人間のやり



遅くなってしまったが
たまには商館に顔を出す
べきじゃな

まさか
此のような掘り出し物を
見つけるとは



…にしても

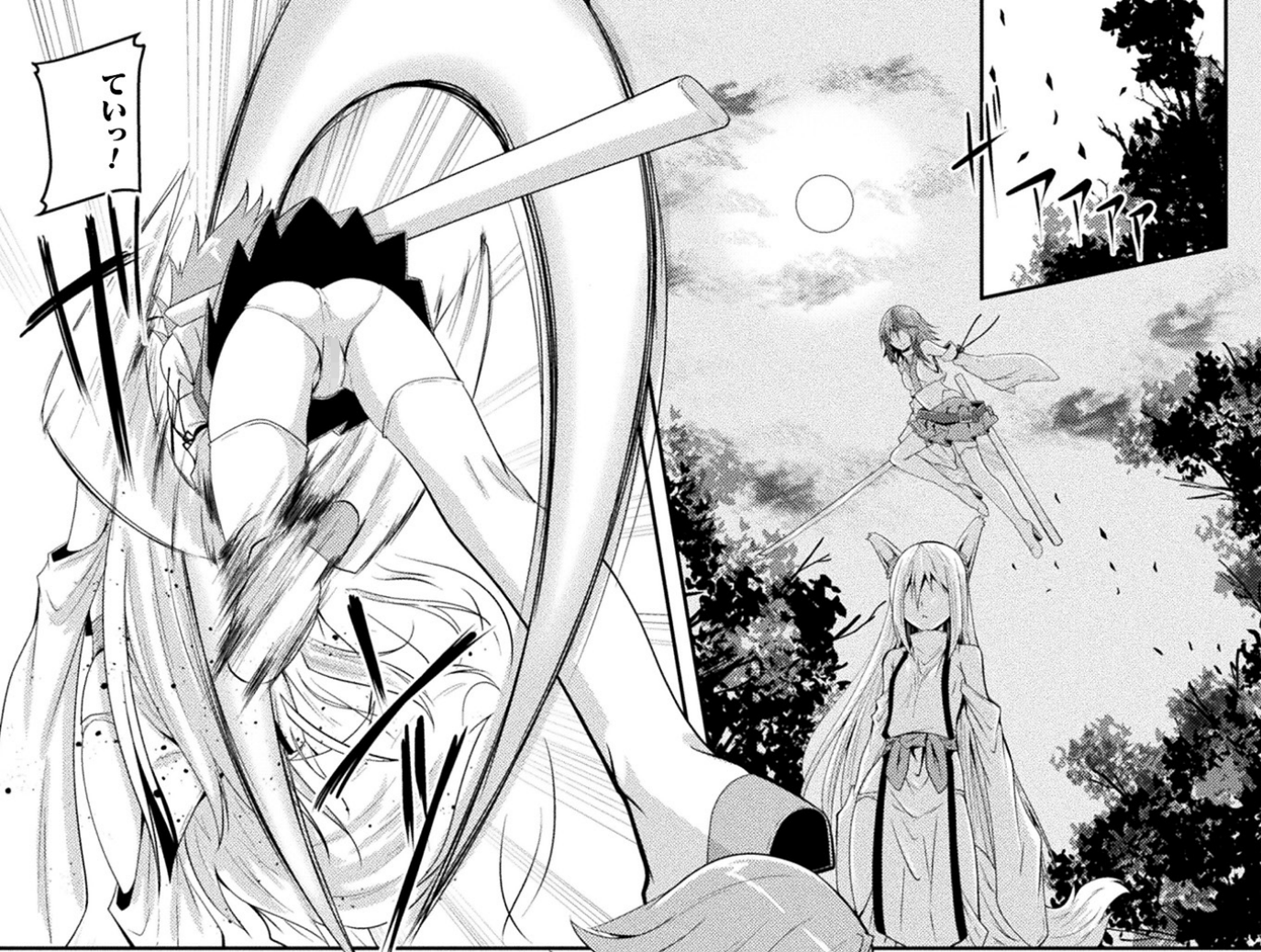
先程から
つけられておるのう
妖気を感じぬから
人間か

私を狙う人間なら
十中八九妖怪狩りじゃな

ふむ：
今宵は気分が良い
少し相手をしてやるか

妖狐を取り巻く淫虐伝奇
電子連載に先駆け、第1話を先行掲載!

妖狐 淫紋奇譚



ドサー

アッアッ

もう少し待てぬのか
術が安定せぬではないか

やった

う...あ...
も...も...う

わあああ...



くっ幻術かっ

目は離していない筈なのに
いったい何時から…

幻も見極められず
攻め時も分からんとは
期待外れの小娘じゃな
妖怪狩りにしても只の三下か
これでは興も乗らんのか



私の外見で狩れると
判断したか？

本当につまらない
術を使うのも無駄じゃ

そのまま腐って
朽ちるが良い

すっ
すっ
すっ
すっ
すっ



単なる妖気じゃ
しかし私の妖気は毒気が
強くてのう

瘴気のように
腐食させていくんじや
しかし…妖怪狩りの癖に
妖気対策もなしとはな



嘘っ…何これ
服が溶けて…

ユウウウ



三下相手に話す時間も
勿体無い…ではな小娘

だ…だめだ…
このままじゃ…
死んじやう…
…仕方ない

ユウウ

ユウウ



ん？妖気が…
消えて

いや…小娘が
吸収しておるのか？



は
は

は
は



ほう…これは私の妖気を全部喰らったのか



小娘…人ではないのか？じゃが怪生の類でもないなお主からはまったく妖気を感じぬ

どう見ても只の人間じゃ

痺気まがいの妖気を喰らう事の出来る人間の小娘…とすればあれしかあるまい

お主…「混ざり者」じゃな妖怪と人では子は出来ぬが極々稀に孕む可能性があると聞く

そして赤子は人と妖怪に無い特殊な力を持って生まれ出るお主の場合妖気を喰うことが出来るのじゃな

その力
使えるかもしれん



な…何これ…
壺から出てきたと想ったら
急に大きく成長して…
これ…妖怪なの…？

どうじゃ可愛いじゃろ
南蛮商人から仕入れた
ばかりの奴じゃ

遠き西の国の「れんぎん」
という術で作られた妖魔での
「あつらうね」と言うらしい

きき

きき

ひ

きき

きき

きき

先程から触手が下腹に執着して居るのが分かるか？

此奴の餌は妖気なんじゃが先程喰らった私の妖気が

お主の丹田に溜まっておるようでのそれに反応して居る

うあ

私の妖気はお主が喰らうと毒気が抜けて此奴にとつて良質の餌になるみたいじゃ

そこでその力を効率よく使うために

淫紋術を使わせてもらい



や…やだ…何これ…
お腹に何か流れ込んでる
熱い…どんどんお腹が
熱くなって…

お…う

ひ…ん

しょ…触手が
中に入ってきてる
何本も…何本も
お腹の中にいッ

お…ひん

あああ♡

こ…こんなに触手が入って
きてるのに…何…
気持ちよすぎる…一本一本の
動きがお腹を…
搔き回して…

い…淫紋の術は…官能を
高める妖術だつて聞いた事は
あるけど…こんなに…
凄いなんで…だ…駄目…
こんな…頭がおかしく…

あああ♡

ん♡

あひ♡

どうじゃっ？
気持ち良いか

淫紋と私は繋がって
おつての

こんな風に妖気が
淫紋に流れお主が溜まった
妖気が丹田…子宮に溜まって
いくんじゃが

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

変幻装姫
SHINE
ソフィアミラージュ
MIRAGE

外伝

絶望のバイオレンス編

第三話 ふたなり装姫。汚辱の産卵アクメ

小説
NOVEL

でいふいと

たかはまたろう

挿絵
ILLUSTRATION

高浜太郎

地獄の電気あんま!
激痛混じりの快感は
変幻装姫を絶頂へと導く……

第1巻～第2巻も
好評発売中!



二次元ドリームヘルズ
変幻装姫シャインミラージュ

登場人物紹介



シャインミラーージュ

悪の組織ダーククライムと日夜戦う正義の変幻装姫。

グラッド

ダーククライムの凶悪怪人。圧倒的な戦闘力をもつ。

ドルコス

ダーククライムの幹部。肉弾戦を得意とする、パワータイプ。

デプロ

タキシード姿の豚型の人獣。ドルコスと同じく幹部のひとり。

ミステイ

ダーククライムの幹部。可愛らしい見た目のゴスロリ少女。

前回のあらすじ

ダーククライムによって捕らえられたシャインミラーージュは、欲望渦巻く闇のワグニオンに出現させられることに、スレイヴフォームによる弱体化もあり、ドルコス、デプロ相手に連敗してしまった変幻装姫の次なる相手は……？

「さあ負け続けている正義のヒロインの次の相手はあ……」

会場に響き渡る、まだこの茶番劇は終わらないというミステイの無情な声。

たった二戦しかしていないというのに、シャインミラーージュは既に疲労困憊という様相。

デプロの鞭によって露出してしまっている乳房を片手で押さえて隠しながら、次なる相手を迎え撃つ為に立ち上がる。

変色する股間部が受けた快感を証拠として残している恥辱に満ちた姿。とても戦う為の格好と呼べる状態ではないけれど、それでもシャインミラーージュは立ち上がった。

「これがわたくしを弄ぶ為だけの遊びだとしても……何度敗北をしようとも、わたくしは……!!」

こんな遊びでも敗北を認めるだなんて本来ならばしたくはない。けれども、もう二度も宣言をしなければならなかった。それも憎き怪人を相手に。

その現実が正義のヒロインの気高い心に突き刺さるが、変幻装姫は抗い続ける。

いくらこの身が地に伏せようと、心までもが砕け

てしまつてはいつか来るチャンスすら泡と消えてしまうから。

大仰な音を立てて開く扉。次はどんな相手なのかグツと拳を握り締め、呼吸を整えながら現れる人影へと鋭い眼差しを送る。

「はあい、もちろん私の出番もあります」

自身の存在を主張するように片手を上げてアピールするのは、司会進行役として存在していたミステイだった。

直後に湧き上がる歓声。シャインミラーージュが遊ばれる玩具であるのに対し、ゴスロリ少女はまるでアイドルのよう。

外見だけ見れば愛らしい美少女であるのは間違いないのだから、観客達の反応は自然なモノだろう。

「やはりあなたでしたのね……ミステイ」

ドルコス、デプロという順番であれば次に登場する相手を想像するのは難くない。

しかしこの場に相応しくないというのは確か。ミステイの性格からしても自身が戦闘に参加するというのはやはり考え辛い。

彼女の狙いは読めないものの、グツと自由な片手に力を込めて不格好なファイティングポーズを取る。

「うふふ、こんな面白そうなことに参加しないわけないわよねえ」

身構える変幻装姫とは逆に、ミステイは今までの二体と同様に余裕の態度を崩さない。

「でも安心して。私は戦うわけじゃなくて、ただの仕掛け人だからあ」

口元を隠すように指を開きながら近づけて微笑むミステイ。もう片方の手には彼女の能力である黒針が生み出されていた。

刺されたモノを改造する力を持つ、直接的な攻撃力を持たない能力。今ままであればシャインミラーージュの持つ神聖なエナジーによって無力化されてい

たのだが、研究されてしまった今は違う。

今刺されては確実にミステイの望むように改造されてしまうという確信が、変幻装姫にはあった。

「な、何をしようというんですの……!!」

近づいてくるゴスロリ少女を相手に変幻装姫は身構えたまま、異様な威圧感に後ずさる。

情けないと言われればそれまでだが、対応する術もない今では警戒するのは仕方ないことだった。

「あの強気なヒロイン様が随分と弱腰ねえ。逃げる相手を強引にっていうのも新鮮でいいけど、私の趣味とはちょっと違うかしらあ」

漂々しく生意気なヒロインが見せる弱々しい反応に嗜虐心を刺激されながらも、ミステイは強引に迫ることはない。

むしろジリジリと追い詰めることに興奮を覚え、獲物を狩る捕食者を思わせるブレッツシャーを放ちながら赤い瞳を細めた。

「こ、これ以上近づいては——きヤツ!? ああうツ!!」

ミステイの動きの何もかもを警戒していたシャインミラーージュ。しかし、目の前の相手に集中するあまりに背後の警戒が完全に疎かになっていた。

ドンッと何か硬いモノにぶつかる感覚の直後に、両腕を背後でガツチリと掴まれ自由を失ってしまう。

「客が退屈しちゃうからよ、これ以上正義のヒロイン様が逃げるなよな」

「あ、あなた達は……このツ!! 放しなさいツ!!」

背後にいたのは屈強な体躯の戦闘員が二人。ミステイとは逆、つまりはシャインミラーージュが登場してきた扉から現れたのだろうか。

戦闘員らしからぬ余裕を感じさせる言葉。掴まえられる変幻装姫が必死に振り解こうとするものの、スレイヴフォームの影響なのだろう。完全に力が入りきらない。

結果、片側が露出した豊富な乳房をたぶたと弾ませるだけであり、戦闘員の拘束を解けない正義のヒロインの姿を見せつけるだけだった。

「へへへ、シャインミラージュの癖に振り解けねとはな。こりゃ楽しみだ……!!」

戦闘員の下卑た笑いに悪寒が走るものの、そこに意識を割くことはこの場では許されない。

「じゃあいくわよお。大丈夫、とおつても気持ちいいことだから」

「み、ミステイッ!! おやめなさい!! そ、そこは……あぁッ!!」

ミステイの言葉に再び前に注意を戻すけれども遅かった、黒い手袋に包まれた小さな手が恥部を守るコスチュームに触れ、内部を確認するように引つ張った。

「あら、毛が生えてないのねえ。正義のヒロインらしく手入れもしっかりしてることかしらあ? ま、やりやすくていいけどお」

人前で、しかも敵を相手に無毛の秘所を晒す恥辱にカアッと一気に頬が赤く染まるものの、羞恥に悶える時間は与えられない。

「み、見ないで……見ては——あうらッ!!」

アプロの鞭によって絶頂させられた変幻装姫の敏感な陰核に突き刺さる黒針。鋭い刺激が全身を駆け、戦闘員に拘束される身体がビクンと跳ねた。

「んあああああッ!! か、身体が、あそこが熱くなつてえ……わ、わたくしに何をお……んひいああッ!!」

燃え上がるような熱さが恥部から全身へと拡がっていくのを感じながらも、それでも無視できない大きな感覚が淫核に生じている。

「ああああ……ずきずきして、どんどん膨らんでえ……こ、こんな、こんなああ……んひいひいッ!!」

ミステイの手が放れてコスチュームは元に戻ろうとも今度は内側から、シャインミラージュの言葉と感覚の通りに肥大化するクリトリスが押し上げ始めた。

自身の身体に生じる信じられない変化。それがミステイの手によるものだとわかっていても、変幻装姫は現実を否定するように首を振る。

「すげえな。シャインミラージュにチンポが生えやがった」

「それも随分と立派なモンだ。コスチュームから出ちまつてるじゃねえか」

観客達からも声はするが、その代表とばかりに戦闘員がシャインミラージュの身に起こった変化を口にした。

「い、嫌あああああッ!! こ、こんな、わたくしの姿……見ないでえッ!! す、すぐに戻しなさい……ミステイッ!! んんっ……!!」

腹部が大きく開いたスレイヴフォーム。面積の少ない布地は立派に膨らんだ雌肉棒を隠し切れずに、上部が完全に露出してしまっている。

戦いで弄ばれる時とは違う、他者に見られての肉體改造による巨大な恥辱に、正義のヒロインらしからぬ悲鳴を上げるのは、彼女も一人の少女として仕方のないこと。

乳房露出だけではない。本来ならばあつてはならない恥辱にミステイへと声を響かせるものの、身体の自由は奪われたまま。

僅かに動いただけで、元が敏感な淫突起は摩擦による快感刺激をふたなりヒロインへと送りつけるのだ。

「だあめ。今度は私の番なんだから、私好みのやり方で楽しませてもらわないとねえ」

基本的に見る方が好みであるミステイは、自身の望む形へと場を整えるだけ。

つまりは、肉棒を生やすことがゴスロリ少女の狙いであり、その後は——

「さあ、その戦闘員二人があなたの対戦相手よ。まあ一対二でオチンポ生えちやつてるけど、シャインミラージュなら大丈夫よねえ」

くすくすともう結末までわかりきっていると笑うミステイ。

「そういうことだ。最強の正義のヒロイン様に勝つ為に一生懸命頑張らなきゃなあ」

「ああ、お手柔らかに頼むぜ?」

「くっ……!! ふざけたことを……あなた達のような雑魚戦闘員程度に……んっ……負けるだなんて、ありえせんわ」

ドンッと拘束を解かれたかと思えば強く背を押され、僅かによるける変幻令嬢。

振り返れば、唯一開いた口がニヤニヤと下卑た笑みを見せていた。

「わたくしに絶対に勝てるという自信……胸の露出に加えてこんなモノまで生やされてしまえば、確かに戦いづらいますが……だからといって戦闘員程度に……!!」

雑魚と呼んで差し支えない相手にまで侮られている。今の状況を思えば当然なのかもしれないが、だからといってそれをただ受け入れていいはずがない。

改造された肉棒が、空気に触れるだけですらビリビリとした刺激を生み出し、凛とした言葉もどこか熱を帯びているようにすら思える。

「うふふ、流石はシャインミラージュねえ。じゃあ早速始めちゃつてえ」

懸命に強気な姿を見せる変幻ヒロインの姿は、これからのことを考えれば滑稽でしかない。

トンと地を蹴って距離を置いたミステイが、黒針で造り上げた椅子に腰かけて指を弾いた。

「どうした、かかってこないのか?」

「俺らみたいな雑魚に負けないだなんて言っておきながら慎重じゃねえか。ま、そのチンポがあるから仕方ねえかな」

強気な発言とは裏腹に、仕掛けることのないシャインミラージュへと戦闘員達が煽る。

「ば、馬鹿なことを……いいから、かかってらっしゃい」

反論をするものの確かに戦闘員の言葉の通り、大きく動けないのが変幻令嬢の現状だった。

特に動いていないというのに、ピクピクと脈動する敏感な肉突起。この状態で大きく動けば間違いなく巨大な刺激が全身へと響くだろう。

だからこそ、先手必勝で一人でも倒してしまいたいというのに、シャインミラージュが動くことはできなかつた。

相手の攻撃を誘い最低限の動きで終わらせる。今の変幻令嬢の狙いはそれだけだった。

「なら遠慮なくいかせて貰うぜッ!!」

「その生意気な面、たつぷり泣かせてやるから覚悟しなッ!!」

屈強な二人の戦闘員が同時に、一つの標的へと向けて走り出す。今まで数多の怪人や戦闘員を辱けてきた憎き相手を叩きのめす為、拳に力を込めて。

「オラアッ!!」

「こんな大振りっ……んああっ……!?!」

いかに身体能力が落ちようとも明らかな大振りに当たることはない。ほんの少し身を横にしてかわして二人目の攻撃に備えようとしたが、その小さな動きだけですら脳が痺れる快感が生まれた。

二人目に割くべき注意が薄れ、勃起する肉棒へと意識が向いてしまう。それは今の状況においてはあまりにも致命的な隙。

「動きが鈍すぎるぜえッ!! フンッ!!」
ズドオッ!!

「おぶうらうッ!!」

鋭い肉悦に足がよろめいた変幻装姫の腹部へと、深々と拳が突き刺さる。

ストライカーフォームであれば動きは鈍りながらも避けることはできたであろうに、スレイヴフォームというのも重なり戦闘員の攻撃は早くも変幻装姫を捉えた。

「へへへ、いい感触だぜ」

「かはっ……く、この……!!」

戦闘員相手とは思えない鈍い痛み、歯を食い縛りながら、それでも強い敵意を持つて睨み、感触を楽しむように動く手を引きはがそうとするシャインミラージュ。

「こつちも忘れんなよ!!」
ドガアッ!!

「あぐらうッ!?!」

だが相手は一人ではない。無防備な背中へと重い蹴りが叩きつけられ、変幻装姫は背を弓なりに反らして衝撃に声を漏らした。

「こんなことで倒れそうになつてんじゃねえぞ!! 正義のヒロイン様がよッ!!」

ドズウッ!! スウンッ!! ドンドンッ!!
「あうらうッ!! んぐぶつ!! えぶうらあアッ!!
あぐつ、んぶ、おぐらうッ!!」

前によるめいたところ、金色の前髪を乱暴に掴まれて前屈みを強要される変幻装姫。

そのまま再びボディプロローが始まり、殴つてくさいとばかりに開いた腹部へと強烈な連打が繰り返される。

くの字に折れるシャインミラージュの身体。回数を重ねる目的の為、一発の威力は多少なり落ちていくとしても、それでも同じ箇所を何度も狙われて効かないはずはない。

「オラオラッ!! シャインミラージュ様の力はこんなモンかあッ!?! 戦闘員程度に好きにされちまつてよお!!」
「うぐらうッ!! おぶおお!! んぶうつええ!! おごお、んうつぐ!!」
「す、好き勝手言つて……でも、戦闘員に抵抗もできないだなんて……わたくしの身体、神聖なエナジーも……くうッ……」
口を開けば出てくるのは晒される暴力による潰れた悲鳴のみ。
心の中では悔しきで堪らないというのに、無理やり引きはがす力すら足りない。今まで雑魚として扱ってきた相手に、どうすることもできない無力感が募る。
「デケえケツ突き出しやがつて。こうして欲しいのかよッ!!」
パチイッ!!
「んひいひいひいッ!?! お、お尻い……おおほお!!」
戦闘員の手で無理やりに屈まされた結果、ムツチリとした尻を突き出す形となつてしまつていた。
背後にいた戦闘員の目に映るのはじつとりと汗ばんだ肉づきのよすぎる尻果実。それがもう一人の一撃ごとふるふるると誘うように震えれば、狙いたくなるのは必然。
先の背中を狙つた蹴りが、今度は変幻ヒロインの豊臀へと集中されることとなつた。
「んぶうあアッ!! くひいッうう!! おおつぽ!!
ああつひうう!!」
ドズウッ!! バアンッ!! スウンッ!!
拳が、蹴りが、シャインミラージュの腹と尻を集中して襲い続ける。
アレだけ強気な発言をしていた正義のヒロインが、戦闘員の力に抗うこともできずにただの闘り者にされている無様な姿に、この場にいる者で昂らない者

はいないだろう。

特に顕著なのは尻肉。まだ白さの残る豊かな尻果実が、黒い蹴撃の連鎖にどんどん赤く染まり、戦闘員の攻撃が確かに効果を表しているのを見せつけていた。

「お、お尻蹴られてしまうと……お、おちんちんが、なかで擦れて……びりびり、痺れてしまいますのお……!!」

更に変幻装姫を襲う不幸は、ミステイによって改造された雌肉棒の存在。

臀部への激しいスパンキングは、立派にそそり立つ肉棒をも同時に震えさせ、敏感な肉肌が擦れて痺れるような悦感を生み出してしまふ。

認めたくない。こんな声など出したくなんてないというのに、戦闘員の蹴りに押し出される形で、悲鳴のトーンが上がっていた。

「なんだあ!? 腹ブン殴られて、ケツ蹴られてんのに気持ちよさそうな声出しやがって。正義のヒロイン様はとんだ変態マゾってことかあ!」

ズドオオオツ!!

「おこおつぽお!!」

声の変化に気づいた黒い一撃が腹に一発。

「へへへ、こんなケツしてやがんだ。蹴られて気持ちよくなるもなつちまうよなあ!!」

パチイイイツ!!

「くひいひいひいひいツ!!」

真つ赤に染まる尻肉が同時に震えるほどのキツクが一発。

「戦闘員の攻撃が、こんなに効くだなんて……痛みが、響く……」

ただただ、戦闘員達は変幻ヒロインの口から惨めな悲鳴を上げさせる為に暴力を続ける。

「いいぞお!!」

「その調子でもつとやつちまえ!!」

ドルコスやデプロに敗北した時以上に、戦闘員とのショーは一部の観客を喜ばせていた。

無敵の変身ヒロインであった存在が、下級の存在を相手にボコボコにされているのだから、そこに興奮を覚える者にとつてはこの上ない最高の光景なのだろう。

「へへへ、盛り上がってるみてえだな。ならお次は……おい」

「わかってるよ。オラしつかり立ちやがれ雑魚ヒロインがツ!!」

「あうう……げほつ、くうう……あ、あなた達、いに加減に……んひいひいひいひいツ!!」

戦闘員の攻撃がやみ、何とか自由を得ることができた変幻装姫。だが身体は鈍い痛みと、肉棒からの淡い痺れによって激しく動くことができない。

そんな緩慢な動きのシャインミラーージュの股間が、背後にいた戦闘員によって蹴り上げられた。

慣れるはずのない急所への一撃。ミシミシと骨が碎けるのではという衝撃は、生えさせられた肉棒にも僅かなり加わり、凶悪な激感として変幻ヒロインの頭の中を真つ白に染め上げる。

顎は簡単に跳ね上がり視線は宙を仰ぎ、戦闘員の次の行動をすぐには確認することができない。

「避けられるもんなら避けてみるや!!」

「喰らいやがれシャインミラーージュツ!!」

「あ、うう……な、や、やめ——」

前後からの声に視線を戻すと、戦闘員が片腕に力を込め、肩から肘を水平にしたラリアットの体勢で駆けだしてきた。

チラリと背後を見ればもう一人もまた同じ形を作っている。これが何を意味するかなど考えずともわかる変幻装姫だが、痺れの残る身体は屈むことすらすぐには実行できない。

ただ無駄な静止を試みるだけであつたが当然、そ

れも無駄に終わる——

「えぐううう!!」

「く、首が折れ、るう……あ、ああ……」

前後から走って近づいてきた二人の戦闘員の太い腕部分が、同時にシャインミラーージュの細い首を挟む形でぶつかつた。

一瞬呼吸ができなくなるほどの圧迫感と、首が外れてしまったのではという衝撃。

変幻装姫の脳内に生まれる僅かな思考も吹き飛ばされ、グルンと意識を失つた証の白目を剥いた変幻ヒロインは、ビクビクと戦闘員の太い腕に支えられない形で脱力してしまふ。

「なんだ。こんなモンでもう気絶しちまうのか?」

「こんなんじやまだまだ足りねえんだからさつさと起きろや」

ズウンツ!!

「ひやぐううううツ!!」

正面の戦闘員の膝が、容赦なく改造肉竿を押し潰す形で叩きつけられ、脳天を抜ける激感に変幻令嬢は強制的に覚醒させられた。

まるでデプロにクリトリスを狙われた時の、痛みと快感が混ざり合った悪魔染みた刺激が何十倍にも膨れ上がったように感じられる。

自然と内股になりガクガクと脚を震わせる変幻装姫。その姿を見て、戦闘員達が何も思わないはずもなかつた。

「なんだ。正義の変幻装姫様はチンポが弱点つか。なら遠慮なくこうしてやるよ!!」

メギイツ!!

「ひいっぐうううう!!」

「お、おちんちん……壊れてしまってますのお……」

……つ、潰されて、身体痺れてしまつてええ……!!

ビクビクと震える肉棒へ、先の腹部と同じように戦闘員の拳が突き刺さつた。

堪らずに目を見開いて悲鳴を上げるシャインミラージュだが、確かに痛みと同等の悦感が駆け抜けるのを感じてしまう。

そのままM字で開脚をさせられた状態で抱え上げられ、まるで戦闘員に改造肉竿を見せつける恥辱のポーズ。

「んああっ……こ、こんな姿、下ろし……なさいい……!!」

辱めることを狙った行動に頬を真っ赤に染めて声を張るが、全身を襲う痺れに一切の力も入らない。ただ戦闘員の為すがままに、片方の乳房を剥き出しにし、コスチュームから溢れる巨竿がふるふると震えている。

「ハッ!! こりやいいいな。殴りやすい、いいチンポじゃねえか!!」

ズウンッ!! ドズウンッ!! バアンッ!!

「ひいひいっぐ!! ああああっひ!! くひいひいあッ!! そ、そこお……おちんちん殴るの……ひやぐうううッ!! お、おやめ、なさいい……んひいあああッ!!」

「い、いやあ……!! 戦闘員の拳で、おちんちんが暴れて……ぬ、抜けて、取れてしまいますのおお……!!」

一直線に殴りつけられたかと思えば、右から左からと、まるで殴る為の玩具のように扱われる。

敏感な器官が直接殴打される異常なまでの痛み。それと同時に生み出される、濃密な痺れ。

ただ身体を殴られるだけよりも脳を震わせるほどの衝撃の連打に、変幻令嬢の口から弱気な懇願が溢れてしまう。

「デプロ様の鞭でイッチまっただ変態なんだから、こうされて気持ちいいんだろが!!」

ズドオオッ!!

「んぎいひいひいひいッ?」

痛烈な前蹴りが改造肉棒にクリーンヒットし、潰れてしまったのではと錯覚するほどの激感に、シャインミラージュの全身がビクビクと痙攣する。

「い、痛みと一緒に、気持ちよさもだなんて……そんなの、嘘ですわあ……わたくし、そんな、変態ではあ……」

心の中では必死に否定するものの、段々と肥大化していく感覚は身体に刻みつけられていく。気持ちいいという、認めたくない最低の感覚が。

「おい、そのまま下ろせ。いいこと思いついた」

「わかった」

「んああっ……!!」

戦闘員の力が緩み、変幻ヒロインは受け身を取ることもできずに尻から地に落ちた。大腿を開いた無様な姿のまま仰向けに倒れ、弱々しく震えるだけの存在に、戦闘員からの更なる恥辱が加わる。

「殴られてただけでガチガチに勃起させやがつて。そんな変態にはお仕置が必要だなあ!!」

「こ、今度は何を……あああ……んひいひいひいッ?」

グレイイイッ!!

両脚を掴まれて持ち上げられたかと思えば、上から押し潰す形で戦闘員の足が改造雌棒を押し潰し始めた。

蹴りではない。単純に圧力を加えるだけの電気あんま。しかしどんどん感度を増していると思える肉竿に、永続的に刺激が送られるのはこれ以上ない悪夢染みた状況だった。

「んひいあああッ!! こ、こんな、ことに……くひいひい!! な、なんの、意味があ……あああッ!!

んぎいひい!! あっ、はひひい!!」

グリグリと踏み躪られるのは肉棒だけではない。正義のヒロインとして、一人の少女としての尊厳。

改造された部分を、戦闘員程度に弄ばれている屈辱。それも感じるのは痛みだけではない、明確な悦感を自覚してしまっているのが何よりも変幻令嬢を苦しめた。

「馬鹿言ってんじやねえよ。変態ヒロイン様に戦闘員程度に敗北したってことを認めさせてやんだよ。痛みだけじゃない方法でなあ!!」

「あひいひいひい!! お、おちんちん、潰してはああ……!! ひやぐうああッ!! ああっぎ!! んおっおお!!」

「け、蹴られていた時よりも、痺れるのが強くなつてえ……だ、ダメえ……何か、どんどん昇つてくるみたいでえ……このままでは、変にい……」

足の下でビクビクと震える肉棒から、全身に快感という名の麻薬が侵食していくのがとめられない。

受けていた痛みが少しずつ薄れ、甘い痺れが大きくなつていくのを確かに感じ取りながら、シャインミラージュは蕩け始めた無様な表情を見せてしまう。

「変幻装姫様の顔がどんどんアへつてんのがよく見えるなあ。チンポ苛められて悦びやがつてよお!!」

「ち、ちがっ……わたくしは、悦んでなんてえ……」

「うるせえッ!!」

「ミチイイッ!!」

「くほおおおおおおッ!!」

懸命に否定することも許されずに、より体重がかかり、駆け抜ける刺激にビグンと過剰なまでに反応を見せた。

肉棒の奥底から段々と何かが湧き上がつてくる感覚から逃れられず、だらしなく開いた口から唾液がとろとろと垂れ落ちる。

「うふふ、ただ殴る蹴るだけじゃなくてこういうのもいいわねえ。そのままやっちゃいなさい」

モニターに映るシャインミラージュの惨めな姿に、

ミステイも満悦の表情で更なる恥辱を期待していた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>